

---

# てんだーぶるー。 ~せかいがきれいでありますように。

雛月詩音

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

てんだーぶるー。～せかいがきれいでありますよ～。

### 【著者名】

Z1333E

### 【作者名】

雛月詩音

### 【あらすじ】

色々な理由から保健室に集まる女の子たちが、虚弱体質な友だちの恋のために頑張るお話です。「メティ」だったり、シリアスっぽいシーンもあつたり。

## 第一話（前書き）

作中、若干のガールズラブ描写があります。苦手な方はご注意ください。

## 第一話

はうへ、おなかいたいです……。  
ようやくトイレから脱出できました。うへ、三十分も経つてます  
し。

今日は慢性じゆじゆ型ムードでしたから。トイレに行つてもスッキリしないところ、慢性じゆじゆ型はだいぶ厄介な部類に入る腹痛モードです。いつまたおなかのキカン坊共が暴れ出すか分からないので、トイレ三十分の激闘をぐぐりぬけた今とて全く安心できません。こつものこととは言え、わがおなかの不甲斐なさには呆れるばかりです。だめな子です。

「……はふう」

ため息つきながら、わたしはよろよろと歩き始めました。  
目指す先はわたしたちの憩いの場。そこにてえ廻り着ければ、ひとまずの安心が得られるのです。  
けれども、

「うう」

おなかを襲う鈍い痛みに、わたしは思わずつづくまりたくなりま  
す。今日はちょっとタチ悪いようです。むつ……。

心配です。ちゃんと廻り着けるでしょうか。現在地・トイレ前から目的地である憩いのあそこまでは、校舎の端から端へ延びる廊下を渡り、さらに一階分の階段ぐだりというハードワークをこなす必要があるので。弱つたいまのわたしに、果たして無事やり遂げら  
れるかどうか。

しかし やらねばならない。

じどまつていても事態は進展しないのです。ひとは挑戦によつて  
進歩してきたのです。歴史の必然です。前進あるのみです。前のめ  
りで死ねよです。

ゆえに、わたしは大いなる第一歩を

「はう〜、」

踏み外してがくりと膝をつきました。

とゆうか、前進必須が歴史の必然ならば、ひとは一人では生きて行けないというのが社会の理ですしね。いまのわたしは孤独、留守番中にトイレのドアノブが外れたかのように心細い気持ちでいっぱいです。

どうしよう。

「さ、さくらちゃん、大丈夫？」

と思つていたら、天上から救いの声が降つてきました。

すこし細くて、やわらかい感じの、この声は。

「し、白ちゃんですか？」

「う、うん。おなかいたいの？」

「ええ……。ちょっと油断しました」

「えつと、立てる？ 肩貸そうか？」

そうして欲しいのは、やまやまなんですが……。  
わたしは、顔を上げました。

見慣れた女のこがわたしを心配そうな面持ちで見てています。その肩はとても細くて頼りなく、脱力気味のわたしがよりかかれば二人もろとも倒れてしまいそうなほどです。

「さくらちゃん、無理しないで」

「そ、そう、ですね」

いつもならば遠慮するところなのです。

でもいまは状況がよろしくなかつた。おなかいたいんです。心の余裕なしです。そんなところに優しい言葉をかけられたら、心が搖らぐのも当然です。背に腹は代えられませんしね。

だから、気付けばわたしは口に出していました。

「た、助けてください」

白ちゃんはうん、と笑顔で頷いてくれました。

「えつと……どうすればいいかな」

「すこしだけ寄りかかるべくれば、大丈夫です

「い？」「

「うそ、いい感じです。白ちゃんのまつも、負担になつてませんか？」

「大丈夫。もう少しだけ寄りかかつても大丈夫だよ」「はい……」

白ちゃんの細やかな心配りが、心に……といつよりおなかに染み渡ります。だいぶ楽になりました。持つべきものはともだちです。友情ぱわーで腹痛マイナス!「じゅっぱー」です。友情ぱわー。甘酸っぱい響きです。恥ずかしいときの気持ちにも似ています、とゆづかまんまです。

「もつとゆづくづがいい？」

「いえ、ちょうどいいです」

つらかつたら声に出さなくともこゝよ、と言つてくれます。「うっ、やつぱり白ちゃんはいいこです……」

わたしは白ちゃんに支えられて長い廊下を渡りきり、階段を何とか降りることに成功しました。

そして到着した、わたしたちの憩いの地。

それは保健室です！ むやみにテンションが上がりります。もつ安心です。

白ちゃんが横引きの扉をがらりと開きます。

「失礼します」

中にいた白衣の先生が振り向いて言いました。

「やあ、衣花、……とハザか。今日は調子悪そうだね」「保健の浅川先生です。

「薬いる？」

「いえ、だいじょぶです……」

「そか、あんまり無理しなによつにね。ゆづくづ寝ていきな」「はい」

返事もそこそこに、わたしたちはベッドに向かつて歩きます。

心配そうな声をかけてくれた浅川先生には申し訳ないのですが、

衰弱しきつた今のわたしには何より休息が必要なのです。

もう、ホールすなわけビッグでは数歩の位置。早く、横になりましょ、う。

視界の先で、ベッドを囲うカーテンが、窓からの風にゆるべやねりでいます。

白ひやんがそれを開けてくれて、「あ」一聲あげて固まりました。わたしも白ひやんのちこちな体にしてビッグを覗きます。

「……空氣読めです」

思わずそんなことを呟こしてしまったのは、やうにひとが寝ていたから。

タオルケットのまゝすやすやと、よだれ垂らして寝ている女の二。

「ああ、やい、相坂が寝てるんだ」

先生の言つ通り、わたしのベッドを奪つて寝ている不屈き者は相坂涙未ちゃんでした。

「起してどかそつか?」と、先生は言つてくれますが、「いえ、だいじょぶです……」涙未ちゃんならば遠慮問答、一切無用。

「か、かくらちゃん?」

わたしの行動に驚いた白ひやんが声をあげますが、わたしは早く横になりたいのです。

「うー、」

とか唸りながら、寝ている涙未ちゃんの体を押し出します。外へ、外側へ。軽いからわたしの力でも何とかこけます。じにゅきにゅきにゅき落ちです。

どしーんとこつよつぱすんだらーとこつ感じで、涙未ちゃんはベッドからずつ落ちてこきました。そのままみやがれです。

「ふ、涙未ちゃん……」

白ひやんの唇を後ろに、わたしは勝ち取ったベッドに潜り込みます。

そつとあおむけに体を横たえ、ほつと一息。そして保健室の天井を見上げました。

そこは真っ白でまつさう。空気まで、何だか漂白されていのよつな気がします。

背中にはやわらかなシーツの感触。それがゆつくりとお腹の痛みを吸い取ってくれます。痛みに眩んでいた視界がすうっと元に戻つていつて、よつやくわたしは落ち着きました。

「はふう」

じろりと寝返り。せかいは四分の一回転。

横倒しになつた身長体重計。

大小さまざまな薬瓶の並べられた棚。

流し台と湯沸しポツト。

大きな窓には夕陽のだいだい いつもの、ふつうの保健室。何となく安心するわたしです。

「落ち着いた？」

じぶんのベッドに上がつて体育座りとなつた白ちゃんが、声をかけてくれます。

「ありがとう白ちゃん、助かりましたよ」

うん、と頷く白ちゃんは、こんとひとつ、咳をしました。

タオルケットを羽織つた背中はちょっと曲がつていて、肩はびっくりするくらい細く、ときたま出る咳に合わせてちいさな体が揺れています。

白じを通り過ぎてわずかに蒼い顔には、わたしを氣遣う表情が浮かんでいました。

白ちゃんは、いわゆる虚弱体质というやつなのです。そのせいでしそつちゅう調子を崩して保健室で休んでいます。だからさつき、助けてもらつのにわずかな遠慮があつたわけですけど……。

ちなみにわたしは腹痛持ちで、同じく保健室常連だつたりします。

「横になつたおかげで、ずいぶん楽になりました」

白ちゃんの表情がすこし、やわらぎます。青く儂い微笑み。いつ

もの白ひきさん。

「咲ちゃんのほりせ、調子はどうですか？」

「私は、いつも通りだよ」

「……そうですか」わたしはその返事に、ただ笑顔を返します。

「そういえば今日は一人でしたね。一咲ちゃんは？」

「たまたま用事があるって。すぐに帰つかけた」

「それは珍しい」

そんなふうに話をしていると、

「うう」

ベッドの下からうめき声。涙末ちゃんが頭をおしゃながら起きあお上  
がつてきました。

ていうか起きるの遅つ。ベッドから落つたりすすぐ目覚めてく  
ださいよ人として。

「んあ……」

寝ぼけた声を出して、左右を見回します。

「……めがね」

めがね、めがねともはや出典不明な伝統台詞を囁きながら、わた  
しの枕のあたりをまさぐる涙末ちゃん。わたしは顔を撫でられる前  
にめがねを渡しました。

「あ、ありがとう」「めがねが頭の上にあつたら完璧だつたの」。

「おはよう涙末ちゃん」

「あ、もみじだ。おはよ」

愛用の下ぶちめがねをかけると多少しゃつきりしたのか、涙末ち  
ゃんはゆるい笑顔でご挨拶。口元にくつついたよだれをぐいぐいぬ  
ぐいながら。

「ベッド、もうこまましたよ。おなか痛かったので」

「うん。もみじなら許す

偉そうな涙末ちゃん。あなたのじゃないですしお

「いつから寝てたんです？ 昼休みくらいから消えてましたね。そ  
れからずっとですか？」

「うんそつ。お皿(いさな)はん食べたら、なんか眠くなつたからさ」

「……今日来たの、いつでしたっけ」

「……いつだつたかなあ」

もう覚えてないんですか。三時間田の終わりでしょうが。

「あれ、今つて何時?」

「もう三時です。授業も、ホームルームも終了」。放課後ですよ

「そつか。ガツコも終りだね。お疲れさま」

一時間未満しかまともな学校生活を送つてないひとの言つていい台詞じやありません。

「うーつ、眠氣も覚めたかなあ」

盛大に伸びをしながら、心底氣持ちよれやうな声出されたら何も言えません。

「ふふ、涙未ちゃん、寝癖できてるよ」

白ちゃんが楽しそうに笑つて、涙未ちゃんの頭を軽く撫でます。

「んあ、白たん、くすぐつたい」

涙未ちゃんは気持ちよさそうに目を閉じて、されるがまま。

白ちゃんに撫でられる涙未ちゃんは、なんだかペットちっく。イメージ的には逆なんですが……というか、わたしが白ちゃんを撫でたいです。わたし、白ちゃん、涙未ちゃんのなで連鎖。いいかもです。今は位置関係的にむりなのが悔やまれます。今度わたしが元気なときにもやってみるとしよう。

「ふふ、涙未ちゃんの髪の毛、わたくもみたい」

白ちゃん楽しそう。

「とこりうでぞ」

ふいに、涙未ちゃんが意地悪げな声を出しました。

「白たん、最近先輩の件はどうなのよ?」

「えつ」

驚き田を瞪る白ちゃん。

撫でていた手が引っ込みます。

俯き、見る見る内に顔が桃色に染まつていきます。

見てる」ひちが恥ずかしくなるくらい、ものすごい変化です……。

「ううん、相変わらず……ダメダメです……」

なぜか丁寧語で現状報告するだけじゃこの体が、すこしこそへくなつたよつに見えました。

## 第一話

由ちやんは、先輩が好きなのです。

恋といつやすです。

でも、今のところ、なかなか進んでいないのです。

「あんまり、会えないし。会えても廊下でれちがうくらいで、挨拶はしてくれるけど」

「うーむ、そつか。ユーカリ先輩だっけ？」

「ううん、<sup>もうたり</sup>タ足先輩。 笹じやないよ」

いえ笹でもないですが。パンダとコアラが、『うちやん』。

夕足先輩。いつこ上の二年生で、生徒会書記。

それくらいの情報しか、わたしは知りません。涙末ちゃんは顔くらい知つてゐようですが、わたしは見たこともないです。

「ちょっと立ち話、してみるとか」

「そつ」声が裏返りそうに。「そんなの、むりだよう」涙末ちゃんは首を傾げます。

「そういうもの？」

「うん……。だつて何、話していいか、わからないし」

「初めて会つたとき先輩に助けてもらつたんでしょう？ だつたら、その話とかでいんじやない？」

「でも今さらだし……」

頭を抱えてうつむく由ちやん。恼ましいですね。接点がないことつらいです。

「もたもたしてると、誰かに取られちゃうかもよ……？」

わざとらしく声をひそめてそんなこと言つても説得力ないです。

ないのですが、

「うう……」

由ちやんはタオルケットをかぶつて防御体勢を取つてしまいまし  
た。

「先輩のこと、好きなんでしょう？」

つりつり、とにかくしながらタオルケットバリアーを突つづく涙未ちゃん。中から白ちゃんのぐぐもった悲鳴が聞こえます。ソフトえすえむ。

「で、先輩のどこがいいんだっけ？」

結局、話はそこに行き着きます。これはこれでいつものことだったり。

「うん……」

タオルケットから顔だけ出して天むすになつた白ちゃんは、恥ずかしそうにもじもじと、そして次にぼうっとした目付きになります。自分の気持ちを見つめる田。夢見るような、ふわふわとした。春風のような、あつたかい。そんな感じの気持ちです。

「先輩はね……」

そして、両の頬を真つ赤に染め、俯きがちに、だけどとも幸せそうに口元をゆるめて、先輩のいいところをこづつ挙げていくのです。

もこもこの、綿菓子のような。

焼きたての、アップルパイのような。

女の子のからだは砂糖菓子でできているとか言いますが、白ちゃんに関する限りそれは事実と言えましょう。

ちなみに、わたしは甘いものが大好きです。お腹には、よくないのですが。

はあ、白ちゃんを見ていたら、すこしお腹の調子がよくなつました。白ちゃんはわたしにとっての最高のお薬です。

……冗談ですけどね？

「あんたら、青春してるなー相変わらず」

カーテンの向うから浅川先生の声が聞こえてきます。青春。毎度ながら、いまいちピンと来ない言葉です。

「せんせもまだまだいけるよ。セーシュン、セーシュン」

「ははは。あたしはもうだめだよ」

「そんなことないよ。せんせ美人だし」

「ありがとう相坂。そんなこと言つてくれるのはあんただけだ」

「いえいえどういたしましてっす」

ははは、と笑いあう二人。微妙にきわどい会話です。

先生と涙未ちゃんのやりとりを眺める白ちゃんは、もじり元の、すこし青白い表情に戻っています。先輩の話をしているときよりも、落ち着いた様子。

穏やかな顔。

たぶんわたしも、似たような顔をしていると思います。

ここは 保健室は、居心地がいいのです。先生はいいひとだし、みんながいますし。

こんな時間が、ずうっと続けばいいなあと、ときどき思います。でも。

「青空つて、きれいだよね」

白ちゃんは窓の外を見て、とつぜんそんなことを呟きました。

「でも、すこし憂鬱」

つられてわたしも外を見ます。

雲ひとつない秋晴れでした。わずかに傾いた太陽が端まで真っ青な空を白く照らす、寒々しい景色。

「せかいが、もうすこしきれいならいいのに」

白ちゃん、詩人。

「……そうですね」

わたしは、相槌を打ちます。

保健室のお世話になりつ放しなわたしたち。青空の自由なイメージには、憧れと嫉妬みたいなものを感じます。

病弱<sup>テングーブル</sup>ゆえの憂鬱。

いつも体の調子に悩まされているわたしたちにとって、憂鬱は常にかたわらにあるものです。

保健室の時間が、どれだけ楽しくても。いえ、樂しことさせぼく、すっと気持ちに入り込んでくるわたしたちの憂鬱。

だから 普通に、楽しいだけじゃなくて。

もうすこしだけ、ちょっとくらい、いいことあるよつこつて願つても、罰は当たらないんじゃないかと思つのです。

例えば、

白ちゃんが、夕足先輩と、恋人どうしになれますよつこ、とか。青空を見上げる白ちゃんの、すこし曲がった背中と細い肩を見ながら、わたしはそんなことを思いました。

+ + +

「白たん、いる?」

天気は快晴。きれいな青空が広がる、つらうかといつこはすこし寒い秋の一日です。

いつものように保健室で憩つていると、すこしだけ開いた保健室の入口、扉の隙間からそんな声が聞こえてきました。

「いや、何してるんですか涙末ちゃん」

ふつうに入つてくれればいいのに、こつそり覗きの体勢。何がしたいんでしよう。

「白ちゃんならいませんよ。今日はお休みです

「そつか」がらりと扉全開。

「白ちゃんに何か用」「うひつ!」

涙末ちゃんは、きゅうに大声を出して立ち止まりました。

その視線の先には、ひとりの女のこがこます。

「……なに?」

仏頂面で文句ともただの質問ともつかない声を出したのは、未樹

一咲ちゃん。白ちゃんのクラスの保健委員さんです。

「……白たんいないつていうから、てつきりいないと思つたのに」

涙末ちゃんは小声でぶつぶつ言いながら、物陰に隠れるように保健室へと入ってきます。

一咲ちゃんは保健委員なので、白ちゃんがここに来るときはいつも

も付き添つています。逆に、涙未ちゃんがいないときは、あまり来ません。

まあ、来てもあんまり話せないんですけどね。

「びっくりしたじゃないか、もつ……」

まだ言つてますし。本当に苦手なんですね。

涙未ちゃんは、一咲ちゃんをやや恐れています。

なぜなら、一咲ちゃんは、まじめだから。

わたしや白ちゃんと違つて、涙未ちゃんが保健室に来るのは寝るためです。そんな理由でベッドを使う涙未ちゃんを、あまり一咲ちゃんはいい目で見ていないのだ、とこりのうのが、涙未ちゃんの主張。

それが正しいのかどうかはさておき、実際のところ、けつこり怖い感じ醸してるのは事実かもです。短めに切つた髪と、きりりとした一重まぶた。ぴんと伸ばした背筋は無愛想さと相まって微妙な威圧感を生み出しています。本人はたぶん自覚してませんが。

「で、涙未ちゃん。白ちゃんに何か用ですか」

「う、うん、ちょっとね」

わたしは自分のベッドに座つて、生徒なのになぜか薬棚の整理などしている一咲ちゃんを横目に見ます。何でこんなことしてるんだしあうね。乱れてたから勝手にやつてるんでしょうが。まじめだから。

涙未ちゃんはぱたぱた歩つてきて、わたしの隣の腰を下ろします。そしていきなり横になりました。

「何ですか、寝る気ですか」

「いや、反射的に」あなたいつかのび太つて言われますよ。

「今日来たの、五時間目でしたよね」

「うん」

「お風呂まで寝てたんですね」

「そうだよ」

「こつも思つんですけど、だつたら学校来なくてよくないですか

? 「どうせ来ても寝てるんですし」本当にのんびり寝すぎです。

「いや、ぼく皆勤狙つててやー」

「は?」こまかに勤とか言いました?

「ほら、ぼくって成績やばいでしょ? だからもうひとつでもここのことじとこつかなかつて」

いや……確かに、遅刻率百パーセントながら欠席率はゼロ、です  
けど……ね。

わたしの目から、涙がどつと溢れました。

脳内の話ですが。明らかに皆勤条件を勘違いしていますこのひと。

「どうわけで、ぼくは一日たりと休むわけにはいかないのだ」

「ぶしどか振り上げられても。

いや、あなたの皆勤はどうでもよくのですね

「何おう、ぼくにひとつは重要なことなのこー」

かわいそうなひとです。

「はいはー」

「むひー!」

「で、白ちゃんに何の用だつたんですか?」

「あ、そうだそれだよ」

涙未ちゃんの表情がすこし、複雑になりました。安心と残念が一  
緒になつたような顔。

「いやや、ゴーカリ先輩、いるでしょ？」

「ええ、白ちゃんの想いひととこいつですね。」

「あの先輩がさ、女の子と一緒に喋つてたんだよね」

……むつ。

「それはべつに、おかしなことじやなくないですか？」

「いや、場所が問題なのさ」

「ばしょ。どこです？」

「屋上近くの踊り場だつたんだよ」

「つまり……あれですか。視線的密室で、一人つきりだつた、と  
うむ、と頷く涙未ちゃん。

それは……。

たしかに、一大事かもです。

「見間違いとか、勘違いとかじやないですよね」

「しつ、失敬だなきみは！　ぼくはそこまでもつれへしてないんだ  
ぞっ」

「もうろくとか言つてませんし！？　まあ寝つ放しのひとが言つても説得力ないですけどね。脳あんまり働いてないんじやないですか？」

？

「ふふん。脳細胞を休ませてるのや」

認めてますし。誇らしげな意味が分かりません。

「だいたい、屋上つて。なんであんなとこ行つたんです？」

屋上は鍵かかってて、出られないはず。

「いや、屋上に用はなくて。あの辺つて余つた机とか椅子が積んであるでしょ？　だから、いいベッドにならないかなあってけつときょく睡眠ですか」

「あんなところで眠れるんですか？」

「どうかな。試してみないと分からぬよ」

「埃とか積もつてそう。喘息になりそうです」

「ううん、そう言わると、ちょっと怖いかも……」

「大体、なんでわざわざ？ 保健室は？」

「たまには静かに眠りたいときもあるってね」

なんですよ。

言つに事欠いて、このひとは。わたしのベッドを奪つてゐるくせにー。まあ、でも、静かに眠りたいといつ氣持ちは分からぬいでもないです。

「ときどきは、こっちにも来てくださいよ？」

「うん、やつするつもり。ここはやっぱり居心地いいからねえ」

そうですよねえ。

「涙未ちゃんの寝床なんかどうでもいいんですよー。それより白ちやんの話です！」

「自分から突つ込んだくせに！？」

「そうですね。そろそろ現実を見なれば。

「すいません。で、誰なんです？ そのお相手は」

「えつと」すこしの間。忘れかけてるんじゃないでしょうね。「何てつたつけあの、二組の……微妙な茶髪の……」

三組に微妙な茶髪の子は何人もいるので、よく分かりません。

「うつむ……、気になります……」

「うむ」

「よもや、付き合つてゐるのではないですね？」

「うーん……、楽しそうに話しては、いたけどねえ」

楽しそう、ですか。

ひとりのないとこりで、一人つきりで。

……やっぱり、ふつうに考えて、あやしいです。

もし付き合つてゐなんてことになつたら、田中やんはびつすればいいんでしよう。そしてわたしが……、ええと。どうしよう。

そう、それを考へる前に、まず。

「確認です」

「え？」

「先輩が付き合つてゐるのかどうか、確認しに行かなければ…」

「お、おう」

「せつせつて言いましたよね？」

「うん。まだいるんじゃないかな」

「行きましょう。すぐに」

ぱっとベッドから降りて、涙末ちゃんの腕を掴みます。

「わあ、待つてよ、もみじ」

「急ぐのですー！」

出でわ、ふと氣になつたので、わたしじつとだけ振り返りました。

「一咲ちゃんも、行きますか？」

なんだかわたしたちのほつを、気にしてたふうでしたので。

彼女は視線を棚に向けたまま、「……、「すこし間があつて、

「私はいいよ。覗き趣味とか、ないから」

「そうですか」まあ、あんまり大勢で行つても逆に不便かもしけません。

せん。

でも、覗き趣味つて、ちょっときついですか？

+ + +

「もし付き合つてるつてなつたらや」

わたしと涙末ちゃんは、競歩状態で屋上を田指します。走るのは  
厳禁です、わたしたち的に。なぜなら疲れるから。

「どうするの？」

「明日は休みます

「お腹痛くなるから」

「はい」

ストレス性腹痛です。しくしくモードです。わたしのお腹は、ナ

「イーヴですか？」

「それで、お家で布団にくるまつりびりするか考える？」

「そうですね」考えたくもないんですけど。ああ、考えなければならない状況を思うだけでお腹が……。

「つづくまりたい。でも、そんな場合ぢやないです。

「まあ、ちゃんとしたこと考えるのは、確認してから……こしましょつよ、ねつ？」

「そだね。……なんか必死だね」

当たり前です。白ちゃんのことなんですから。

「そういう涙未ちゃんは、どうするつもりなんですね？」

「ぼく？　うーん……」

腕を組み、あごに手を当てる涙未ちゃん。わざとらしく考えるポーズです。何やら一ヤけてきましたし……。

「ゴーモンかな」

「はあ？」

「付き合って続けて、ゴーモンされるか、別れると言つて、ゴーモンされるか、えらべーってね」

「鬼畜ですね！　どつちみち拷問じゃないですか。だいたい具体的には何するつもりなんですか？」

「具体的について、もみじのほうが鬼畜だね」

哀れみと畏れのまじった目で見られました。理不尽です。

そしてわたしたちは、屋上への階段に到着しました。急いで階段上つたので、ちょっと疲れた……。涙未ちゃんも微妙に息が荒いです。運動不足な二人。

「この上に、誰かがいるかと思つと、いやでも慎重な足運びになります。そろそろと、無駄に壁に手を添えて、上を伺いながら歩を進めます。探偵とか、スパイとか、そんな気分。

いや涙未ちゃん明らかにおかしいですし。なんで背中を壁に当てて両腕真一文字なんですか？ 意味分かりません。

物陰から飛び出すときに飛び込み前転しそうな友だちは放置して、

わたしは階上に意識を集中します。

ひとの声が、きこえてきました。女子の声。

やつぱり、まだいました。

わたしたちはいよいよ壁との一体化を進め、床を這いつぶつにして上を手指します。すこしでも近くへ。でも、ばれないように。

「……で、そのときね……」

つこに階段を上りきってしまった、わたしたちは彼女たちと同じ高さつまり屋上の入口に到達しました。さいわい、壁と、積み重なった机や椅子が、わたしたちの姿を隠してくれます。

もう話しの内容が分かるくらい、女のこの声ははつきりと聞こえます。わたしたちはすこしの間、その場で聞き耳を立てました。

どきどき。

「……その子が実は、片耳が聞こえなかつたことが分かるんだ」ドラマか何かの話でしょうか。

女のこの声は確かに、楽しそうです。相手になつてゐるはずの先輩の声は、よく聞こえないのにどんな感じかは分かりません。

「……ショックだったよ。ただ意地悪してるだけかと思つてたしさ」弾んだ声が、狭つくるしいその場に反響します。踊るよつな調子で、その女のこは話し続けています。

なんといふか、妙にむずむずする声です……。じつにうかんじ、どこかで聞いたことがあるような。

「ね、あたしの話、面白い？」

一転、ちょっと声をひそめ、不安そうな調子でそう聞きます。なんか初々しいですね。付き合つてゐるほかない気もしますが、付き合い始め、という感じもします。

(よく分かりませんね。覗いてみましょ) 超ひそひ。

(いえつせー) サムアップは余計です。

そもそもと、田が合いませんようこと願いながら、顔を出します。壁の影から一人トーテムになつて先輩たちを盗み見る、わたしたちです。我ながらあやしい。確かに覗き趣味とか責められても、文句

言えない気がしました。

ともかく、女のこと先輩が、向かい合つて机に腰掛けているのが見えます。

(あれは)

女のこの顔が、見えました。

小麦色の肌に、微妙な茶髪。短めのスカートから、自己主張の強い足が伸びています。

(月島、沙耶子さんですね)

(あーそうそう、そんな名前だった)

月島沙耶子さんは、派手な子です。クラスが違うので大した接点がないんですが、体育の時間などは一緒になることがあります。いつも何人かで固まつて、大声で笑つてる。軽いノリ。そんなイメージがあります。

正直、意外です。白ちゃんの話から受ける、夕足先輩の真面目で優しいイメージとはズレがあります。先輩はどちらかといえば、白ちゃんのような女のじらしくてやわらかいイメージが似合つ系のはず。

(忘れてたよ。個人的にはちょっと、派手系は苦手でも)

(わたしもです……)

いつも元気で快活に過ごしてゐる彼女たちとは、わたしにとつてまるで遠い世界の住人のようなのです。

何だか、体調で悩んだこととか、なさそうで。

ちょっと近寄りがたいというのが、本音です。

涙末ちゃんも雰囲気的にはわたしたち寄りですし（だから保健室が居心地がいいとか言つわけで）、苦手だと言つのも、無理もない気がします。

「……でも、最後はやっぱり、死んだよな……」

月島さんは、何やら哀しい話を楽しげに行つ、という器用なことをやっています。彼女が先輩に好意を持つてゐるのは、もう明らかですね。一応、彼女のほうから一方的に、先輩に言い寄つてゐるだ

けという仮説が成立します。

だけど、問題は、先輩です。どう思っているのやう。

相変わらず先輩の声がよく聞こえないのが、もどかしいです。先輩がソープラノだつたらもうとよく聞こえたはずなのに！

丹島さんは、延々とドラマか何かの話を続けています。先輩は基本聞き役なせいか、殆ど喋ってなさそう。わたしはその声を聞き取ろうと必死です。もう今すぐ出て行つて目の前で話を聞いてやりたいくらいです。一人の目の前に仁王立ち。そうして付き合いジャッジをしてあげたい。

「あ、もうこんな時間だ。今日、友だちと待ち合わせしてるんだ、あたし」

ああ、話が終わつてしましました。

(やばいです、逃げましよう)

(い、いえっセー) サーティ二アムでしうが。

ひとつと引っ込んで、撤収です。何だか行きよりどきどきしました。

## 第四話

とりあえず、屋上行きの階段のすぐ側で待機です。一人が降りてくるのを偶然そこにいただけですよみたいな感じでやり過ごすつむり。

たつたつたと軽やかな足音ごと、と、と、と落ち着いたものが重なります。

「じゃあね、先輩。またね」

「うん。またね」

月島さんが、先に階段を降りてきました。手を振ります。

「……？」

つと、月島さんと、目があつてしましました。怪訝そう、というにはちよつと厳しめの目つきで、わたしたちを見ています。……ばれてるわけじや、ないですよね。

すると、彼女は携帯を取り出して誰かに電話をかけ始めました。

「あ、貴子ー？ 用事終わったから、今からそっち行くからー」

そんなことをでつかい声で言いながら、月島さんは階下へ消えてゆきました。

その様子を、ぼうっと見守るわたしたち。

「結局、よくわかりませんでしたね」

「そうだねえ」

「どうしましょ」

「うーん」

腕組みして考える（よつに見える）涙末ちゃんですが、その顔が、

だんだんおかしな具合に歪んできました。にやにやと。

「……先輩は、今、ひとつ」

「……そうですね」 そのはずです。

「これは、チャンスだね」

「何のです？」

「うふふ、拉致、監禁ですよー。」

ラチ・カンキン。

……まじですか？

「監禁で。何する気ですか？」

「ちっちっち、甘いね、もみじ」ひとさし指が若干つぞこです。

「決まってるじゃないか。ゴーモンして、白状させるんですよー。」

またそれですか。あなた「ゴーモンて言いたいだけと違いますか。

……うわあなんか楽しそう。日光つてますし。

「なるほど、それはいいんですけど」よくもないですが。「どうじゅーへー。」

「保健室でいんじやない？ ちょいと今日、血たんもいなーしゃ」

「一咲ちゃんがいますけども」

涙末ちゃん、フリーズ。

「問い合わせてたら、また一咲ちゃん内の涙末ちゃん株が下がりそつですね」

「……いや」

自分で言つておいてなんですが、悩みすぎですし。そんなに一咲ちゃんのこと苦手なんですかこのひとつは。

でも、ある瞬間とつぜん、吹つ切れたような笑顔を浮かべました。

「何か問題？」

脳内デリートしましたね。

そんないい顔されると、逆に不安になります。まあ、そこまでいかがわしいことするわけじゃないでしょーし、いいんですけどね。たぶんですが。

「まあ、拷問とかは置いといて。保健室に連れ込んで尋問するのは、いいかもしないですね」

あそこなら、そう邪魔も入りませんし。

「よし、その方向で行きましょう。となれば、早速先輩を捕まえねば」

「おーー。で、先輩どこ？」

「もうとっくにどつかきましたけどね。でも、生徒会室方面へ歩

いてるんじゃないですか？

「あ、そだね」

ひょっとして見つからぬまま終わるかもと心配したのですが、  
さいわい、先輩はすぐに見つかりました。

「ちょっと、すこません、夕足先輩」

ゆっくり歩く先輩の背後に、声をかけるわたしです。

「うん？」

振り向いてわたしを見る夕足先輩。

いま初めて先輩の顔をまともに見ましたが、とりたててイケメン  
さんではありませんでした。まあ、わたしとしては、そのほうが話  
しやすくて助かるのですが……。イケメンさんは苦手であります…  
…。

しかし、表情は柔らかく、優しげでひとつきやすい雰囲気が滲んで  
います。なるほどこれは、白ちゃんが好きになつたというのも、  
何となく一目で分からぬでもない気がします。色白で線が細  
いところも、ポイント低くないです。まあわたしがどう思つかなど、  
どうでもいいのですが。

「ほり、涙未ちゃん」

本題に入りたいんですが、今すぐちょっと来てくださいことは、言  
いづらい。いきなりですし。だから言ひだしつぺに悪役になつても  
らうことにします。

「んえっ」

なんだか妙に下がった位置にいた涙未ちゃんは、わたしに腕を引  
っ張られるとへんな声を出して驚きました。

「ほり、用があるんでしょ？」「先輩に」

「うーん」

背中を押して、先輩の目の前に突き出します。先輩は、ちょっと  
怪訝そうな感じ。無理もないですけど。

「あ、あの……えつと、ですね」

しじるもどり。わざきまでの勢いはどこにいったですか。

「あの……その、」

俯いて、もじもじと、まるで歯領を得ない涙末ちゃんです。いま思い出しましたが、このひと、意外と男のひとが苦手なのでした。目を合わせるどころか顔を上げることさえできません。涙末ちゃんはへたれやううです。

そんなことで、リチカンキン「ローモンコージョクだなんて。かたはら痛しです。

「ええと……」

先輩は、困惑の度を深めつつあります。それでも落ち着いた雰囲気が崩れないのは、さすがといつべきでしょつか。

それにもこの状況、今から涙末ちゃんが先輩に告白しようと/orしてるように見えなくもなくて、何か微妙です。

「ええい」

辛抱できなくなつたわたしは、へたれ涙末ちゃんを押し退け先輩の前に立ちました。仕方ないです。

「先輩、お願ひがあるんですけど」

「うん、何かな」

先輩の微笑みを見た瞬間、わたしの中で、ヤル気がちょっと萎みました。

「ええと、ですね」ごめんなさいわたしもへたれでしたっぽい。

ええい、やらいでか！ これには白ちゃんの未来がかかっているのです！ わたしがやらずに、誰がやるー。

「先輩っ、ちよつ、ちよ……、」

「へつ？」

うわ、そんなびっくり顔は、ちよつと心に痛いです。何言つてゐるんだろうわたし。

「ええと、ちょっと、保健室に来てもうえませんか？」

普通に言えたです。

「あ、うん……、でも、どうじゅ?」

どうして?

ああ、うん。そうですよね。そりや、理由、気になりますよね。白ちゃんがあなたのこと好きなのにあなたが他の女子と一人つきりで話してるから実際のどいうじゅなのですか?

と聞きたいんです、けど。

「ともかく、一大事なのです!」嘘は言つてない、と思います。「ですよね、涙末ちゃん?」

「え、あ、うん」ぼさつとしてないで何か言つて欲しいです。

「大事、だね。白たんの」

「白ちゃん? 衣花さんの?」

先輩の顔色が、さつと変わりました。おお、白ちゃん、夕足先輩は白ちゃんのことをちゃんと心配してくれています。……。でもちょっと、驚かせすぎですこれは。だつて目付きが、こんなに、するどい……。ああ、一大事とか言つたら、そんなふうに思つてしまふのも無理ないことかもしれません。

「あ、いえ。一大事とこいつが、別に白ちゃんの体がどうとこうわけじゃないです」

休んでますけど、たぶんいつものちょっとした体調不良でしあし。

「そりなんだ」すこし表情が和らぎました。

「ええ、まあ、別の意味で一大事といつか。ちょっと、保健室まで来てもらえればと……」

もう拉致でもなんでもないです。ただ普通にお願いしていただけです。

「うん、そうだね……いいよ」

「おっ」おお、話のわかるひとです。

「意外にあつさりだね……」

涙未すけめ、何も言えなかつたくせに残念そりひるのほやめてください。

先輩を連れて扉を開けた瞬間の、一咲ひやんの呆れ顔は向つ一面  
くらい忘れないと思います。覗いた上に連れてくるだなんて。信じ  
られない。そう言つてゐるよつて見えました。すこし被害妄想っぽい  
ですけど。

「どうぞ、お座りになつてください」先生の椅子を勝手に引きずつ  
てきて、勧めます。ただの事務用椅子ですが、座布団とか何気に良  
質で、座り心地いいのです。いまは先生もいませんし、好き放題で  
す。

「で、わたしたちはこつものベッドに落ち着きます。

「お茶は出せませんが……」ビートしまつてあるのやひ。

「いいよ、お気遣いなく」先輩は、ビートか遠慮がちに椅子に腰掛け  
ます。

「それで、どうして僕は、ここに呼ばれたのかな?」

「はい、单刀直入に言いますけど」

「うん」

「やつは言つものの、ちょっと聞きました話です。とはいえ、いま  
で連れてきといて、ところひとつあります……」口はまわへ、勢い  
で。

「先輩、円島さんと、付き合つてゐるんですか?」

「つづら、付を合つてないよ」

笑顔でさつと否定です。

お話し、終了。

……いやいや。

「これは、とても重要なことです!だから、ちゃんと確認せねば。  
ところが大体、いつこういつこうして隠すものじゃないですか。よく分  
かりませんけども。」

「本当ですか?」

「本当だよ」

……むづ。

「じゃあ……」わたしの後ろで震れるみつにして、涙未ちゃんが口を出していました。

「わざわざ丹島さんと、階段の上でも話したりして？」

男のひとが苦手な割に、聞きついこじをはつきつ聞くひとです。

「ああ、やっぱ、見られてたんだね」

先輩の顔に、やましげなところはありません。

「最近、何回か彼女に誘われて、ひょっと話してただけだよ。付き合つてるわけじゃないんだ」

「では何故、ひとけのないところにいるの？」

「彼女の希望で。僕としては、断る理由はとつあえずなかつたから、いいかなと思つて」

「むむ、紛らわしいです。まあ、おおっぴらに話してたとしても、結局同じ騒ぎになつてたかもされませんが……」

「じゃあ、本当に、付き合つてないんですね？」

「うん、付き合つてないよ」

「そうですか……」

わたしの目には、先輩が、嘘を言つてこむみには見えませんでした。先輩のことはよく知りませんけども、このひとの雰囲気だったら、隠すことが必要になるような付き合つてしまいしないんじゃないとか。そんな気がしました。

それに、白ちゃんの好きなどです。あんまり疑いたくない気持ちも、あります。

「分かりました」

涙未ちゃんと顔を見合させ、頷き合います。信じるひとします。

「聞いたかったのって、そのこと？」

「ええ」

今度こそ、本当に話が終りました。すると、すこし恥ずかしい気持ちが湧いてきます。半ば無理やり保健室に連れ込んで、わたしちは何を聞いてるんでしょう。こえ、安心はできたので、いいんですけれど。

「じゃあ、僕はこれでいいかな?」

「あ、はい。すいませんでした。お忙しいところを」

「ううん、今日は忙しくなったから。大丈夫だよ」

やわく微笑んで、立ち上がる先輩です。そして、保健室の扉のほうへ。

終わってみれば、ここに白ちゃんがいればよかつたのこと、そんなふうに思います。まあ、問い合わせてる現場はちょっと白ちゃんには見せられないのでは、仕方ないといえばそなんですが……。

「あーっ!」

わたしは、素つ頓狂な声をあげました。

みんなが驚いて、わたしを見てします。

「あ、いえ」恥ずかしくなりました。でも、名案を思いついたので仕方ないので。

「あの、先輩、お願ひがあるんですけど」

「うん？」

「ときどきでもいいので、ここに 保健室に、来てもらえないませんか？」

そう、今はまさに、チャンスなのです。

せっかく保健室に連れてくることができたのですから、これからも継続的に来てもらうようにしないなんてありえません！

「あっ、そうだね、それ、いいね」涙末ちゃんが同意してくれます。ついでだから一咲ちゃんにも応援して欲しかったのですが、彼女は残念ながら、無言。

先輩は一瞬だけ怪訝そうな表情になつたものの、わたしたちの目をちょっとだけ見て、何か理解したような雰囲気を醸しました。

「うん、分かった。あんまりショッちゅうは来れないかもしねないけど、できるだけ

ね。

断られたらどうしようと内心どきどきしていたわたしは、ほっと息を吐きました。

うふふん、やりましたよ。これで先輩が、ここに来てくれます。

白ひやんの喜ぶ顔が、目に浮かびます。

あの、甘くて嬉しい、砂糖菓子のような笑顔が。

「いえーい」

先輩が去つた後、わたしと涙末ちゃんは、この度の成功を祝つてゆるゆるとハイタッチ。普通にやると痛いので、わたしたちは控えめです。

「やつたねえ、もみじ」

「これも涙末ちゃんが、意味のわからない理由で校内を徘徊していくお陰ですよ」

「いや、ぼくだけじゃ話しかけられずに終わってた。もみじがいてくれたお陰だよ」

「いやいや、涙末ちゃんがいなかつたらわたしも勢い足りず、無理でしたよ」

「あーいやいやいや、やつぱりもみじが」

「いえいえ、涙末ちゃんが」

「もみじが」

「涙末ちゃんですよ！」

「もみじだよ！」

「何言つてるんですか！ 涙末ちゃんがラチカンキンとか言い出しだのが原因でしょ！ しかも肝心なところでへたれてわたしに頼つた癖に！」

「なつ、何おひー。せつかくぼくが椅子に縛り付けて、ゴーモンしうとしてたのに、もみじが口出すから普通に聞くだけになつたりやつたんじやないか！」

「変態ですか、変態プレイですか！ 謝りなさい、先輩に謝りなさい！」

「なんでやつてないのに謝らなくけやいけないんだ！」

「あなたの頭の中で大変なことになつた先輩に謝りなさい！」

「いいじやないか！ 考えるだけなら犯罪じやないんだから」

「……まあ、それはそうですね」

「でしょ？」

「そういうえばわたしもときどき、おかしなことを考えることがあります」

「そうやつ。誰にでもあるもんだよ」

「やつですね、問題ないですね」

何の話しか分からなくなつてきたので、適当に切り上げます。

わたしはベッドに寝つ転がりました。ともかく、ちょっと気分いいです。」「うううううううう、お腹の調子もたいへんよろしく。「よくやる……」

「咲ちゃんの呆れた声も、気になりません。結果オーライですか  
ら。」

「あんなこと聞いて。先輩もいい迷惑だつたんじゃない?」

「それは、そうかもしけませんけど。でも咲ちゃんのためです。」

「そうだよ。咲さんの口音が、これで進展するんだから!」

「それは……。そうかも、しれないけど」

「どこか引っかかりのある顔です。まじめですねえ……。」

「ところで、もう薬棚の整理は終わつたんですか?」

先輩とわたしたちが話してる間、彼女、特に何も作業してませんでした。

「え? うん」

「まだここに用が?」

ついと彼女は顔を逸らして、すこしずつかわいく、眩きます。

「……用というか。待つてたのよ」

「え、わたしたちを?」

「……いえ。あなたたちじゃなくて。先生を」

「ああ、そういうことですか。」苦勞様です

「別に」

おや。ちょっと皮肉に聞こえてしましたかね。

「気持ちは分からぬいても、ないけど。あんまり人に迷惑、かけすぎないほうがいいと思う」

「分かつてますよ。あんまり調子に乗りすぎなによつ、気をつけますから」

でも、咲ちゃんのことですから、なりふり構つていられないこともあるのですよ。呆れられても、咲ちゃんのためになるなら、べつに構わないです、わたしは。

ちょっと早めに帰りのホームルームが終わつたわたしは、保健室

+ + +

に向かっています。

先輩に保健室に来てくれるよりお願いしてから、一日経ちました。先輩はまだ来てくれません。白ちゃんは昨日も今日も学校に来ていますし、もう早く来てくださいという感じなのですが。

まあ、生徒会の会議とか、あるのかもしませんし……正直何やつてるのかわかりませんが、生徒会つて……でも月島さんと話してる暇があるくらいなんですから、保健室に来る余裕がないわけはない、はずです。

ぐるぐる考え、はあとため息をつきながら、外を見ます。  
今日も青空。こんな日に白ちゃんの喜ぶ顔が見れたら、素敵なのになあ。

とか思つていらつけて、保健室に到着。

「こんにちは」

「よう、ハザ」

浅川先生が椅子に座つて足を組み、コーヒーなど飲んでいます。  
おいしそう。オトナの味でしょつか。

「なんか、今日は顔色いいね？」

「ええ、最近ちょっとやり遂げたって感じでして」

「ほう、何を」

「それは、秘密です」無駄に意味ありげに笑う、わたしです。

まあ、別にやり遂げてもいいんですけど……先輩まだ来てくれてないですし。でも呼べたことじたいに妙な達成感を覚えたのは事実です。

ベッドのカーテンをめくると、いつものように涙末ちゃんがすやすやと、ねこのように体を丸めて寝ています。枕元に置かれためがね。素顔の寝顔。

わたしはすこしの間、彼女の顔を見つめました。

寝顔はかわいいんですね、このひと。

そのせいか意外と男子に人気があります。寝すぎなところが萌え系らしいです。謎。だめな子ほどかわいいという理屈でしょうか。

当の本人は男子苦手なのに、皮肉なことです。

ともかく、わたしが寝られません。

今日も突き落とそうとしてやりましょうか。……でも、あんまり

毎回でもかわいそつかも。

仕方がないので、わたしは涙未ちゃんの隣にもぐりこみました。狭い。でも保健室ベッドは比較的でかいので、無理なほどではないです。タオルケットを整え、一人のからだにかかるようにします。はあ、やつぱり、保健室のベッドは落ち着きます。……。

秋のすゞしやすい空気とか。

放課後の微妙な解放感とか。

静かな保健室に響く、涙未ちゃんの寝息と先生が書類をめくる音とか。

ときどき「じ」とやって来る、太った白ねじがなーなー言い出すに至って、わたしの意識は急速に眠りへと落ち込んでいきます。この、うとうと感が、最高に気持ちいいです。……。

しばらく夢とつつつの境を漂つていると、扉が開く音がしました。続いて、先生と、女のこの声。

「いらっしゃい。調子はどう?」

「大丈夫です……すいません、いつも」

「いいよ、気にしないで。ゆっくり休んでいいで」「はい」

とてもとても、聞き覚えのある声でした。

カーテンをめぐつてみれば、果たしてそこには、一咲ちゃんに寄り添われてすこし傍げ歩いてくる丘ちゃんでした。肌は白く、制服に包まれた細い手足は誰かに支えられていなければ自分自身の重みで折れてしまいそづ。

もちろん、実際には、そんなことはありませんけど。

「あ、さくらちゃん。ほけにちは」

弱々しく微笑んで、挨拶です。

「今日はせかいが明るいね」

確かに天気よくて、きもちいい日です。

「こんなにちは。調子、どうですか？」

「うん、いつも通りだよ」

一咲ちゃんにゆるく支えられた、白ひやさんはいつもベッドで  
あがつて、タオルケットを羽織りました。

「ありがとう、一咲ちゃん」

白ひやんのお礼に、声には出さず、首肯だけで返事する一咲ちゃん。  
すこしはにこりとすればかわいげが出ると想つたけどもね。  
余計なお世話と言われるでしょうが。

白ひやんと、わたしと、涙末ちゃんと、一咲ちゃん。それと先生  
の計五名が、だいたいいつも保健室にいるメンバーです。わたしは  
密かに、この集まりを保健室部と呼んでいます。顧問はいますが、  
でも生徒数が五名を割っているので保健室同好会といつべきかもし  
れません。

合つてゐるような、間違つてゐるような。まあいずれにしても、活動  
内容が謎過ぎます。

白ひやんは、こんこんとたまに咳をしつつ、ベッドに横たわって  
ぼつつとなります。

「最近はちょっと、日によつて気温の落差が激しくていやですね」

「そうだね……夜寝るときなんか、とくに気を遣うよね」

「うん、夜暑くて朝寒かったりすると、危険ですね。うつかり布団  
剥いで寝ちゃつた日にはもう、一発でアウトですよ」

「実はこのあいだ、その罠にはまっちゃつて」

「ああ、そうだったんですね。それでお休みを」

「うん。私、ちょっと寝相悪いみたいで」

「保健室だと、そうでもなかつた氣もしますけれど

「家と学校だと、ちょっと違うみたい」

寝る場所によつて寝相が違うですか。まあ、落ち着く場所で眠つ  
てるときのほうが、からだがよく動くのかもしません。わたしと  
しても、学校のトイレと家のトイレではずいぶん勝手が違いますし。

「お互いに気をつけましょ」つね……」「うん」

病弱トークで、わたしたちの絆は深まります。

「この季節は、普通の人でも体調崩しやすいからねえ」

浅川先生が話に加わってきました。

「まあ、きみらは年季入ってるみたいだから、ある程度は大丈夫だと思つんだけ。体調崩しやすいと、普段から気をつけるからね……どっちかといつて、そこで寝こけてる相坂のほうが、あたしなんかは心配だよ」

横向きに寝てるせいでよだれ垂れ流しの涙末ちゃんは、何にもかけないで眠っています。今はいい気候なので問題ないでショウけども、わたしや白ちゃんだったら怖くてちょっと、できないですね。

「まあ、涙末ちゃんは風邪ひかないですよ、きっと」

「どういう意味だい、それ」先生、苦笑い。べつにナントカは風邪引かないって言いたかったわけでは。

白ちゃんはちょっと首をかしげてます。意味がよくわかつていなによつです。そのほうがいいかもせんけれども。

「元気が一番だよね……」

実感のこもった、咳きです。安らかに寝ている涙末ちゃんを、白ちゃんは何か眩しいものを見るよつた、うらやむよつた視線でみています。

気持ちは、わからないでもないです……というか、元気が一番だところは諸手を挙げて同意するんですが、涙末ちゃんみたいに寝てばっかりというのはいかがなものかと思います。

「でも心配だから、ちゃんとタオルケット、かけてあげよ」  
白ちゃんは優しいですね。

そう言われたら、わたしとしては従わざるを得ません。……ヒュ  
うか、元々わたしが奪つたんですけどね。タオルケット。

すると、「うにゅ」

へんな声を出して、涙未ちゃんが目覚めました。

「……呼んだ？」

「呼んでないです」

「そつふあああああああ」途中から田大なあぐびに吸収されました。  
「……夢と現実が、じつちやになつてゐんぢやないですか？」

「うーん……そつかも」ぱけっと、自らが作り出したよだれの染みを見詰める涙未ちゃん。

「どんな夢を？」

「えつとね……」よだれ放置ですか。

「なんか、川があつて」

「ええ」

「お婆ちゃんが、向こう岸からぼくを呼んでた」

三途ドリーム。眠り深すぎですし。

「で、そつち見てたら、後ろから呼ばれたよつな気がね？」

「はあ……それは、よかつたですね」

「あ、信じてないね？ 本当のことなのに…」

「はいはい、お花畠が見えたんですよね？」

「誰が電波だ！」

言つてませんし。なんで怒られなきやならないんですか。まあ白ちゃんが差し出したティッシュを取つて口まわりのよだれを拭きながらでは、ぜんぜん全く怖くないんですけどね。

そんなわしたちを、一咲ちゃんは、ちよつと離れたところに座つて見たり。あるいは視線をはずして、外を見たり。彼女はいつも、そんな感じです。白ちゃんを連れてはくるんですが、その後はわたしたちの話に加わるわけでもなく、帰るもなく、しばらく保健室に留まります。わたしたちより、先生と話してゐる時間のほうが長いかもしません。

さて、そんないつもの保健室風景なのですが、わたしは先輩の件でそわそわしているわけです。

まさか、忘れてるわけじゃ、ないですよね。いやあの先輩に限つ

てそんな。それとも無自覚なじらし上手なんでしょうつか。いい加減にしないと、こっちから乗り込んでしゃいますよ。

とか、考えていると。

がらりと、保健室の扉が、開きました。

「失礼します」

穏やかだけれど、よく通る低い声。

「いらっしゃい。おや、夕足？ 珍しいね、ここに来るのは  
正しく詰襟に包まれたからだはすこし細身で。

「ええ、色々とあります」

その整つていなぐもない顔に、優しげな表情を浮かべている。  
わたしはほっと、息を吐きます。

ようやく、来てくれました。

「夕足……せんぱい？」

白ちゃんが、隣で、ちいさく呟きました。

そのときの、白ちゃんの表情を わたしは、きっと、忘れません。

驚きに田をいっぽい見開いて、白い頬を桃に染め、口もとに手を当てて固まっている。わたしの位置からなら見えます、その手の裏側で、彼女の口が、うれしさにゆるんでいるのが。いつもそれ違いでしかなかつた好きなひどが、いま田の前にいる「幸運」。それだけで、白ちゃんは、しあわせになれると分かります。

そう、これに比べれば、いつもわたしたちに向けて先輩のいいところを話していた白ちゃんの表情など、まったくしあわせの内に入りません。こんなことなら、もつと早く同じことをしていればよかつたです。すこしだけ、後悔しました。

「こんにちば。來たよ」

「ありがとうござります」

そんなやりとりをするわたしたちを、白ちゃんはすこし歎嘆そうな様子で見ています。

「こんにちば、衣花さん。からだの具合は、どう？」

「はい、はい。だ、だいじょうぶです」

先輩は白ちゃんに挨拶します。自分がここに呼ばれた理由を心でいるのか、それとも自然な流れとしてか。どっちかは、分かりません。

「えつと……先輩……どうして、ここ?」

きょろきょろと、わたしや先輩の間に視線を彷徨わせながら、白ちゃんは何が起きたのか分からないみたいな顔をしています。

「先輩は、白ちゃんと話したこに来てくれたんですよ」「すこし得意げに説明する、わたしです。

「えつ？……えつ？」

あ、いいです。嬉しいけど信じられないみたいな、その顔。

「ほら、遠慮なく。いろいろ、話したいこと、あるんですね?」

「えつ……うん……でも」

余りの急展開に、ついていけなくなさそうです。あんまりたくさんのが一度に扉から出ようとすると、詰まるのと同じ理屈でしょうか。話したいことが多いけど、どこから始めていいか分からぬみたいだ。

「いいお友達だよね」

すると、先輩のほうから、声をかけてくれました。

「あつ、はい」

白ちゃんは、わたしを見て、涙末ちゃんを見て、一咲ちゃんを見ました。ゆっくりと。

「そうですね……たくらちゃんたちが居なかつたら、私、寂しくて泣いてたかも。「うさぎさんみたいに」

ふふっと笑つて言つて、白ちゃん。ちょっと冗談めかした態度でした。

「大げさですねえ」わたしも笑い返します。

「なに、「うさぎって」涙末ちゃんもわたしに同じ。「白たんはかわいいなあ」

ただ、意外とそれは冗談でもないかもしれません。白ちゃんの、中学時代の話を聞いた身としては。あと、わたし自分の身を省みて

も。

「それに、一咲ちゃんがいつもひいてくれるから」

「……私は、保健委員だから」

やや早口の返答。不意打ちされたズズメみたいな顔です。妙にうれたえた一咲ちゃんの態度を見て、白ひやんまで慌て始めました。

「つて、何言ひてるんだろ？、私……こまかく恥ずかしい」と、言つたような

ちよつと俯く白ひやん。でも元々顔が赤くなつていて、見た目にはあんまり変わりません。

「でも、そんなんふうに思えるひとがいるつて、いこいだと思ひよ。先輩はあくまで穏やかです……穏やかすぎ」というか。このひとも、たいがい動じないです。白ひやんが恥ずかしことに言つたというのは、事実だと思つんですね。」

「あ、あのー！」

そんな雰囲気を払拭しようとしてか、白ひやんがすこし大きな声を出しました。

「もう、ずいぶん前のことになつたやこましたけど。あのとき、助けてくれて……ありがとう、『じゃいました』

「ううん、いいんだよ。困つてるときはお互に様つてこう」

「でも、ちゃんとお礼、言えなかつたから……」

「そんなに気にすることなによ。そんなに大したこととも、してないし」

「大したことだつたと、思いますがよ……あ、ねへひやん、ちよつとー！」

せりつせりつと白ひやんベッドのカーテンを閉めようとしていたわたしの手を、白ひやんが掴みました。

「あれ、なんですか？」

「何してるの？」

「いえ、一人きりがいいかなあと」

カーテンが囁う、「一人の世界を演出してあげようと思つたの。」

「え、うん、ちょっと……うん……」

困ったように、口をあつあつさせる白ちゃんです。

「まだ、勇気が足りませんか?」

「う、うん……もうちょっと、一緒に居てほしいな」

そんなふうにお願いされたら、聞かないわけにも行きません。

「分かりました。じゃあ、もうちょっとだけ

とりあえずカーテンを脇に押しやります。

「ぼく、白たんと先輩の馴れ初め話が聞きたいなあ

涙末ちゃんが寝っ転がったまま、そんなことを言つます。そういうえば、このひとはまだ聞いてなかつたかもしません。わたしは、聞いたことがあるんですけど。

「そうですね、わたしも聞きたいです」

先輩がいること、また違つた印象になるかもです。

「えつ、うん、」

白ちゃんはちよつと先輩を気にしたふうです。話してもいいですか、なんてお伺いを立てたりして。先輩は大らかに承諾していますけど、わたし的にはだめつて言つても話をやめやつつもりでした。

「えつとね……」

そうして、過去を見るように視線を上向かせて、語り始める白ちゃんです。

「入学して、すぐの頃にね」

「うんうん」

「ちよつと、学校の中で気分悪くなっちゃつたことがあつて……」

「ふんふん、それで?」

「これ、ちよつと静かに聽きなさい」 小さな声で涙末すけを軽くはたいて黙らせます。

「ひどいなもみじ……」 涙田で訴えても知りません。

「それで、トイレとかここに行く元気もなくなっちゃつて、廊下で私、もどしちゃつたの。」

でも、気持ち悪くて、田の前はぐるぐるして……、掃除しないといけなかつたんだけど、どうしてもダメで」

わたしにも、似たような経験があります。

できれば自分でどうにかしたい、けど自分ひとりではどうにもできないと。誰も助けてくれなかつたりすると、いつも泣きたくなります。

いつも気をつけてますけど、どうじとも避けられなことがあります。

て。

「そのとき助けてくれたのが、先輩」

先輩はすこし照れているのか、あさつての方向を向いていました。

「僕はただ、衣花さんを保健室に連れていつただけだよ」

「でも、私が戻したもので制服が汚れるのも、ぜんぜん気にしてなかつたじゃないですか。それに、跡を掃除してくれたのも、先輩なんですね？」

「うん……それは、そうだけど」

遠慮がちに受け答えする先輩。

先輩自身は大したことないと言いますが、実際、見ず知らずのひとにそんなことができるのって、ずいぶん大したことだと思います。「ついでに言うと、汚れた衣花の顔とか手拭いていったのも、夕足だよ」

「先生、それは」おつと、先輩がすこし動搖しましたよ。

「いいじゃないの、悪いことじゃないんだし。私がやるつて言つたのに、ついでだからつて言つてやつてつたんだよね。もうね、こいつ惚れてるんじゃないか? つてくらいの献身つぱりでねえ」

言葉が炸裂するというのは、こういう感じでしょうか。

白ちゃんの顔が真っ赤に染まり、涙末ちゃんは何やら裏返つた奇声をあげ、先輩は今まで見た中で最大級にうろたえました。

白ちゃんの頭のてっぺんから、湯気が見えます……。

「まあ、それは冗談だけど」

今更訂正しても、白ちゃんを夢の世界から引き戻すには足りませ

んよ。

「先輩、カツコイー」

涙未ちゃんの言葉にも、今回ばかりは同意です。そんなふうにされたら、わたしだつてどうにかなってしまうかも。いえ、もしもの話ですけどね？

ふつとオーラを感じて、わたしは保健室の端を見ました。そこにいるひと、咲ちゃんはこんなときにも静かです。そっぽでも向いて話し聞いてないのかと思いや、意外というか、先輩を見ていました。

ガン見です。

睨み付けてる、と言つたほうがいいくらいです。

なんでしょうね、これは。ちょっと悔しそうにも見えます。白ちゃんを助けた云々の話をしているので、保健委員としてのプライドとかそんなものでも、あるんでしょうか。

彼女に関しては、ありそうな気も、しますが……。

しばらく見ていると、向うもじつに気付いたようで、視線をついた逸らされました。なんか、あやしいです。

視線を戻せば、涙未ちゃんがいつのまにかむこいつのベッドに飛び移つて、白ちゃんの頭をぐしゃくしゃしていました。テンションあがりすぎたみたいで、白ちゃんにびくらず、顔真っ赤です。

わたしも何だか楽しくなつて、ふふっと笑いました。

楽しくないわけ、ないです。白ちゃんがこんなにしあわせそうにしてるのに。

「うへああ、涙未ちゃん、せかいが回るよお」

ぐるぐる回る、さくらんぼのような白ちゃんの顔を見て、先輩を呼んで本当によかつたなあと思つわたしでした。

+++

先輩も、もう何度か来てくれていますが、

、

「あ、あの」

「うん？」

「ええと、ですね」

「うん」

「その……、『』、『』趣味は……なんでしょうか……」

お見合いでですか。

未だにカタい、白ちゃんです。

「ううん、そうだね……」

すこし考え込む先輩。

「あんまり趣味らしい趣味もないけど、本を読むのはけっこう好きかな？」

「ほん」白ちゃん、ぼやつと鸚鵡返し。

「どんな本を、読むんですか？」

「あんまりこれって書くのはないけど、たまに本屋に行って、話題の本「一ノ一」にあるやつとか。あとは何となく題名が気に入つたとか、表紙が格好いいとか、そういう大したことのない理由で決めるよ。」

「文学とかですか？」

先輩がとつぜん文学青年に見えたので、わたしはそう聞いてみました。

「いや、どっちかどつと娯楽小説みたいのが多いかな。文学も、読まないでもないけど」

そう言えば、円島さんとも何かのお話の話ををしていましたね。あれはドラマじゃなくて、もしかして小説の話しだったんでしょうか。……でも話しているのが円島さんだったから違うかも。彼女、本とか読みそうには見えませんし。

「衣花さんは本なんか、読む？」

「えっと、私は」ちょっと残念そうな表情で、「漫画くらい……かな」

「僕も漫画は読むよ」

微笑む先輩に、すこしほほとした様子の白ちゃんです。

「どんな漫画を読むの？」

「ええと、少女漫画が多いと思います。ふつつの女のことが、ちょっと幸せになるようなお話とか？」

シンデレラ系でしょうか。

「ふつうで、ちょっと憂鬱な毎日を過ごしてゐる女のことが、ある日素敵な男性に出会つて、色々あるけど最後は幸せになるような話？」

「そうそう、そんな感じです。男のひとだけじゃなくて、誰か素敵なものに会つて……幸せになつた、っていう瞬間があるじゃないですか。開けないままに枯れかけていた可憐なお花が、一気にぱあっと咲き誇るような……せかいの開けるシーンが、すこい好きで」

「衣花さんって面白いね」

先輩がきゅうにそんなことを言つものだから、白ちゃん田をぱちくつさせています。たぶん白ちゃんの詩人部分を指していると推測。先輩、それたぶん天然です。

「でも、いいよね、そういうの」

その言葉で、白ちゃんの頬がすこし赤みを増しました。共感してもらえて嬉しそう。

「先輩は、こいつシーンが好き、つてありますか？」

「そうだね……」

ちょっとと考え込む様子の先輩。

「……あ、手紙」

「手紙？」

「うん。最近ちょっといになつて思つたんだ」

「メールですか？」

「いや、紙に書いて送るほう。ちょっと前の話しなんだけど」

そう前置きして、先輩は手紙に関わる本の内容について話し始めました。

「その物語は、一人の女の子の友情を描いたものなんだ。片方は元

気なからじで、もう一人は病弱な女の子」

病弱、といつ単語に思わず反応してしまったしです。

ふと見れば、白ちゃんの様子もすこしだけ真剣さを増してしまった。いえ、先輩相手なので元々真剣ですが、より雰囲気が鋭くなつたというか……。

「一人は色々あつて親友つて言えるくらいに仲良くなるんだけど、ある日けんかをしてしまつ。お互い本当は相手のことが好きなんだけど、でも口に出しては伝えられない。素直になれないんだね」

「見ていてやきもきしそうなお話ですね」

思わず茶々を入れてしまつわたしに、先輩はゆるべ、やつだねと相槌を打つて先を続けました。

「けつときょく仲直りできないまま、病弱な女の子の容態が変わつて、専門的な治療ができる遠い病院に転院することになるんだ」

「そこで、お手紙を？」と、白ちゃん。

「うん、そう。遠く離れてしまつた後で、病弱な子から、その親友のところへ手紙が届くんだね。そこに、『めんなさい、ずっと親友でいてね、つって書いてある』

手紙を読んで泣き出す女の子の姿が田に浮かぶよつです。

「今だつたら、メールでやりそつですね」

「うん……」白ちゃんもわたしと似たよつなことを想像したのか、すこし目が水っぽい氣がしました。「でも、メールもふつうの会話の延長つていうかんじだし、案外むずかしいかも」

「そうだよね」先輩はそんな白ちゃんの様子を、満足そうに見ています。「手紙だと、ふだんとは違つた口調……といづか文体になるし、想いが伝わりやすいつつていうのかなあ」

月並みな意見だけど、と笑う先輩です。

「時差があるつていうのも、いいのかもですね」

「ああ、そうだね。もう会えないと思つてたのに……つていづいろに、不意打ちで来たら嬉しいよね」

意外と手紙にも、色々といつこりがあるのかもしません。

「でも私、文章書くのは苦手だなあ」

「……確かに、ちょっと面倒かもしれませんね」

と同時に、ポエミイな物言いと文章力の関係について考えるわ

たし。

「まあ、手間がかかるだけに、価値があるのかもね」

先輩、ポジティブです。

でも確かに、そういうものかもですね。

それから白ちゃんは、ぱつぱつと、こんな本を読んだ、こんな話しが面白かった、と話しました。ときどき先輩が何かを言つて、白ちゃんが一生懸命に頷きます。

先輩の話には、正直、わたしにとつては何ひとつない言葉の連なりですが、白ちゃんにとってはきっと、その一つ一つが輝く宝石のような、甘い果物のような、そんなふうに思えてくるのでしょうか……。

いつこつ時間が、白ちゃんにとって、宝物であるに違いないのです。

「……で、検査の直前に飲んでくださいって言われた下剤の量が、な、なんと」

「なんと……？」

「一リットル！」

「え、えーっ！？」

「ふわー、そんなに飲んだらお尻からお水が出るよ！」  
リアルに想像してしまったのか蒼くなる涙末ちゃんと、「冗談なんか本気なのがよく分からぬことをいう白ちゃん。

「出ますよお水。お腹の中がきれいになるまで飲むわけなので」

「うええ

「大変だね、くれない呉内さん」

「あれは出来れば、もう一度と勘弁してほしいですよ」

まあ一リットルも飲まなくていい種類のもあるんですけどね。  
というわけで何日か経っていますが、先輩は相変わらず保健室に来てもらっています。白ちゃんはまだすこし緊張しているみたいですけど、だいぶ慣れてきている様子。先輩を含めて今や生徒数は五、保健室同好会が保健室部に昇格する日も近いかもしれません。

「今日はあつたかいね」

先輩がふと、そう呟きました。

その通り、今日はとてもあつたかい日です。窓さえ開いてたりします。そこから射し込む光はふわふわと優しく、床を照らしています。

と、かつ、と硬いものを叩くような、ちいさな音が響きました。

「あ、ねこ

真っ白で、すこし太り気味のねこが、開いた窓の隙間から保健室の中に入ってきた。見覚えのあるねこでした。

「この子

」

ときたま保健室にやつて来る子でした。保健室以外でもよく発見されているらしく、教室の中でもときどき話題になっています。たぶん生徒がよくえさをやるので、住み着いてしまったのでしょうか。

「シロ」

「えつ？」

先輩がとつぜん白むちやんを下の名前を呼んで、驚いた彼女は首がねじれそうな勢いで先輩のほうを見ました。

でも、先輩の視線はねこに向いています。

「あつ、ごめん。衣花さんのことじゃなくて、あの猫の名前なんだ」

「あつ、そ、そうだつたんですか」

そう言いながら、胸に手を当てる丘むちやん。そりや、ビキビキしますよね。

「生徒会ではそう呼ばれててね。野良だから、人によつて呼び方が違うみたいなんだけど」

なるほど。猫と同じ名前といつのも、何だか……。

前に犬みたいな名前だとつけて気にしていましたね。確かにペット系の名前ですけど。個人的には、かわいくて良い名前だと思つんですが。

ねこのシロは、にゃーにゃーみーみー言いながら保健室内部を闊歩しています。

「何がしたいんだうね、この猫つて。たまに来るけどさ」

「遊んで欲しいんじゃないですか？ ほら涙末むちやん、あなたならうまく遊べますよきっと」

「どういう意味かな、それ？」

「いえ別に深い意味はありませんことよ？」

とか言つてる間に、シロは帰つて行きそうです。入口にした窓の隙間のほうへ、ゆるゆる戻る素振り。

いつもはそれを、黙つて見送るだけでした。

ところが今日は、先輩が一言。

「外、行つてみない？」

そんな提案は、すこく人々に聞いたかもしません。

今まで、そんなことを言い出すひとは誰もいませんでした。それはそうです。わたしと白ちゃんは体調に不安を抱え、涙末ちゃんは引きこもり気質というか寝てるだけだし、一咲ちゃんは黙つて話を聞いてるのが常でしたから。

のらねこが入ってきて、思わずぶりに歩き回ったのち外へ出でいつたくらいでは、誰も外に出よつなんて言わないのです。

「天氣いいし、暖かいし。シロも遊んで欲しそうだし」

先輩が何を思つて、そんなことを言つ出したのかは分かりません。だけど、そうしてもいゝかな、といつ氣になつたのは確かです。それは、たまには外もいいかなと思つたとか、ねこと遊んでみるのも楽しそうだなとか、そつ言つたこともありますけど、何より、白ちゃんが、こんなに行きたそうな顔をしていたら。わたしには良いも悪いも、ないんです。

「よし、行こう!」

涙末ちゃんが勢いよくベッドから降りて、歩き出しました。

向かう先は、一足先にシロが到達した、保健室の窓。

「涙末ちゃん?」

「ねこのシロと遊ぶんでしょ? 見失つけやつよ!」

シロは窓の隙間から、外へ出て行きました。確かに、今から保健室を出て、校庭側から保健室の窓に周つこんだら見失うかもしれません。いですけど……。

涙末ちゃんは窓を開け放つと、よつこりせとか女のこりしきない掛け声をあげてよじ登り出しました。そして、ひらりと向ひつ側に着地。保健室は一階だから、べつに危険はありません。

「相坂は元気だな」

浅川せんせの、呆れたような声。でも顔は面白がつてます。

「それじゃ、わたしたちも行きましょう」

「う、うん」

わたしと白ちゃんと先輩とで、涙末ちゃんとシロを追います。――

咲ちゃんは相変わらず、不参加。ちょっと行きたそうに見えたのは  
気のせいでしょうか。

昇降口から表に出ると、携帯が着信。涙末ちゃんでした。

『校舎裏のほうに向かってるよ』

「分かりました。ゆっくり行くので見張つてくださいね」

『わかったよ。何とか捕まえてるから』

あつたかい空氣、青空の下。校庭で歓声をあげてる運動部のひとたちを横目に、わたしたちはねこと遊びに校舎裏に向かいいます。ゆるゆると。

すこし後ろでは、先輩と白ちゃんが、あのねこオスなんですかメスなんですか？ なんだかメスらしいよ、なんて会話をしています。今日はせかいがふわふわしてますね、と白ちゃんが言つて、先輩がうんそうだね。なんて返していましたり、つて先輩意味わかつてるんですか。

清澄な風がかすかに吹き抜け、わたしの頬を涼やかに撫で去つてゆきました。

「うーん、なんだか、気分いいですね。たまには外を出歩くのも、悪くないです。」

「あれ、涙末ちゃんどこいったんでしょう？」

校舎裏にたどり着いてみれば、ねこのシロはいたんですが、涙末ちゃんがいません。

滅多に人の来ないせいか、妙に寂しい感じのする場所でした。表と違つて雑草生え放題で、背の高い草むらが敷地の中まで浸食しています。

「うらぶれた日陰の中にいるのは、ねこのシロだけです。」

しばし三人できょろきょろしますが、見当たらず。

「ま、あのひとのことですし、放つておいても大丈夫でしょう」

「う、うん」

白ちゃんの同意をもって、わたしたちはねこのシロを取り囲みました。

「かわいい」

田ちゃんがおむすむ手を伸ばして、シロの頭を撫でました。シロは気持ちよさそうに、田を細めてたれるがまま。にゅうーとか細い鳴き声が漏れます。

わたしもしゃがみこんで、背中をなしました。ふさふさして心地よいです。太り気味だから、いつそうそつ思えるのかも。

「この猫、ずいぶん人慣れしてる感じがするよね」と、先輩。

「どれくらい前から、ここにいるのかな」

「僕が入学した頃にはもう居たよ。シロって名前も、何年も前に決まったみたい」

「そりなんですか……だつたらもう、随分長いですね」

だとしたら、この妙に貴祿あるといつか、どうしり構えた感も納得いくというものです。

「猫のほうからすると、人間と遊んでやつてるつて気持ちなのかもしないね」

「なるほど」

そう言われてみると、小にくらしい顔に見えてくるから不思議です。ほれもつと撫でる、苦しうつない。わたしの脳内でそんな音声が再生されました。偉そうです。でもかわいいから許す。

「お、来たね」

振り向くと、涙未ちゃんが立っていました。

「どこ行ってたんですか？ 探してはいませんけど」

「ひどいなすこしは探してよ。せつかくナイスアイテムをゲットしてきましたのに」

「ナイスアイテム？」

そういうえば涙未ちゃんの右手には、何やら草らじこものが握られています。

「ねこじゅりしー」

国民的すこしふしきアーメのイントネーションだけ真似しながら、

涙末ちゃんはその草を掲げました。

「ほれほれ」

そしてシロの前で、それをふりふり。

シロはびっくりと耳を立てると、ねこじゅらしを凝視。

「ほーら」涙末ちゃんが右に振ると、右へ。

「つーり」涙末ちゃんが左に振ると、左へ。

もう完璧になこじゅらしの虜です。

右、左、上、下、とぶんぶん振り回す」と、シロの首ががくがく揺れます。

「あはは、面白いねこれ」

偉そうにしていても、ねこの本能からは逃れられないのでしょうか。それともこのねこが、実はとべべつ子でもっぽいんでしょうか。

「おじっちはーさんし、にーにっせんし」

調子に乗った涙末ちゃんが、ねこじゅらしを指揮棒にして四拍子を描き始めました。余裕でついていくシロ。がくんがくんと頭が三角形に動きます。

BPMが一五〇を越えた辺りで疲れたのか飽きたのか、シロの反応がなくなりました。丸まつて睡眠の体勢です。

「ちつ、もうついでこれなくなつたか。根性のないやつじや」

肩で息をしながら、涙末ちゃん。何そんなんに疲れてるんですかあなたは。

「かつ、かわいい……つ。ねこは天使さまのおじつ」だよう

意味不明なことを呟きながら、白ちゃんが代わりに近付いてシロの喉元を撫でました。田がちょっと潤んでいます。指揮棒につられるシロの姿を見たなら、無理もないと言えましょう。

白ちゃんは本当に楽しそうで、ねこのシロと戯れています。

たかがねことのお遊び、ですけど。白ちゃんにとつては、あまり経験できないことなのです。

ねこと遊んだことなどほとんどないから、新鮮で。

たまにしか遊べないから、めいっぱい楽しもうとして。

だから、白ちやんはこんなに楽しめ。

「夕足先輩も、一緒になでませんか？」

興奮気味な白ちやんの姿を、先輩も微笑ましく見ていました。

いいかんじです。

遊んでると、楽しさにしつらひどが近くにいるともうと  
楽しくなりますよね。白ちやんはもうこうの意味では、ベストパート  
ナーと言つていいと思つます。

すこしづつ陽は傾き、あつたかかった気候も、段々と肌寒いもの  
となりつつあります。

いま先輩が、涙未ちやんの威嚇によつて逃げ出したねこを、シロ、  
シロ、と呼びかけながら追いかけてきました。

「はあ……」

隣で白ちやんが、そつとため息をつきました。

見れば、軽く胸の辺りを押されて先輩たちを見ていて、ぼやつ  
とした目付き。

先輩がシロ、と叫び度に、手がぴくりと動きますね。  
「やつぱり、シロって言われると落ち着きませんか？」

「えつ、「つ、うん……」

白ちやんの頬は、はつきりと赤くなっています。

「ちよつと、じきじきし過ぎて胸が苦しいかな」

あはは、と照れ笑い。白ちやんの心臓に悪いです。先輩は罪。  
「いつか、ねこじやなくて白ちやん自身に向ければいいですねえ」  
ちよつと「冗談めかして言つたのに、

「……うん」

白ちやんが真面目に頷くものだから、わたしは逆に恥ずかしくな  
つてしましました。

「そ、そろそろ寒くなつてきましたし、帰りますか？」

「あ、そう、だね。」「うつ」

立ち上がった白ちゃんの体が、ぐらつと、揺れました。

「田ちゃんつ?」「

わたしは咄嗟に支えます。

「……ごめ……」

「ここんですよ

田ちゃんの顔は、すっかり蒼ざめしていました。

迂闊です。

よく見ていれば、もっと早く気付けたはずだったのに……田ちゃんの様子が幸せそうで、わたしとしても楽しかったものですから、油断していました。

田ちゃんの体が弱いことは、十分知っていたはずなのに。

わたしは、ダメなひとです。

「白たん……大丈夫?」

「保健室に行こう。歩ける?」

異変を察した涙未ちゃんと先輩が、戻ってきました。

「だい、じょうぶ……です。これくらいなら。すこし休めば……」

「でも」

先輩は心配顔です。

「いえ、田ちゃんがやつていつながら、すこし様子を見ましそう。歩くのも負担ですし」

「もう、だね」

田ちゃんはゆっくりと、地面に腰を下ろします。草に覆われていで、土が剥き出しへなつていながらのが不幸中の幸いでじょつか。

「ちょっと、はしゃぎすぎたかな

涙未ちゃんもしょんぼりと、呟きました。

「ごめん、僕が外に行こうって言つたから

先輩の言葉に対し、田ちゃんがゆるゆると首を振ります。

「先輩は……悪くないです」

## 「田ちゃん」

彼女の言つとおり、先ほどよりははるかに、顔色がよくなつていました。

「私、楽しかったですから……私は、大丈夫です、これくらいなら、ねこのシロが寄つて来て、田ちゃんの隣で丸くなりました。

田ちゃんは微笑んで、シロの頭を撫でます。

撫でる余裕があるくらいなのだから、本当に大丈夫なんでしょう。わたしはほつと、胸をなでおろしました。……まだすこし、顔色は悪いですけども。

「今度から、もう少し気をつけるようになりますよ。」

先輩はそう言つて、田ちゃんの前にしゃがみました。田線の高さを合わせるよ。

「私のほうじゃ、『じめんなれ』……せつかく楽しかったのに」

「気にしないで。衣花さんが楽しかったなら、良かったよ」

田ちゃんはいくつと、頷きます。

(もみじ)

つんつんと、涙末ちゃんが小声でわたしを突付いてきました。

(なんですか?)

つられてわたしも小声です。

(今がチャンス。一人つきりにしてあげようよ)

(なるほど) 涙末ちゃんにしては、ナイスアイデアです。

(では、そろそろと)

そうしてわたしたちは、いつもその場を後にしました。いい加減白ちゃんも慣れてるでしょつし、一人きりになる時間があってもいい頃でしよう。それに、今は若干弱っていますから、わたしたちを気にする余裕はないわけです。体調のことは心配ですが、先輩がいれば大丈夫でしょう。

怪我の功名、と言つておきましょ。

校舎裏から出て、わたしたちは保健室への道を歩きます。

「あー、これで仲良くなれたらいいね」

「やうですね。なれまよわうひと。看病なんて、近付くいきつか  
けじやないですか」

「体調崩したのがきっかけついのも、ちゅうと微妙な氣もする  
けど」

「いいんですよ。それくらい良いことあったって、いいじゃないで  
すか」

「そつか。それもそうだね」  
ハンデ背負つてゐるんですから、たまに良いことなかつたら不平等  
です。

「あつ

涙未ちゃんが、とつぜん小さく声をあげて、一瞬立ち止まりまし  
た。

わたしも同じよう、声をあげそになりました。

わたしたちの前方に、ひとりの女子がいます。

微妙な茶髪に、健康的な小麦色の肌。視線に気付いたのか、わた  
したちをすこし、訝しげに見ていました。

円島沙耶子さん。

白ちゃんの恋敵。

何だか水を差された気分になつたわたしは、俯き加減で、ついと  
目を逸らしました。

彼女は、こちらに向かっています。すれ違う瞬間もちゅうとこちら  
を気にしていたようでしたが、けつときょくは何も言わず通り過ぎ  
て行きました。

「……はあ。何だか、へんに意識しちゃうね」

「そうですね……」

べつに彼女の何がどうといふわけでもないんですけど、そもそも  
彼女の纏つてる雰囲気が苦手なのと、白ちゃんのことが重なつて、  
どうも避けてしまっています。

「つていうか」

涙未ちゃんがきゅうに、後ろを振り向きました。

わたしも振り返ります。月島さんは、わたしたちに見られていることも気付かず、歩き続けています。

わたしたちがやつて来た方向に。

つまり、校舎裏の方向に。

「もしかしてさ」涙未ちゃんが、『ぐくりと唾を飲み込む音が聞こえた気がしました。「あのひと、先輩探してるのかな」「そうかもしません。いや、きっとそうでしょう。でなかつたら、わざわざ校舎裏なんて、へんぴな場所に行くわけないです。

「どうしよう

「……戻りましょう」

月島さんが、由ちゃんたちと会わない可能性もあります。けど、もし会つてしまつたら……いや、だとしても、わたしたちには何もできないかもしませんけど。それでも、行かなければならぬうな、そんな気がしました。

由ちゃんが心配です。

わたしたちがシロと戯れていた場所へ戻ると、果たして、月島さんの後ろ姿が見えました。その向うに、並んで座る先輩と由ちゃんがいて、月島さんを見上げています。

その三人が一斉にわたしたちを見たので、ちょっとたじろぎました。

場は、ちょっとした緊張感に包まれていきました。

たぶん気のせいじゃないと思います。振り向いた月島さんの顔は、結構険しかったですから。

先輩は、すこし済まなそうな顔。

由ちゃんは、何が起こっているのかよくわかつていよいよ、困惑顔でした。彼女は月島さんが自分の恋敵だということを知らないのです。

これは、もしや、修羅場でしょうか？

でも、予想に反して、そうはなりませんでした。

少なくとも、表面上は。

月島さんはすばやく一度、先輩、白ちゃん、わたし、涙末ちゃんの顔を見渡すと、わざと踵を返してその場から去つていきました。何も言わずに。

「白ちゃん、大丈夫ですか？」

「えっ？ .....うん、もう体調はすっかり治ったよ」

事情のいまいち飲み込めていなこ白ちゃんは、すこしずれた答えを返します。

「何も言われませんでした？」

「月島さんのことなら、何も。ひくひくやんたけとほとんどの同時だつたから」

「そうですか」

正直、すこし意外でした。

彼女なら、もうすこし攻撃的なかんじになるのかと思つてしましました。文句言つたりとか。

「何か、あつたの？ 月島さんと」

「いえ。何にもないですよ？ 気にしないでください」

「なら、いいんだけど.....」

月島さんがすぐに戻つていつたのは、確かに予想外でした。でも、もつと意外だったのは、去り際ちらつと見えた、月島さんの表情です。

てつきり怒るのかと、思つてましたけど。

まさかあんなに 哀しそうな顔をするなんて。

「それじゃ、戻りましょ？」

「うん」

まだすこし不思議そうな顔をしている白ちゃんの手を引いて、わたしは保健室へ歩き出しました。  
わずかに、胸騒ぎがします。

せつめのじとじ、何かもうとよくなじじが起じるよつの気が、してしました。

そういう予感に限つて、当たるものなのは、どうしたなんですかね。

+ + +

体操服のみんなが元気に歓声をあげ、体育館の中を縦横に駆け回つています。

#### 体育の時間。

わたしと白けやんは、そんな喧騒を、端っこに座つて眺めています。

「ねこのシロ、かわいかつたよね」

「そうですね、今度保健室に来たときのために、ねこのじゅうじを用意しちゃましようか」

「うんそうだね、そひこみつ」

#### 基本的に、見学です。

白けやんが隣の組でよかつたと思います。体育の授業は数クラス合図で行われますが、白けやんがもし四組とか五組だつたら一緒になれませんからね。ちなみにわたしは一組で白けやんは二組です。白けやんがいるから、一時間も退屈しないで済むわけです。

「うわーす」こ、めちゃくちゃ跳んでるよ！」

「リアルダンク……。女の子なのに」

「」数回の体育は、バスケットボールです。いちおうチーム組んで試合といふことになつてゐのですが、みんなあんまり聞いてません。ちゃんととやつてゐひともいますけど、端っこに固まつて適当にパスしたりショートしたり、座り込んでお喋りしてゐひとたちもいます。

「……む」

そんな集団の「つか、ひとつがあやしげな動きを見せていてます。

「あ、あぶない」

何を思ったのか、ひとりの女子がバスケのゴールによじ登つてします。回りを数人の女子が囲つていて、ふざけ半分にボールを投げたりしていました。上の女子も、ときどき下に向かつて手を振つたり声を返したりしているので、いじめとかではない様子。罰ゲームでもしてるんでしょうか。

「ていうか……」上のひと、丹島さんじゃないですか。

白ちゃんはそれに気付いているのかどうか、あ、あぶない、とか小声ではらはらしている様子。わたしは何だか微妙な気分になります。放つておけばいいのに、とか。

そのとき、てん、てん、てんてん……、と、バスケットボールがわたしたちの目の前を転がつて、開きっぱなしになった体育館の扉から外へと出ていきました。

「あーもうつめんどくさいなーっ」

ボールが転がってきた先から、どうやら受け損ねてしまつたらしいクラスの子が、大声でぐぢりながら歩いてきます。

「あ、いいですよ、わたしが取つてきますからー」

ちょっとと氣分転換したくなつたのと、どうせひらくことない氣安さから、わたしはそんなことを言いました。

「あ、ほんとに？ ありがとう葉<sup>は</sup>桜！」

感謝の言葉に、軽く手を振つて答えるわたしです。

「というわけなので、ちょっと行つてきますね？」

「うん」

そう言つて、わたしは外に出ました。

白ちゃんをひとりにするのは、わずかな間とはいえ、ちょっと忍びない気もします。涙末ちゃんが居てくれればいいんですけど、運動ギライなので体育の時間は百パーセント学校にいなか保健室で睡眠です。健康なので、見学してると怒られるのです。かわいそうな涙末ちゃん。

つていうかボールはどこまで飛んでったんだしじょうね。なぜか無駄によく転がりますからね、外に出てったボールって。それで茂みの中とかに好んでダイブするわけです。人間には見えづらいところに。まこと憎々しいやつばらです。

なんて、すぐくどうでもいいことを考えながら、ボールを捜し歩きます。まじ見つかりません。

見捨てられた水道の影にそやつを発見したときには、もう十分くらいも経っていたでしょうか。めちゃくちや遙かなところまで転がつてますし……。

「はあ」

思わずため息も出るどやうもののです。ひとつと戻りまじょう。

白ちゃんお待たせー、と心の中で呴きながら体育館の入口まで戻つて来たわたしは、日に飛び込んできた光景に足を止めました。反射的に、物陰に隠れて様子を伺ってしまいます。

二人の女のこが、体育館の外で話しています。

一人は白ちゃん、そして白ちゃんの前にもう一人が立つていて、彼女をじっと見つめていました。

ただならぬ雰囲気。わたしの背筋が、ひやつと粟立ちました。

それは、月島さんでした。

## 第九話

「さつさままで、友だちと遊んでたの?」……。なぜ、やめつけ?。  
田ちゃんは、円島さんのほうを、すこし不安そうな面持ちで見ています。円島さんのおかしなオーラは察しているけど、どうしてなんかよくわからない。そんな感じでしょうか。  
「いえ、もしかしたら、田ちゃんも薄々感づいているかもかもしれません。円島さんの気持ちに。」

「最近わ?」

円島さんの声が、妙にはつきり聞こえます。

「先輩、あんまり会つてくれないんだよね」

「せんぱい、つて」

「知ってるでしょ? 夕足先輩!」

田ちゃんの肩がびくりと震えて、田が見開かれました。

「……衣花も、なんでしょ?」

「えつ」

「すぐ分かつたよ。あたしとおんなじだつて。あんた、分かりやすいよね」

「おんなじ、つて」

田ちゃんの声は、体育館から漏れる喧騒にかき消されそうなくらい、小さくなりました。

「おんなじつて……どうこいつこと?」

「そんなことは、どうだつていのつ?」

自分で言つたことなのに。

でも、それが乱暴な声だつたから、田ちゃんは、黙りました。

「あなたたち、いつも、保健室にいるよね。放課後」

「うん」

「そこに先輩、連れ込んでたんじょ」

「……連れ込んでなんて」

「一緒にしょ！ 先輩がいつも放課後、保健室に行つてゐるのは事実。

違つ？」

「やうへ、だけど」

「やつぱり、そななんじやない」

悪意に満ちた、声でした。ほらみる、言わんことじやないと。

「あなたたちがそんなことしてゐから、あたしが、先輩に会えないのよ」

攻撃的な調子でした。勢いで相手を黙らせる。話しかけてを拒絶して、一方的に自分の意見を押し付ける、そんな聲音です。

月島さんは、怒つてござました。

校舎裏で見せたよくな、哀しげで弱々しい雰囲気は、ビートにもありませんでした。

それは、いつも元氣よく教室で友達と笑いあひ、活発でにぎやかな彼女のイメージに重なるものでした。静かに哀しむよくなは、はつきりと怒る。そんな印象そのままに、今彼女はまさしく、自分の感情をあらわにしています。

他ならぬ、白ちゃんと。

「円島さんも……先輩と？」

「そうよ。約束して、会つてたの。でもちよつと前から、つて言つてもあたし的には相当長い間だけ、付き合つて悪くなつちやつて。でもそんなの理由聞けないでしょ？ ズットすゞしい氣にしてたんだから。でもよつやく理由がわかつてすつきりしたけどね！ ある意味！」

ねちつこです。けつさよく何が言いたいのか分かりません。分かりたくもないんですけど。

「まつて、ください」

ようやく、わたしは円島さんの前に、出て行きました。もっと早く、行けばよかつた。なのに、どうしてか、わたしは動けませんでした。

円島さんは軽くおどりこたようでしたが、相手がわたしと知るや

態度を元に戻しました。

「……異内<sup>くわいない</sup>。あんたには関係ないでしょ」

「なくないでしょ」

「何がよ」

さつと見詰めてくる、円島さんの田せ、すこし怖いです。

「田ちゃんはわたしの……友達ですから」

「ハッ」円島さんは、田を逸らして、わたしの言葉を鼻で笑い飛ばしました。

「トモダチのピンチに颶爽と登場つてワケ? 大したゴージャーだね」

口元に皮肉に笑つていましたけど、田がまつたく、笑つてません。

さつさつもずつと、おそれしい表情でした。

「さうやって関係ない話に首突っ込んで、あんた楽しいの?」

口げんかなんか、わたしはほとんどしたことがありません。こんな田で睨みつけられたら、わたしは何も言えません……。

「楽しいんだろ? ハッ。おめでたいよね。トモダチ助けて自己満に浸るんでしょ? あーあたらしいことしたな、やつぱり持ツベキモノはトモダチダヨネつて。ぜんぜん周り見えてない、自分とトモダチがよければそれでいいって考え方でしょ? やだよね本当ー。」「……そんなこと」

「じゃあどうして、あたしから先輩を取り上げるよつな真似するのよー。」

円島さんのものすい劍幕に押されて、わたしは田が合わせられません。

「どつしつつて、聞いてるでしょ」

「私たち……取り上げよつとなんが、してないよ」

田ちゃんの声は、すこし震えていました。田ちゃんは、まさに晴天の霹靂。無理もありません。

「してるよ」

「違つよ……」

「違わないよ。あんたにそのつもりがなくとも、結果的にそうなつてゐる！ わかつてないだけじょー。」

「……そんな」

「あんた、体弱いんだよね」

わたしは、俯かせていた顔を、あげました。

彼女は、何を？

「大方、それをダシにして先輩の同情誘つたとか、そんなんじょ？」

なつ。

「先輩は優しいからね。そんなふうに攻められたら、断れないよね、ぜつたい」

「何を……言つてゐんですか。」このひとはー。

「そんなわけないでしょー！ 白ちゅやんが、どれだけそのことを眞にしているか」

自分でもびっくりするくらい強い声が出ました。月島さんは、すこしだけびっくりした様子でしたけど、すぐに元の、攻撃的な表情に戻つて反論しました。

「……どうだか。口では何とでも言えるしね。自分でも卑怯なテ使つたつて、自覚あるんじやないの？」

「何を……！ 卑怯なことなんて！」

「そういうえばあんた、相坂といつしょに屋上近くにいたことあつたよね。ひょっとして、覗いてたんじゃないの？ あたしたちのことは、心臓を突き刺されたような気がしました。確かに、彼女の言つとおりです。

でも、わたしは、そこで黙るべきじやなかつた。

「……フン」

つまらなそうにわたしを一瞥すると、月島さんは白ちゅやんのまゝを見ました。

「……だいたいこれ」

白ちゃんはかわいそうに、蒼い表情で月島さんを見ています。

「あんたが先輩と付き合えたとしてもさ」

そのとき月島さんはわたしに背を向けていて、だから、わたしには彼女の表情は見えませんでした。

「体、弱いんでしょう？ 体育なんかぜつたいできなくくらい。毎日保健室行ってるんだし。そんなん、デートとかまともに出来るわけ？ できないんでしょう？ 行つたとしても体調崩して、先輩に迷惑かけるのがオチでしょう？」

ねえ。そんなん、先輩は幸せって言えるの？ 楽しいこともりくにできないで、あなたの世話をばかりで。それでちゃんと付き合つてゐるって言えるの？

ねえ、どうなのよ？」

な。

な、な、な、なつ！

何を言つてるんですか、このひとはー

白ちゃんの、

白ちゃんの気持ちも、知らないで！

「 っ！」

きゅうに自分が、二人に別れたような感覚でした。

ひとりのわたしは手を振り上げ、月島さんを叩こうとしています。もうひとりのわたしは妙に冷静に、その様子を観察しています。体の主導権は、月島さんを叩こうとしているわたしに、ありますた。

冷静なわたしは思いました。あつ、叩く　ひとを、叩いてしまふ。

そしてまた、上げた手が振り下ろされようとしたとき。

手首が、誰かに掴まれました。

はつとじて振り返ると、そこには険しい顔をした

「一咲……ちゃん」

一咲ちゃんはわたしに向かってすこしあを振ると、手首を放して、

円島さんと一緒に進み出ました。

「な、何よ」

月島さんが、一咲ちゃんを睨みます。でも声の調子はすこし弱まつていました。一咲ちゃんがどんな顔してるのか、わたしからは見えませんが、そういう怖い顔をしてるのかもしぬません。

「白は好きで体弱いんじゃない」

とてもしずかで、低い声、でした。

いつも静かに語る一咲ちゃんですが、今のは、とりわけ低い声。

意志の力で、感情を抑えた声です。

「謝つて」

「……何を」

「謝つて。白に。やつを言つた」と

円島さんに、迷いが現れたようでした。視線を揺らめかせ、白ちゃんの口づきをすこし見て、また一咲ちゃんを見ます。でも、彼女の答えは。

「……いやだよ。なんであたしが謝る気、ないの？」

「ない。何度も言わせないでよ」

「まだ、白に何か言つつもり？」

「話、まだ終わっていないからね」

「……やつ」

一咲ちゃんは、ふう、とちこくため息をつきました。そして。

「咲ちゃんは、予想外の一言を放ちました。

「先生！」

さゆうに振り返ると、体育館の中に向かって、そう声を張り上げます。

「なつ？ あんた！」

円島さんが色めきたつて立ち上がります。

どうした、とか言いながら体育の先生が小走りで駆け寄ってきました。

「月島さんが、捻挫したみたいで」

「なつ」

「だから、保健室連れていいつと思つたですけど」

「何言つてるんだよ！ あたしは」

月島さんの言葉を遮るように、一咲ちゃんは素早く、彼女を肩で支えるような体勢に移行しました。

「ちよつ！ あたしは何ともないってば！」

「いえ、見た感じ腫れてましたから」

一咲ちゃんは真顔で、大嘘をついてのけます。

体育の先生は、その言葉を信じたようです。おそらく、一咲ちゃんが眞面目な保健委員であることが効いているのでしょうか。優等生の立場を、最大限に利用した行動です。

それとも、案外、本当にケガしてたんでしょうか。……月島さん、さつきおかしなことしてましたし。

「じゃあ、行つてきます」

頼んだぞ、と言つてから、体育の先生は去つて行きました。

「あんた……」

月島さんが、恨みのこもった視線で一咲ちゃんを睨んでいます。

一咲ちゃんはそれをものとせず、月島さんを連行していくました。

……一咲ちゃんに、感謝です。

彼女が来てくれなかつたら、わたしたちは好き放題に言われて、どうなつていたか分かりません。

無愛想でも、わたしたちの話しに滅多に入つて来なくとも、一咲ちゃんは、確かに白ちゃんを大切に思つてゐるんです。だからこそ毎日保健室に付き添つて来てくれるし、連れて来るだけじゃなくて、その後も保健室に留まつてゐるんです。

普段は言葉すくんな一咲ちゃんは、まるで、白ちゃんの守護天使

のやうなひとで。

肝心なときは、必ず助けに来てくれるんです。

彼女のお陰で、当面の危機は去つましたが、

「……田嶋さん。大丈夫ですか?」

わざわざから俯いて、一言も喋らない田嶋さんが心配です。

どう考へても、田嶋さんの言葉は酷すぎます。体が弱いから、先輩と付き合つた? そんなばかな話が、あつてたまりますか。体弱かつたら辞せになつちゃだめなんですか? そんなはず、ないです。絶対に。

でも、田嶋さんは……。

「……田嶋さん」

白い顔で俯いたまま、細い細い声で喋りだした、田嶋さんは。

「私……。先輩のこと、好きでいちや、いけないのかな

「え?」

「そんな資格、ないのかな

……」めんなさこ、一咲ちゃん。

「めんなさこ、すこしだけ、遅かったみたいですね……。

いえ、それを言つなら、わたしがもつと早く出でこつていれば。  
そしてもつとまくやつて、田嶋さんがへんなこと言ひのを阻止できていれば。

「そんなこと、なにです。田嶋さんの言ひ方なんか、気にしちゃダメです」

「でも、田嶋さんの言ひ方には、戻すこと思つんだ」

「そんなこと」

田嶋さんは、わたしの言葉が聞けないとみなみに、喋り続けます。

「私は体が弱くて、すぐ体調崩して、だから外はちやんと歩けない。すこしあしゃいだだけで気分が悪くなつて……この間、なにのシロと遊んだときみたい」

「田嶋さん……」

「やうだよね。私なんかが、先輩のことを、好きになつたりやこけないよね……。月島さんの、言つ通りだよ。……あはは」

白ちゃんは、笑つたような声をあげました。

とても乾いた

笑つてゐるような、かなしい声。

それを聞いたわたしは、強烈に思いました。

何か、声をかけたい。

慰めてあげたい。

白ちゃんは先輩を好きでいてもいこんですと、分からぬであげたい。

だけどわたしは、何も言つことができませんでした。

何故なら

わたしも、少しだけ、

白ちゃんの言葉は正しこと、思つてしまつたからだと……思いました。

認めたくない。ですが、わたしも保健室に通つ身。体調崩すことなどじょつちゅうで、他のひとに迷惑をかけた経験など、数え切れないほどです。

だから、白ちゃんの言葉は、わたしにとつても他人事とは言えないとなんですね。

あるいは、今はそんなこと無視して、訴えるべき場面なのかもしれません。白ちゃんは先輩を好きでいてもいこんだと。体が弱いことなんか関係ないんだと。

でも、わたしには、どうしてもそれができませんでした。

そんな、自分で信じていことなんか、言えませんから。ましてや相手は白ちゃん。嘘塗れの慰めなんて通じないでしょ、うし、したくもありません。

でも……。

嘘塗れの慰めと、何も言わないことでは、どうがマジでじょうひゅうじでしようか?

今のわたしには、分かりませんでした。

「ねえ、白たん、何があつたの？」

「白ちゃんはあれ以来塞ぎ」んでしまい、三日経つた今日にはとうとう欠席してしまいました。

涙未ちゃんはずつと氣にしていたようでしたが、白ちゃんの前では聞くに聞けず、いなくなつた今になつてようやく聞くに質せた、といつわけです。

「ええ、ちょっと」

わたしは、月島さんとのことを涙未ちゃんに話しました。

「な……。どんだけ……」

真顔で、涙未ちゃんは愕然としました。

こつもくらべら笑つてゐるが、眠そうな顔をしてゐる彼女ですが、ときどきこんなふうにとても真面目な顔をします。

白ちゃんの一大事は、涙未ちゃんの真面目モードを発動させるには十分でした。

「酷すぎない？ 月島サンや」

「そうですね……」

涙未ちゃんは、怒つています。気持ちはよく分かります。分かりますが

「もみじはそんなに、怒つてそつじゃないね」

「ええ……まあ」

「悔しくない？ 好き放題言わせてさ」

「いえ、月島さんの言い方は確かに酷いですけど」

「じゃあ、どうこう」となのさ」

「それよりも、今は白ちゃんに元気出してもらわないと……」

ふつと、涙未ちゃんの顔から怒氣が抜けて、かわりにかなしげな表情になりました。

「……そだね」

「涙未ちゃんも、知つてますよね。白ちゃんが中学時代、ずっと一人だったこと」

「うん……」

白ちゃんの体の弱さは、今に始まつたことじやありません。ですから、中学時代も当然、今のように保健室常連という境遇でした。ですが、中学時代には、今のわたしたちのような友達はいなかつたそうです。

ついでに、保健室の先生もいまいやる気に欠ける人物だつたようです。

白ちゃんは、とても、寂しい思いをしていたと聞いています。

「ようやく、幸せになれそうだったのに。絶対放つておけませんよ」「そうだね……」

「このままだと、白ちゃん、もう一生恋なんて出来ません。何がなんでも、元気付けてあげなければ」

「うん」

涙未ちゃんは、力強く、うなずきました。

わたしたちにとって、白ちゃんは無二の大切な友達です。わたしも、白ちゃんと同じで、中学時代には孤立してました。お互いが、高校になつて初めてできた、友達同士なんです。わたしは忘れません。白ちゃんと、初めて会つたとき　　いきなり腹痛を起こし、憂鬱で仕方なかつた入学式。保健室で出会えた、わたしと同じ女のこのことを。

それは、涙未ちゃんも同じみたいで。

彼女の場合は、中学時代不登校気味だつたみたいですが、けつよく友達がいなかつたところはわたしたちと一緒にです。

今でも半ば、不登校みたいなものですが……。

ああ、もしかして。実現不能な皆勤なんてただの口実で、じつは保健室に来ることこそが彼女の登校目的なのかもしません。

「で、どうしようか

「そうですね」

わたしは思案します。でも、ここに数日すとすればかり考えて、それでも答えが出なかつたのですから、すぐには分かりません。

そこに、涙未ちゃんの提案。

「先輩に慰めてもらひつのは、どう？」

「うーん」

わたしの頭の中で、白ちゃんの声が再生されます。

「私、先輩のこと、好きになつちゃいけないのかな

「……逆効果じゃないですかね。いま、白ちゃんの気持ち的には、むしろ先輩は避けたいんじゃないですか？」

「そうかもしけないけどさ。でも先輩がいいつて言えぱいい話ですよ？」

「そう、ですね」

涙未ちゃんの言つことには、一理あるような気はしました。

氣はしたんですが、すぐにバーといつわけにもいかない氣もします。

「でもそれって、先輩が白ちゃんとのひとを〇〇するのが前提になりますん？」

「そうかなあ？ そうでもないと思つたばぢ」

「中途半端な優しさは、逆に粗手を傷つけると言こますよ~。」

「……むづ」

先輩に慰めてもらひて白ちゃんが復活し、それでも先輩的には白ちゃんNG、ではあまりに白ちゃんがかわいやうです。

「正直オーケーみたいなもんじやないのつて思つたばぢね。あの態度だと」

「まあ、そうかもしだせませんけどね……」

涙未ちゃんが言つことほもつともですが、どうも引っかかるものがあるわたしです。

「乗り気じゃない？」

「……いえ。あんまりいい方法も思いつかないですし、お願いくら

いしてもいいかもです」

それもまた、わたしの本心です。涙末ちゃんの提案を断る、はつきりした理由があるわけでもなし。何もしないよつばーい、と思いました。

「じゃ、行つてみよ。生徒会室のほうにいるかな？」

先輩は、すぐ見つかりました。

わたしは、自分が一体何に引っかかりを感じていたのか、知ることになります。

「……やっぱり、ダメです。行きましょう、涙末ちゃん」「…………うん……そだね」

わたしたちは即決で踵を返し、保健室に戻りました。歩み去るわたしたちの、遙か背後には。

楽しげに会話する先輩と、

円島さんの姿が、ありました。

「何なんですかっあれはつ」「

苛立ちのまま、わたしはベッドにダイブします。

「白ちゃんがたいへんだって言つのこつ」

「円島サンのほうがいいのかなあ、先輩的には」

「何言つてますか白ちゃんのほうがいいに決まつてますしー。」

「う、うん、ぼくもそう思つたぞあ」

わたしは枕でばふばふ、空気を吐き出した。

「だいたい煮え切らないんですよ、あのひとはー。」「た、確かに……」

「あの人気が最初からはつせりさせてれば、こんなことにはなつませんでしたしー。」「

「それは、そうだね……」

「悪いのは先輩ですー。」「

「そうだー。」

「断固、断罪ですっ…」

「ダンザイだ！」

拳を振り上げ、喚くわたしたち。

浅川せんせに胡乱な瞳で見られるに至りて、ようやく冷静になりました。

「……ふざけてる場合ではありません」

「……そだね」

少し座る姿勢を変えて、頭を冷やします。体温にあつためられていないシーツが、おしつに心地よいです。

「ていうか、誰が悪いのかって言えばさ」

涙未ちゃんはタオルケットを抱き締めました。手持ち無沙汰だと、何かを抱えたくなりますよねえ…。

「そもそも田島サンが悪いんだから、あのひとに謝りせねばいいじやん」

「……それは、ちょっと」

「ナリ?」

「あのときの剣幕からすると、彼女がそう簡単に謝るとも思えませんし。それに、今更謝つてしまつたといひで、泣け田ちゃんが元気出してくれるとは…」

「ああ……そうかもね」

田ちゃんが今のようになつたきっかけを作ったのは確かに田嶋さんですが、根本的な原因は別のところにあるよつて思えます。

田嶋さんに言われた、ところによつてはなく、田ちゃんが田嶋さんの言つたことを正しいと思つてゐる、ところが本当の原因なんじゃないでしょうか。

つまり

「田ちゃんは、体が弱いのが悪いんだ、と思つてます」

「うん」

「それは、間違いですよね」

「そうだね」

「だから、それが間違いだつて、白ちゃんに分かつてもうればいいんですよ」

「おお。もみじ、頭いい！」

「わたしはすこし、得意になりました。」

「ふふん。見習いなさい」

「うん。見習う。で、どうやって分かつてもらうの？」

「あ」

わたしは硬直しました。

「……そこまで考えてなかつたんだ」

「こつ、これから考えますし」

「顔が赤くなつてるのが、分かります……」

「涙未ちゃんも考えてくださいよ。つて、何してるんですか？」  
涙未ちゃんの指が、わたしの頬をつつきます。

「いや、別に？」

「にやにや笑いながら、涙未すけはつんつくわたしの頬をつつきます。」

「真面目にやりなさい」

脳天チヨップ。涙未ちゃんは黙りました。

「……いたい」涙目。そんなに痛くしたつもりもないんですけど。

「さあ、考えるんですよ。白ちゃんのために……」

「う、うん……」

それからしばらく一人で考えましたけれど、けつぎょくいい案は出てきませんでした。

+

「足、あげて」

「……もう少し、力抜いて」

「そう。そのまま」

保健室にときどき浮かぶ、一咲ちゃんの指示の声。

ケガした運動部のひとの、手当ををしているのです。

日は明けて、由ちゃんは今日も休み。わたしと、涙未ちゃんと、何の用事で来たのか一咲ちゃんの三人が、今日の放課後保健室メンバーでした。

そこにやつてきた、怪我人の男子。折悪しく浅川先生はおらず、かと言つて放置するわけにも行かないし、どうしましょう……となつたところで、一咲ちゃんが動いたのでした。

一咲ちゃんは迷い無い動きで棚から薬や包帯などを取り出すると、「そこに座つてください。傷を見せて」

といつものような無愛想声で指示、できぱさと傷の様子を検め、手当を始めました。

消毒、薬の塗布、包帯。

とてもいち生徒とは思えない、流れるような動作で処置を進めていきます。

じつと手元を見詰める一咲ちゃんの視線は、いつもよりすこしだけ鋭く、つまりいつもよりすこし、格好いいです。

誰も一言も喋らない保健室には、わずかに一咲ちゃんの衣擦れだけがありました。

静かで、おだやかで、だけど少しだけ傷と病のかおりがする、今 の保健室はちよつとした非日常的空间になつていきました。

やがてピッと包帯が巻かれ、一咲ちゃんは動きを止めます。

「終わり」

運動部男子の足から手を放し、顔をあげてわざわざ一咲ちゃん。相手の方は、硬直していました。

「……？」

怪訝そうに首をかしげる一咲ちゃんを見て、よつやく正氣に返つたのか。そのひとは慌てて立ち上ると、連れ添いの方に微妙に支えられながら、そそくさと保健室から出て行きました。

「……あれは、惚れたね」

ぼそっとした涙未ちゃんの咳きを、一咲ちゃんが電光石火で否定

します。

「そんなことないでしょ」

……表情、変わってません。ストイック。

それつきり黙々と、手当てセットを元の場所に片付けます。あ、手先が微妙に震えているのは、気のせいでしょうか？

「それにしても、見事な手際でしたね」「すいぶん、手当てするのに慣れてた様子でした。

「……そうでもないよ」

「わたしだつたらあんなふうにはできないですよ。一咲ちゃんが居てよかったです、あの男子も」

「先生に……言われただけだから」

「あ、そうだつたんですか」

そういうえば前も薬棚の整理なんかしてましたが、生徒にそんなことさせていいものなんでしょうか？

わたしの訝しげな表情を見てか、一咲ちゃんがすこし早口で付け足しました。

「本当は、私がそつをせてくれって、言つたんだけれど」

「一咲ちゃんが？」

「うん」

「どうしてわざわざ？」

「……いいでしょ、何でも」

拒絕ではなくただの照れ隠しなことは分かつてるので、わたしは更に突っ込みます。

「いいじゃないですか、聞かせてくださいよ」

「手当てマニア……？ 実は傷が好きだとか茶化す涙未ちゃんをはたいて黙らせます。すいぶんためらつた後で、

「……私将来、看護師になりたいの」

一咲ちゃんはぽつりと、そう漏らしました。

「へえ……そなんですか

白衣姿の一咲ちゃんを、わたしは想像してみました。無愛想に注射器を構え、嫌がる患者さんに容赦なく針を突き立てる……。で、患者さんが、「あ、痛くない」とか呟くハイスキルな一咲ちゃんの姿。

「似合いそうですね」

「ちよつと怖そうだけど」

涙未ちゃんの声はぼそりと小さなものでしたが、一咲ちゃんは耳ざとく聞きつけて視線を向きました。

「ひっ」

即座にわたしの後ろに隠れる涙未ちゃんです。怖がるくらいなら言わなければいいのに。

「一咲ちゃんなら、きっとといい看護師さんになれますよ」

「……どうだらう」

「なれますつて」

「でも、私には、体が弱い人の気持ちはよく分からない」「体が弱い人の、気持ち？」

すこし深刻そうな表情で、一咲ちゃんは俯いてしまいました。

「私自身はあんまり怪我したこともないし、病気といえばせいぜい風邪くらい。だから、本当は体が弱い人がどういう風に考えているのかとか、そういうことが想像できない。

……だから今、由にどうこう言葉をかければいいのか、私には分からないんだ

「……一咲ちゃん」

わたしたちと同じように、一咲ちゃんの気持ちにも、由ちゃんのことはずつとのしかかつていたのでしょうか。

「どうして白が落ち込んでいるのかは、私にも分かる。でも、どう

言って慰めたらいいのかは、私には分からない」

一咲ちゃんは顔をあげて、わたしを見ました。

「白の気持ち、葉桜なら、分かるんじゃない?」

それはどこか、すぐるような目でした。

すこし悔しそうでもありました。

「咲ちゃんの問いかけが、わたしの胸に染み渡つてこきます……、わたしこ、白ちゃんの気持ちは、分かるのか？」

白ちゃんの憂鬱に共感することは、できます。

でも、いま一咲ちゃんが言つてこるのは、そういうことではなくて。

つまり　白ちゃんを、助けてあげられるのか？

……とこつ、ことだと思ひます。

できるとは、正直、即答できません。だけど。

一咲ちゃんは、わたしにならそれができるはずだと、呟つてくれました。白ちゃんと同じ、わたしなら。

そうです、わたしにできなくて、誰にできるんですか。

まあ、そこまで言い切つてしまひのせ、すこし傲慢かもしれませんけど、でも、それくらいの気持ちになつたのは確かです。気合入つたところです。

だからわたしは、敢えて言い切りました。

「分かりますよ。白ちゃんの気持ち」

隣で涙末ちゃんが、おお、と小さな歎声をあげました。

一咲ちゃんはちょっと未練がましそうではあつたけれど、すこしだけ微笑んでくれました。

言い切つたら、それが本当のことになつそうな気がしました。

本當になればいい。

いえ、むしろ、もうならなことけないこんです。

## 第十一話

さうして心構えだの気合なので問題解決できるなら、苦労は要りません。とゆうか、もし世界がそんなふうにできたら、社会なんかとつぶに崩壊しますよねきっと。

わたしだつたら、気合で腹痛の治まる世界を望みます。すると腹痛患者を失つたお医者さんが儲からなくなり、失業。その他の病気が治らなくなるので、社会崩壊に至るというわけです。でもそれだと田ちゃんが困るのでやっぱりやめましょうか。

というか、そんなことはどうでもよのです。  
わたしは悩んでいります。

ついでに言つと、朝からお腹がじんじんしています。  
おなかいたいとまでは行かないものの、これは危険な兆候です。  
いつ奈落の底に向かつてまつじぐらに転がり落ちていくか分かつた  
ものではありません。いわば峠の途中にたまたまできた、平らな地  
面にからつじてしがみついている状態。ちょっと背中、というよ  
りお腹を押されれば、あつといつ間に

「やあ、もーみじ」

ビーンと体当たり。前かがみで歩いていたわたしは、バランス崩  
して廊下に転がりました。

「何するんですかつありませんしつ」「こんなことするのは涙未す  
けしかいませんしつ。

「う、うめえ。ちょっとテンション間違つた」

テンションは間違つてもいいから力加減は間違えないで欲しいで  
す。

「どうかあなたの場合間違えっぱなしじゃないですか」

「えつ、そう?」

「……」そんなショック受けたような顔されると、逆に申し訳ない  
氣になります。

「まあ　」

何がしかのフォローをしようとしたわたしの下腹部に、異常事態発生！  
ンジン

「…………」

「もみじ？　どしたの？」

涙未ちゃんが心配そうな声をかけてくれますが、正直、返事する余裕がありません。

これはつ、直下型です。

「ね、ねえ。大丈夫？」

直下型。

それは数ある腹痛モードの中でも、最悪の部類に入るひとつです。何が最悪かというと、トイレへの緊急性はトップクラスであるにも関わらず、動くとお腹の痛みが増すのです。

動けないのです。

これぞ、まさに地獄の苦しみ。

しかし地獄に仏と言いますか、痛みには波があるので、引き潮のときについにトイレに向けて前進する」ことが可能です。

わたしはそのときを、じつと待ちます。

「…………来たつ！　今です！

幸いにしてトイレは割とすぐそこ、この分なら何とか……、

つて、涙未すけ！　何してるですか！

「いや、お腹痛そだつたからさ…………」

なんと涙未すけはわたしの背中をぽんぽん叩き始めたのでした。涙未すけ的にはそれは痛みを和らげる方法なのかもしませんが、今のわたしには全くもつて逆効果。うつ、腸が少しうごめいてます……まじ危険ですしつ……。

わたしは必死で首を振ります。ほとんど涙目。

「う、ごめん…………」

涙未すけを視線で退け、わたしは約束の地、すなわちトイレに向けて悲愴な行軍を再開

あうつ！ 第一波がっ！

ああつ、この痛みと苦悩のスパイラル。これぞ地獄の苦しみという奴なのですね。もし死後地獄行きが決まったならば、こんな苦しみを永久に味わう羽目になってしまふのです。

死にたく無い！！

心の底からそう思います。

念じます。

というか、そうやつて苦痛から田を背けるのです。

冷や汗流しつつ、お腹の機嫌をとりながら、ゆっくり確實にトイレに近付きます。第三波をやり過いした後、ようやくわたしはトイレ領域に進入することが出来ました。

あとは個室に入るだけ、なのですが。

問題は、デフォルト状態では個室の扉は閉まっている、といつことです。

無論鍵などかかっているわけではないですし、ノブを回す必要もありません。学校のトイレはそんなに複雑な構造になつてません。だがつ、しかし！

今のわたしにとつては、手を伸ばし扉を引く、たつたそれだけの行動が致命傷となり得るのです！ 筋肉のわずかに余分な動きでさえ、お腹に伝わればカタストロフィを引き起こす恐れがあります。確率は低くとも、それは絶対に避けなければならぬ結末となれば……。

「……、」

わたしは後ろで心配そうな顔をしている涙未すけを見ました。いや、見たというか、わずかに頭を傾けました。

「ど、どうしたのもみじ

くいくこと頭を動かして、トイレの扉を示します。

「お、お腹いたいの？」

ちが一つ！ いやむしろなくてい、いいですから！ 力強すぎですし！

「え、違うの？」

さつぱり伝わりません。わたしは首を振り、そしてまたトイレの扉を開けてくださいと、無言のサインを送りました。

「も、もみじ、何が言いたいのか分からないよ！」

涙未すけはじんだ踏んで訴えます。なんであなたが泣きそつなんですか。泣きたいのはこっちですし…？

涙未すけ使えませんです！ ああもうひ、いつもなら電波の力で扉を開けるしか…？

いい加減第五波を数え、錯乱気味の思考の中、かるうじてわたしは扉を開けることが出来ました。正直、波の数が一ヶタに達すると超レッドゾーンなのですが、今回は何とかなりそうです。

そしてわたしの目の前に現れる約束の地、苦しい旅の終着点。

しかし！

実はこの瞬間こそが、最も氣を引き締めるべき真のクライマックスなのです！

その敵ラスボスの名前は、氣の緩み。

何故かは分かりませんが、「ゴールを目前にすると、こつもお腹が急に元気になるのです。本当に氣の緩みによるのかは定かではあります。ただし、とりあえずそれ以外に考えられないのをそういうことにしています。

ここが正念場。こんなところが決壊してしまっては、悔やんでも悔やみ切れません。

どうか、わたしが死にます。社会的に。

まあ、これについてはもう慣れたもの。いやつの真価は不意打ちによって発揮されますが、わたしに油断はありません。氣の緩みなんかにはやられませんよ。へへん。

(きゅー、きゅーっ)

油断を封印するひみつの呪文を中心で叫びながら、わたしは最後の一動作を完了します。

そんなわけで、ようやくのことで、わたしは無事にゴールに辿

り着けたのでした。

「もみじ、大丈夫？」

涙未ちゃんが遠慮がちに扉を「ん」と叩きます。

「大丈夫ですよ」

ようやく、返事することができました。

「もう、あのときにお腹叩かれたら危険なんですからね！」

「い、ごめん。よくわからなくて」

平謝りの涙未ちゃんです。へへーとかつて平伏しそうな勢い。いつもそへんな気分になりそうなくらいかしこまつちゃつて……。

「大体あなたには、相手への思いやりとこゝものが足りないのです」

「はい」

「道端のひとにこきなり体当たりしちゃいけませんで、先生に言わ  
れただでしょう！」

「言われてないけど」

「口忘れしない！」

「ひいっごめんなさい！」

別に何もしてないのに、叩かれそうになつた子どもみたいなリア  
クションの涙未ちゃん。

「まったく、これがもし白ちゃんならば……」

わたしは、すこし前に廊下で白ちゃんに助けられ、保健室まで連  
れて行つてもらつたときのことを思い出しました。あのときの白ち  
ゃんは気遣いに満ち、涙未すけのようにわたしのおなかを丁寧にパラ  
せるなどまつたくあり得ませんでした。

そうです、白ちゃんならば……、

白ちゃんならば？

「もみじ？」

白ちゃんならば、もっと勞わりある扱いをしてくれます。

わたしは、そう言おうとしていたのでした。

「もみじってば？」

何故、白ちゃんなら労われるのか？

それは、白ちゃんがわたしと同じだから。

わたしと同じで、体が弱いから。苦しこときの「じ」がよく分かっているから。

他人の痛みを、分かつてあげられるから。

「そうです！」

「うわっ！」

体が弱いから……優しくなれる！

わたしは目をぱちくつさせる涙末ちゃんの手を取つて、ぶんぶん振り回しました。

「白ちゃんのいいところ、あるじゃないですか！」

ばかですね、わたしは。

そんなこと、ずっと前から分かっていたことじゃないですか。白ちゃんは、困っているひとに共感できる。宝物みたいな、優しさを持つている。

それは本当は、体が強いとか弱いとかとは関係ない、白ちゃん自身のいいところであるはずです。優しいこと、それじたいが大切なのであって、理由などは重要じゃないのです。

だとしても。

やつぱり今だけは、理屈が必要なんだと思います。

白ちゃんが自信を失くして、落ち込んでしまつていてる今は。

白ちゃん自身に、自分のいいところを、思い出してもうつために。体が弱いから白ちゃんはこんなにいい子になれたんですよと、励ます材料になつてもらいましょ。

「い、いたいよもみじ…」

気付けばわたしは、ずいぶん強い力で涙末ちゃんの手を握りこんでいました。わたし自身の腕も、ちょっと痛いです。

わたしは、でも、腕を放さず、涙末ちゃんに顔を近づけてにやりと笑つてあげました。

「ふ、不敵だね？」

「うふふ。そうですよ」

「白たんの」と、何とかなつそ？」「

「ええ。でも、涙未ちゃんにも手伝ってもらいましょう？」

「え、ほくにも？」

田をぱぱくじさせる涙未ちゃんですが、その口元は何かを期待するように、緩んでいます。企みの香りを敏感に察知してか、それとも田ちゃんと一緒に助けられる興奮のためか。たぶん両方でしきりけども。

やっぱ、理屈は必要ですか、でもやっぱそれだけじゃ弱いので。実践によつて、田ちゃんには理解してもうつ必要があるでしょ。う。

それから一日後。わたしたちは保健室に集まって、作戦会議を開きました。

白ちゃんは未だにお休み。精神ダメージの大きさが伺えます……まあ、無理に来られて余計に体調崩すよりはいいんですけど。でも、わたしとしてはとても心配ですから、一度くらい顔を見ておきたいという気持ちもあつたりします。

ともかく、早く元気になつて欲しい。

それがここにいるみんなの、共通の気持ちです。

「で、どうするつもりなの？ もみじ」

すこしテンションが高いのか、涙末ちゃんはタオルケットを体に巻きつけて保健室内をうろうろしています。正直子どもっぽい……。そこがかわいいと言えなくも、ないですが。

「こちらを」

涙末ちゃんの様子があやしいのはいつものことなので、わたしはべつだん気にしません。とくに突っ込みます、わたしは今日の本題に入りました。

近くに座る一咲ちゃんの目の前に、一本の瓶をぶら下げます。涙末ちゃんも餌に群がるハムスターのように、駆け寄ってきました。

「なあに、これ？」

その疑問はもっともなことです。何せ、その瓶には、ラベルなど一切ないので此から。

「これはですね」わたしは精一杯もつたいつけて答えます。「微妙に体調が悪くなる薬です」

「微妙に体調が」

「悪くなる、薬？」

涙末ちゃんの咳きを一咲ちゃんが引き取るといつ、漫画やアニメではよく見るけど実際にはかなりありえないことを一人はやっての

けました。息のあつたコンビネーションです。」のひとたち、本當は仲良くなれるんじゃないですかね？」

「てゆうか、体調悪くなつたらそれ薬つて言わなくない？」

「まだ話は終わつていませんよ。それにこいつ言葉もあります、

『死ねない薬は薬じやない』」

「ええ……。じゃあ薬飲むのやめよつかな……」

あなた何か飲んでたんですか。見たことないんですけど……。

「まあ、ふつうは気にすることはないと思いますが……要は、何でも使いよつだということです」

「どこのからそんな薬を」

一咲ちゃんは、そのビール瓶みたいな中身の見えない入れ物を一生懸命睨みつけながら、ぼそっと呟きました。真剣すぎてすこし怖いくらいです。看護師志望だから、薬マニアだつたりもするんでしょうか？

「はい、何を隠そう、浅川先生に作つてもらいました」

「浅川先生が？ 体調の悪くなる、薬を？」

一咲ちゃんは、机に座つて何やら事務仕事をしている先生を見ながら呟きました。

「てゆうか、せんせ、薬なんか作れるんだ……」

「浅川先生作つていうところがポイントなんですよ。お一人とも、あの方のスキルは存知でしょ？」

「ぐく、と頷く一人。

その腕、正に適剤適所。先生が選んだ薬を飲めば、どんなに具合が悪くてもたちどころに元気を取り戻すという、生ける都市伝説それが浅川瞳という先生です。

「ひとを治せるといつことは、すなわち思い通りに具合悪くさせる」ともできるといつ理屈です

「なるほど、それで『微妙に』体調が悪くなるんだね」

「その通り」

「先生が、そんな薬を……？ そんな薬、作つてもらえるとは思え

ない。いくら微妙って言つても、

「はい、そこはですね」

想定内の疑問です。

「これを使つて、白ちゃんに元気を取り戻してもうつって言こまし  
たから」

「体調悪くなるのに、元気……？」

涙未ちゃんの頭上にはてなマークが浮かびます。

やがてそれが電球マークに変わりました。

「わかつた怪しい薬だ！ それを白たんに飲ませて、元気いっぴ  
だ！」

「違いますし！？」

精力増強剤か何かと勘違いしてゐるんじゃないですか、このひとは。  
「だいたい薬でもりやり元氣にしてどうするんですか。何にも解決  
になつてませんてば」

「いや、そういうのが必要なこともあるよ？」

ふいに真顔でそんなこと言われても困ります。

「ま、まあそれはそうかもしだませんけどね」調子狂つちやいます  
よ。

「つふふん、でも元気になるけど体調悪くなるつてことはアッパー  
系……？」

と思つていたら何処か別の世界にこんじちはし始めました。なん  
ですかアッパー系つて……つていうか話聞いてないですこのひと。  
もう怖いので放置です。

「白に飲ませるわけじゃないよね。それで、どうあるの？」

「咲ちゃんのまともさが、今は何よりあります」

「これを飲んで体調悪くなつてですね、白ちゃんに助けさせるんで  
すよ」

「それが、作戦？」

「はい。そうすれば白ちゃんは、体が弱いがゆえに身に着けること  
ができた自分の優しさを自覚でき、元気になれるといつわけです」

「……」

あれ、なんか不発です？

「そんなにうまく行くかな？」

「ダメですかね？」

「だめっていうことは、ないけど」 そんな不安そうな顔で言われる  
と、自信なくなってしまいます。

「それで、誰が飲むの？ その薬」

「それは、涙未ちゃんしかいないじゃよ！」

「ぼくなんだ！？」

肝心なところだけちゃんと聞いてるひとですね。

「何を言つてるんですか当然でしょ！」

「当然！？」

「驚くといじやないですよ。一咲ちゃんには『介抱する力がうまく  
いかないひと』の役をやってもらいつらですから」

「そんな役が」

「ええ。一咲ちゃんがやつても「うまく行かない、だけど白ちゃんが  
やつたらうまく行つた！」となれば、白ちゃんもずっと元気になれる  
はずなのです」

「……なるほど」 一咲ちゃん、微妙にほつとしてるよとい聞えるの  
は氣のせいでしょうか。

「いや納得しないでよ！ ぼくが体調悪くなつてもこいの？」

「白ちゃんが元気になれなくともいいんですか！？」

「逆ギレ！？ ねえこれって逆ギレだよね？」

「大丈夫ですよ、浅川せんせが作つた薬ですから。ちよこつと頭が  
ぼーっとして悪寒がして、もしかしたら熱が出るかもしれないぐら  
いですから。ええと、マックス七度五分でしたつけ？」

「十分イヤだ！」

「飲みなさい！」

ぐいと薬瓶を涙未ちゃんに突き出します。ひととお間抜けな声を  
出し、タオルケットを翻して涙未ちゃんは逃げ出します。追つてい

つたらタオルケットでひっぱたかれました。ぜんぜん痛くはないですけど、なんか子どもに叩かれたみたいで屈辱。

「もみじが飲めばいいじゃないか！」

「わたしが飲んだらダメでしょ？」

「なんで？」

「だって、わたし、体弱いですし」

「まあ、……そうだね」

納得しちゃつた。

「あれ？ リアルにぼくしかいなーのー？」

「ようやく自分の置かれた立場が分かつてきましたようですね。ああー…」  
部屋のすみっこに追い詰めてやりました。もつやつに逃げ場はありません。

「ひーーいやだー

タオルケットがぶつてもダメです！

「やつやめてえ」

「往生なさい！」

「ひつひとでなしー」

「何ですとうー！ 白けやんを見捨てるつてこいつですかー！」

「それするー！」

「するくとも正義ー！」

タオルケットを引つべがしては取り返されるといつ、一進一退の激戦です。

「はあ、はあ」

いつまで経つても勝負がつきません。疲れました。

これ以上やつてたらわたしの身が、もちません……。

「かつ、一咲ちゃん、この薄情者に何か言つてやつてくださいよー」

一咲ちゃんは無言で、こっちに歩み寄ってきました。

どこか思いつめたような、すこし険しい表情。

「一咲ちゃん？」

「……しが飲む」

「え？」

「それ、私が飲む」

「ええっ」

「によつと手を差しだす一咲ちゃん。予想外の展開です。  
「で、でも」

「それ飲めば、白が元気になれるんでしょう？」

「い、いつものクールな一咲ちゃんはどう。  
ついせりつきまでまともだと思つたのに、なんか言つてゐ」とへん  
ですよ。

「誰かが飲まないといけないなら、私が」「  
じりじり近寄つてくる一咲ちゃんは、やたらと威圧感があります。  
今度はわたしが、部屋の隅っこに追い詰められました。  
ぺたんと座り込むと、隣にはタオルケットを頭からかぶつた涙末  
ちゃんが。

「涙末ちゃん、涙末ちゃん」

「な、なに？」

「入れてください！」

返事も聞かず、わたしはタオルケットをめぐつて中に入り込みま  
した。

「ちょっと狭つ！　いきなりびうしたの、もみじ」「  
「緊急避難です！　一咲ちゃんが壊れました！」

「ええっ！」

「ちよつ狭つ！　いきなりびうしたの、もみじ」「  
「緊急避難です！　一咲ちゃんが壊れました！」

「絶対絶命！？」

「さつ、さつちゃんも意外と面白いね！？」

「わたしだつてこんなの初めてです！」

「いや待つてください。なんでわたし逃げてるんでしょう。べつに  
一咲ちゃんでもいいはずです。わたしでなければ。

頭は冷静になつてしましましたが、一度始めてしまつたものは止

められません。なんでこんなことしてるのかも分からないまま、わ  
たしたちは三つ巴の陣取り合戦を繰り広げました。

そんなとき、扉が開くがらがらとした音が聞こえた気がしまし  
た。が、誰だろうとか気にする余裕もありません。というか見ら  
れたら恥ずかしいので止めて欲しいんですけど、他の一人はそれす  
ら分からぬほどヒートアップしちゃってるんでしょうか？

「白のためなら薬飲んで体壊すくらいなんでもない！」

こんな状況でなければ格好よかつたに違いない台詞を叫びながら、  
一咲ちゃんが一際強くタオルケットを引っ張りました。

するりとわたしたちの手を抜けて、取り扱われる掛け布。  
開けた視界に移るのは、肩をいからせて立っている一咲ちゃんと

「……白ちゃん？」

今日は休んでるはずの白ちゃんが、いました。

「え？」

わたしの眩暈に、他の二人も一斉にそれらを見ます。  
痩せたちいさな体。すこし曲がった背中。蒼白い肌。確かにそこ  
にいたのは、見慣れた白ちゃんでした。

「白……、今日は休んでたんじや？」

一咲ちゃんがぼうっとした様子で話しかけますが、白ちゃんはどう  
したのか、返事をしません。

そう、それは確かに見慣れた姿の白ちゃんでしたが、ひとつだけ、  
見慣れないところがありました。

表情が。

なんだか、怒ってる？

「……どうしたの？ 具合悪いの？」

「わつを言つてたのつて、どうこういふと……？」

一咲ちゃんの言葉を遮るようにして、白ちゃんは言いました。い  
つもより低い声。白ちゃんではないけれど、今の表情にはぴつた  
りの、抑えた声。

「白ちゃん？」

「私のためなら体壊すなんて何でもない、つて、どうこういふ」と？」

聞かれていました。

白ちゃん本人にばれてしまつてことは、意味がありません。これ  
は計画練り直し……。

いや、それよりも、白ちゃん自身の様子が氣になります。  
どうしてこんなに、不穏な空氣なんでしょう。

わたしは白ちゃんの言つたこと、自分たちの言つていたことを思  
い返しました。

白ちゃんのためなら、

体壊すべり

「……あ」

「ああ、これは。

「大変なんだよ？ 体壊すのつて」

「白ちゃんが怒るのも、無理ないです……。」

「動けなくなつちゃつて……『ご飯もちゃんと食べられないし。おいしくないし……苦しいし。病院に行つたら、お金だつてかかるんだから』

「し、白。これは、白のためを思つて」

「そんなふうにされても嬉しくないよ……」

顔を真つ赤にして叫ぶ白ちゃんなんか、初めてみました。

「私のこと考えてくれてるのは嬉しいけど……でも、それでみんなが体壊しちゃうのは、いやだ」

「白……」

ものすごい迫力でした。

白ちゃんのからだは小さいし、声も大きくありませんし、ぜんぜん怖くはありません。

でも、とても心のこもつた声。

「体壊して学校来れなくなつたら、みんなとも会えないのに……」  
「そんなに怒つたら体に毒だ、と思いはするものの、口を挟むことさえできません。

「分かつてると思つてたのに。みんなない、知つてると思つてたのに……」

胸が苦しいです。白ちゃんに怒鳴らせてしまつたこととか。白ちゃんのためとはいえ、おかしなことを考えてしまつたこととか。たぶん、みんな同じ気持ちだと思います……、  
白ちゃんも含めて。

「ばかっ！ みんなのばかっ！」

だつて、白ちゃんが一番、苦しそうな顔しますもの……。  
すこしの間、誰も喋れませんでした。

その沈黙を破つたのは、浅川先生の声。

「衣花。そんなに怒らないでやつてくれるか」

「……でも」

「まあまあ。」こちらも衣花のためだと黙つてやつたことだし。やれど、「え？」

「ああ、先生。」でねたばらしけりますか。でも、こいつなつてしまつては仕方ないです。

「その薬な、ただの塩水だから」

『え？』

涙未ちゃんと一咲ちゃんの声が重なりました。

「体調悪くなんかならないから。考えたのはハザだけど、流石に本当に体壊すようなことは出来ないからってね。ちゃんと考へてるんだよ。だからそり、怒らないでやつてくれるかな」

一人、気の抜けた声を出します。

「……なんだ、もみじ。それならうつて言つてくれればいいのに」と「うん」

「ええまあ……でも、プラセボ効果が狙いだったのでも、言つて言え

ず

偽薬効果といふのは、薬でも何でもないものを「薬ですよ」と言つて「こえる」と、ありもしない治療効果が現れるといふしきな現象のことです。病は氣からとゆうのを地でいく効果です。眉唾ではなく、実際の医療現場でも使われている方法だそうです。

まあ、普通は治すために使うわけですが。

「本当はコトが終わつた後、わたしが飲んで何ともなことですよーって言つつもりだったんですよ」

「……なんだ。やっぱり。信じてたよ、もみじー。」

あれだけ必死に逃げてた癖に。

一咲ちゃんは、ちょっと慚然としています。こつものよつた顔ですが。

「……そりこいつわけなので、由ちゃん。そんなに怒らないでくださいよ」

「……」

白ちゃんはもへ、怒つていなそりでした。

かわりに、なんだかしゅんとしていました。

「怒つてなんかないよ。でも……私」

俯いて、すこし泣きやうな様子で……。

「けつきょく、さくらひたちがそつこい」とこよひとしたのも、

私のせいなんだよね」

「え……」白ちゃんのせこい。

「私の体が弱いから、さくらひたちに心配かけて、体壊やうつていうことになつたんだよね」

「それは、違います、と訴ねりとしたわたしは、白ちゃんの一言で動きを止めることになりました。

「私なんか、いなければ

「なつ」

それは、わたしの大切な場所を抉る一言でした。

「私がいないほうが、みんな元気」……

自分否定を続ける白ちゃんに対し、なにか、とげとげしてくるような、熱い、でもやわらかいよつな、よく分からぬものが湧き上がりてきます。

それは、叫びになつて、わたしの口から出でこきました。

「何言つてるんですか！」

白ちゃんが、みんなが、驚いてわたしを見たのが分かりました。でも、止められません。

「いないほつがいって、そんなことないですよ！」

白ちゃんが目を丸くしています。そうですよ、分かつてなかつたなら、もっと驚いて、もつと目を見開いて、はつきりとわたしたちを見ればいいんです。わたしたたちの声を聞けばいいんです。一度と、そんなこと、言えないよつに。

「どうして、そんなこと言つんですか。わたしたちの気持ちも、嘘だつていうんですか？」

「ちがう……そんなこと」

「だったら、そんなに自分をけなすのはやめてください。哀しくなりますよ。白ちゃんが自分を否定したら、わたしたちの気持ちも一緒に否定されちゃうじゃないですか。そんなのいやですよ、わたしは……」

ひょっとしたら、押し付けがましいのかもしません。

一方的に好意を押し付けて　わたしがしていることは、白ちゃんの気持ちを踏みにじっているだけなのかもしません。でも、わたしは信じています。

白ちゃんも、わたしと同じ気持ちだと。

だから、分かってもらえるはずです。きっと。

お互に一人だった日々。寂しかった頃。白ちゃんと会えて、わたしは学校に来るのが楽しくなりました。白ちゃんがいなかつたら、わたしは今頃不登校になつてたかもしれません。

だから、わたしの中の大好きな場所に、白ちゃんがいる。

そして、わたしと同じだった白ちゃんの中にも、きっと、わたし

が……。

……いたらしいな、としか言えませんけど。……ダメです。考えすぎるとダメです。勢いが重要です。そう、だから、早く言つてしまえです。

「わたしは、白ちゃんが大好きなんですからー！」

「えっ！」

「白ちゃんは、どうなんですかー？」

「わっ、私はっ」

顔真っ赤にしてうろたえる白ちゃんを見て、わたしも何だか

「わ、私も、好きだよ。さくらちゃんのこと

恥ずかしい」とかいうレベルじゃないですね。

それ以上白ちゃんの顔を直視できなくて、わたしは俯いてしました。

「わ、私も、好きだよ。白のこと」

何故か慌てたよつて、一咲ちゃんまでそんなことを聞こ出します。

「ほくもだよ！」

涙未ちゃんまで。

どんな追い討ちですか。

「……あ、ありがと。みんな」

呆然とした白ちゃんの呟きは、微妙に状況についていけないことを示しています。

みんな、どうしちゃったんですか。

あ、悪いの、わたしです？

「あー……キミタチ……青春してるねえ」

浅川先生の一言が、ヒドめになりました。

顔から火が出るとはこのことです……くらくらして倒れそう。というか、何の話でしたっけ。何でこんな告白合戦みたいな」と

に？

……。

ああ、そう、白ちゃんが元気失くしてゐるって話ですよ！

「え、ええと。白ちゃん」

「はつ、はいつ！」

かしこまらないでください。

「げ、元気に……なりました？」

そういうと、白ちゃんは、ちいわな胸に手を当へて、ほつと息をつきました。

「う、うん……ありがとう。なんだか、安心した気がする。みんなと一緒にいてもいいんだって」

また顔を赤くして、俯く白ちゃんです。

「そう、それですよ！ それが言いたかったんです」

体が弱いとか関係なくて、白ちゃんは白ちゃんだから……何言ってるか分かりませんけど、ともかくそういうことです。

「一緒にいてもいいんですよ。体が弱いくらい、迷惑でも何でもなくて。むしろ迷惑かけて欲しいくらいですよ」

「うん……え？」

意表を突かれたのか、驚く由ちゃんに、一咲りちゃんと涙末ちゃんが次々と声をかけていきます。

「白を助けられると、私は嬉しい。だからもつと、迷惑かけてもいいよ」

「や、そうかな……」

「ぼくが学校来るようにになつたのつて、白たんが保健室に居るからだよ。白たんのおかげ。体弱いのだつて、悪いことばっかりじゃないつて」

「…………うん」

頷く由ちゃんの顔は、晴れやかなように見えました。

由ちゃん風に言つと、せかいが開けた笑顔。雨上がりの青い空虹のよつな、ほんやりとしているけれどきれいな微笑みです。

「ほんと……ありがと……みんな」

分かつてくれたんだ……と、思います。よつやく。

これで、ひと安心ですね。保健室に、じこかほんわりあつたかい空気が流れました。

では。

忘れちゃいけない、本題を。

「相手が先輩でも、一緒ですよ」

「えつ！」

きゅうに先輩の話になつてびつくりしたのか、由ちゃんはすこしふび上がりつて後ずさります。

「要是先輩が由ちゃんを好きになればいいんですよ」

「そ、そつかなあ。でもそこが、一番の問題だよ」

「それは、これから由ちゃん次第」

「うつづ」

「大丈夫だよ。先輩、白たんに『ありそつだつたし』

「そつ、そんなことないよつー」

頬を桃色に染めて否定する由ちゃんの様子に、すこし前のような

悲愴なものは、ありません。からかう涙未ちゃんにぽかすかしてい  
るその姿は、わたしたちがよく知っている田ちゃんそのものでした。

「よかったです。白ちゃん元気になつて」

仏頂面でその様子を眺めている一咲ちゃんに、わたしは話しかけ  
ます。このひとは先輩と白ちゃんの話になると、なんだかいつも面  
白くなれやうな顔をしていますね。

「うん」

でも、田ちゃん自身の話になると、いつもからは想像もつかない  
ほど、柔らかい表情になるんです。見た目には分かりづらいけれど、  
一咲ちゃんも白ちゃんのことが好きなのだなあと分かります。

けつぎょく、初めに考へてた筋道とは、ぜんぜん違うものになつ  
ちゃいましたけど……といふか、薬飲んで嘘でも体調悪くなるなん  
ておばかなことしなくて済んで、むしろ良かつたですけど……とも  
かく、白ちゃんが元気になつて、結果オーライといつひと。

「お前ら、優しいよなあ。衣花も幸せ者だ」

傍観者に撤していた先生が、そんな感想を述べました。

自覚できない幸せに、意味はありませんから……とか、思いまし  
たけど、流石に恥ずかしいので口に出しませんでした。

+ + +

「ところが、白ちゃん。体は大丈夫なんですか？　今日はお休みだ  
つたはずじゃ」

とりあえずの落ち着きを取り戻し、保健室はいつもの空氣に戻り  
ました。わたしも、白ちゃんも、一咲ちゃんも、涙未ちゃんも、い  
つもの配置です。

もうそろそろ陽も沈みそうな頃合でしたが、何だか疲れたのです  
こし休んでいいことになりました。

「うん、みんなに心配かけてるかなあと思って。今日も休もうかな  
と思つたんだけど、体調はそんなに悪くなかったから」

「いいこですねえ……」

「無理しなくてもよかつたのに」「ちょっと、せかいが狭くなるしくなつてきただつていつのもあるんだけどね」

寂しかつたらしいです。

えへ、とはにかみ笑い。どうしましょ。う。

「ま、今日白たんが来なかつたら、もつとやせやじこになつてたかもだし。いいんじやない?」

「そうですね」

晴天の霹靂、のち雨降つて地固まるといつ感じでしょうか。

「あの」

「何ですか?」

白ちゃん、ちょっともじもじした様子。

「夕足先輩のことなんだけど……何か、言つてたり、しなかつた?」

「あ、それは気になりますよね」

「うん。その……」

「大丈夫。ちゃんと白ちゃんの」と、心配してくれてましたよ」「これは本当のことです。詳しい事情は話してませんけれど、白ちゃんが休んでいると知つたときの先輩の態度じたいは、是非白ちゃんに見てもらいたいくらいでした。ずいぶん心配そうで。

「そつか」

ほつと息をつく白ちゃんです。安心成分が主みたいですが、心配かけて申し訳なさそうな色も混じつるのは、じ愛嬌でしょうか。白ちゃん自身が元気になつたのは良しとして、しかしもう一つの問題、先輩とのことは何にも進展してないんですね。

保健室に先輩を呼んで、白ちゃんととの距離を縮める。その作戦はとうあえず、うまく行きました。

でもその成功に気をよくして、わたしたちはだいじなことを忘れてしまつていた気がします。

それはすなわち、月島さんの存在。

恋敵がいるんですから、のんびりじっくり、どこつわけにはいかないはずです。

となれば。

「先手必勝」

「ふえ？」

白ちゃんのほうを向いたわたしの田に、おかしなものが飛び込んできます。

いつのまにか涙末ちゃんがそこにいて、田ちゃんに妙なかたちのカチューシャをつけていました。ねこみみカチューシャ。ちょうど装着、整え終わつたところのようだ、一人して白ちゃんの頭に手をやつたままこっちを見ています。

「……それ、かわいいですね」

意外とカチューシャのねこ耳はリアル志向です。もしもこいつが、毛っぽいとか。白ちゃんは小動物系の雰囲気なので、やら似合つてます。涙末ちゃん一体どこからそんなもの出したんですねかとか、そんなどうでもいい疑問が吹っ飛んでしまつ愛らしさ。

「似合うでしょ？ ほくの目に狂いはないのだ」

ぼむぼむと白ちゃんの頭を撫でながら、やたらと誇らしげな涙末ちゃんがすこし、にくらしいです。

「さくらちゃん、先手必勝、って何？」

田ちゃんの声で我に返ります。うつかりねこみみ田ちゃんに心奪われました。あやうー。

「え、ええ。先輩のことなんですか？」

「う、うん」

「单刀直入に言こますけど」

「うん」

「告白しません？」

一瞬の空白の後、白ちゃんの頭が耳まで桜色に染まりました。

「そうだねえ……。いけると思つし、やつちやいなよ」

陽気な涙末ちゃんの、天然援護射撃。

白ちゃんはふるふる震えながら、よつやくこいつた感じで声を絞り出しました。

「むっ」裏返ります。「む、むつだよっ」

「……やつぱり不安ですか?」

「それもあるけど」

「恥ずかしい?」

どうでもいいですけど、涙末ちゃんが引っ張ってる耳、わたしも引っ張りたい。

「う、うん……」

白ちゃんはきゅっと、掛け布を抱きしめました。

「もし断られたらって思つと、やつぱり

「でも」

あんまり言いたくはないですけど、仕方ないです。

「あんまりゆづりも、してこられないですよ……」

「う、うん…… セウ、だよね」

白ちゃんは案の定暗い表情になってしまって、わたし、すこし後悔。

でも、気持ちよく分かります。直接言つのは勇気が要ります、とても、とても。わたしが白ちゃんの立場だったとしても、恥ずかしくてすぐには言えないでしょ?。好きなひととか、こませんけども。

何か、いい方法はないものでしょうか……。

「じゃあ、プレゼント攻撃だ」

「なるほど」涙末ちゃんの言葉を、わたしは素早く脳内で検討します。

「それは、いい考えかもしません。涙末ちゃんらしく、ちょっと短絡的な気もしますけど」

「二重にバカにされた気がする……」

「何言つてるんですか、誉めてるじゃないですか。短絡的っていうのは、分かりやすくていっていう意味なんですよ」

「へえー、やうなんだ。……今考えたでしょそれ

「てへ！」

「いや、かわいくしてもダメだから。というかおひでで軽く自分の頭小突いてもだめだから！」

「さて、何をプレゼントするかが問題ですね」

「わあ、無視しないでよー！」

「田ちゃん的にはじうですか？」の線は

「完全無視！？」せんせえー」

涙未ちゃんはつこに、先生に泣きつきに行つりやこました。ちょ  
つとやりすぎたかも。

「え、えーっと……それなら、すこしご、言こやすいかも。でも、何  
がいいのかなあ

「そうですよねえ……」

このテの問題は、いつそ相手に聞いてしまつのがいいとわたしは思つてゐるんですが、この場合それも何か違つ氣がします。何となくですけど。

しかし、何が、足りないような……。

「うーん」

プレゼントですから、先輩の好きなものがいいですよねえ。

それでいて、告白に相応しいもの。

何氣にわたしも結構先輩と話してますから、というか田ちゃんと先輩の会話を横で聞いてましたから、先輩情報は結構持つてます。その中から、以上の条件に合致するものは何かないかと脳内検索です……

……

「あ。……

「あーーー。」

「どうぞいたのもみじちゃん

「ありましたよー。ピッタリなのが！」

「えつ？」

ああ、ベッドの分だけ離れてる距離が、今は遠すぎます。手を取つてぶんぶんしたいくらいな気分なのよ。

「ね、ねえ、ピッタリって、何?」

「ふふん、それはですね」

無駄にもつた！

「それはつ、すなわち！」

びしーんと人差し指を突きつけて、わたしは高らかに宣言しまし

た

恋文です！」

由がやんばはなはなと十歳ぐらいたじめ

「うう、うぶれたーー!?

## 第十四話

恋文。

恋い慕う心を打ち明けた手紙。  
新明解国語辞典、第六版より。

「どんだけ古風？」

「涙未すけうつさい」です。確かに古風ですけど、先輩がいって言うんだからこの場合はこれがベストなのです。古風ですけど

「む、むりだよ！」

「そんな弱氣でどうするんですかッ！」

「ひつ」

「一喝です。めーです。

「心のこもった文章が、先輩の心の扉をガンガン叩いてこじ開けるんですよ！ そしてその手紙は大切に保管され、二人がケンカしたときに仲を取り持ってくれたり」「

「ケンカなんかしないよう！」

「倦怠期に付き合い初めのうぶな心を教えてくれたり！」

「けつ、倦怠期？」

「そして結婚式で読み上げられて、みんなの話のネタになるんですうううつ！」

「けつこんーーー？」

白ちゃんは目を回し始め、頭のてっぺんからゆげを吹き……。ぽてんとタオルケットの上に倒れこんで、動かなくなりました。

「…………実際、どうですか？ 無理そうですね？」

「ううん……どうかな」

何事もなかつたように起き上がり、ふつうに受け答え。白ちゃん意外とノリがいいです。

「書いてみたことなんかないし……。やつてみないと、分からぬよ」

書いたことあつたら、逆にびっくりですけど。

「まあ、白ちゃんなら大丈夫でしょう。ノートに詩書き溜めます

ポエム

し」

「えつなんで知ってるの?」

「え」……冗談だったのに。

「え」  
フリーズ  
時間凍結。

わたしは時を巻き戻し、気を取り直して話を先に「白さんのポエ

ム、後で見せて!」

涙未すけー!

「空氣読めですっ」

「あいたつー!」

白ちゃんに詰め寄るおばかさんの後頭部に、わたしはチョップを叩き込んで黙らせます。

「やつてみます? 恋文」

そして何事もなく、話を進めます。黒歴史ホタルイとか触れないのが大人のマナーですし。

「う、うん」

白ちゃんは、「ぐぐぐと頷きました。

「……恥ずかしいけど、でも、私もそれがいいのかなって思つ

顔は、桜色満開。

ひみつを暴かれたせいなのか、それとも恋文書くのが恥ずかしいからなのかは分かりませんが、

「はあ……、せかいがゆれてるよ……」

そう言つて両手を胸に当てて、ほつと息をつく姿は、まさに恋する少女です。俯いてちいさなまつげをふるふる揺らし、くちびるをゆるく結んで考えに沈む白ちゃん。いま、白ちゃんの頭の中は、出合つてから今までの先輩の姿と自分の気持ち、そしてそれらぜんぶを、どうやって固めて文字の形にするのか、で一杯いっぱいに膨れてるんです。

ちょっと切なそう。

「どうやって伝えていいか、よく分からぬに違いないのです……。できるならば、代わりに書いてあげたい、けれど。」

「こればかりはできません。」

世界でたつた一人、白ちゃんにしか書けない手紙ですから。

「こひ、国語の授業もつと眞面目に受けおけばよかつたよひ」「ぼくも、まともに受けたことないなあ……」

いや、国語の授業は関係ないと思いますよ……あんまり。

「ラブレターに必要なのは、国語力じゃないと思ひ」

一咲ちゃんの声です。きゅうに背後からぼわっとラブレターとか言われると、びっくりしますね。

「必要なのは、……」

「なぜ、そこで口ひもるのですか。」

「なのは?」

「…………愛」

うわ。

真顔で……じゃないですね。いきなり顔真っ赤になりましたよ。

「……なんでもない」

「ここで逃げますか。」

「さつちゃん、もしかしてあるの? 書いたこと」

「はは、涙末ちゃん。まさかそんな」

寒気を感じて振り向くと、一咲ちゃんが逆に不安になるほど顔真っ赤にしてこっちを睨んでいました。地雷。地雷踏みましたよわたしたち。

一咲ちゃんは手にした枕でばふばふ、涙末ちゃんとわたしを滅多打ち。わたし関係ないですしつつ。

「すごい! 誰に書いたの?」

地雷踏んだ足を上げずにいれば助かるかもしないのに、涙末ちゃんはお構いなしです。このまえ、一咲ちゃんが壊れたタオルケツト防衛戦以来、二人の間にあつた妙な遠慮はすっかり消えていまし

た。

「出したの？ 結果は！？」

「出してないっ！ 書いただけ！」

「やつぱり書いたんだ！」

「……」

「咲ちゃん、ちょっと涙田。

最終的に先生に止められるまで散々涙未ちゃんをおつかけ回した後、一咲ちゃんは保健室を出て行つてしましました。かわいそうに……。出際には白ちゃんをちらりと見た視線が、何やら色々と複雑そうでした。

「涙未ちゃん、ちょっとこじりすぎですよ。気持ちは分かりますが普段なかなか、こんな機会ないです。

「誰に書いたのか、気になるよね」

涙未ちゃんは、叩かれすぎて酷い有様です。髪の乱れは寝起きをゆつに超えるレベルだし、めがねはズレてしましました……。

「まあ、……………そうですね」

「一咲ちゃんに今度、どうこう風に書いたか教えてもらひつかなあ白ちゃん、それは……やめたほうがいいのかどうか。わたしこはいまいち、判断つかないです。白ちゃんならび、喜びそうではありますけども。

「わたし大して、相談くらいには乗れますよ」

白ちゃんには忘れず、自分アピールです。

「ぼくもぼくも」

「う、うん。あつがと……」

白ちゃんは、ぎゅっと拳を握り締めて、ガツツポーズめいたものを取りました。

「よし、がんばりつ」

白ちゃんがまた学校に来るよつになつて、保健室は以前の風景を取り戻したようでした。

いつもの挨拶だつてしちゃいます。

「こんなにちは、白ちゃん」

「あ、さくらちゃん。こんなにちは」

「調子はどうですか?」

「うん。いつも通りだよ」

そう言つて、田ちゃんは青田い顔で微笑みます。こほ、とちこさく咳をして、一本じつぽんとても細い髪の毛が、肩の上で揺れました。

「こんなにちは。呉内さん」

「先輩も、こんなにちはです」

先輩も前のよつに、白ちゃんに会いに来ててくれています。

変わつたことと聞えれば、白ちゃんの先輩を見る田でしょつか。

夢みる乙女ちっくなのは相変わらずですが、今はまるで、獲物を狙う猛禽のようです。明らかに恋文を意識した、するどい眼光。先輩のいいところを、とこつより白ちゃん自身が好きなどいろを、もう一度心に刻み直そうとしてるんでしょう。

目付きは真剣だけれど、怖いとか険しいとかいう雰囲気はぜんぜんないです。

むしろ、かわいい。

まるで「さきとかね」とかの小動物が、一生懸命になつて狩りをしているかのよつな……本人的には真面目なんだらうけど、見てるこつちは和む様子です。

恋文の進み具合とか、聞きたいんですけど。流石に先輩がいたら、むりですね。

ちなみに、今日は涙末ちゃんはいません。昼休みに来たと思つたら、わたしの顔を見るなり「今日は大規模アップの日だつた!」とか叫んで脱兎の如く出て行きました。意味が分かりません。なんでおわたしの顔を見て。そんなどから寝すぎなんですよあのひとは。

涙未ちゃんが帰った理由はひとつでもよくて、今だいじなのは、わたしの話し相手がないところ」とです。

「咲ちゃんは、いつものように……というか、恋文の話が出てからひつち仏頂面がブーストされていて話しかけづらいですし、先生は何だから忙しそうです。

仕方ないので、隣のベッドに意識を集中するわたしです。

白ちゃんと先輩は、何だか甘いものの話で盛り上がりしている様子。うちの高校周辺はなぜだかやたらと甘いお菓子のお店が多く、女子の間では常套の話題となっています。

「やっぱり黒蜜きなこパフェが人気なんですね」

「うん。でも若干、とりあえず黒蜜きなこにしておけばオッケーみたいなどころがあるかもしね、あそこって」

「あ、確かにそうかもです。本日のオススメが、黒蜜きなこパフェ、プラス黒蜜きなこリテになつてたときはちゅうと笑っちゃいました」「これははどうやら、創作菓子「まじゅーる」の話みたいですね。あそこは黒蜜きなこが必殺技なんですよね。創作菓子と言つだけあってしおつかず新作を出してはいるけれど、割りと前衛的なのが多いところが特徴、らしいです。好き嫌いが別れるタイプですね。さつまいも納豆パフェとか、どうなんでしょう。

「意外とあの納豆の食感が、ぎゅうひのもつちり感と合つただよ」

「へえ……」

「ここに愛好家がいました。

とゆうか、ぎゅうひなんか入つてたんですねかアレは……。アートです。

前衛アート系メニューはともかく、黒蜜きなこ系はふつうにおいしいのでたくさん食べたいんですけど、残念ながらわたしはほとんど味わったことがありません。ゆえに今の白ちゃんと先輩の話には、ちょっと生殺し感があつて苦しいです。

はあ。

だいたい先輩、男性なのに甘党ですか。しかもお店巡るほとりで、

一緒にに入る相手とか必要なんぢゃないですか。それとも一人で食べ歩いてるんでしょうか。謎です。

あと白ちゃんもあんまり食べに行けないだろつから、おなか減るだけじゃないんでしょうが、この話題は。でも白ちゃんは心底楽しそうで……。だから、まあ、いいんでしょか。

わたしは何となく、一咲ちゃんにアイコンタクトを送ります。  
(いいんですか。このままで)

一咲ちゃんは初め眉をひそめていましたが、わたしの必死の想いが通じたのか、ゆっくつとこちらに歩み寄ってきました。

側まで到達すると、一言。

「あとで葉桜も一緒に行こひ。おじやーる」

「え。あ、はい」

一咲ちゃんは言い終えると、元の位置に戻つて行きました。軽くおなかをさすりながら。そういうえば一咲ちゃんも、割と甘党でしたね。

一咲ちゃんはそのまま、窓の外の夕暮れを眺めます。ちよつと田代が、遠い感じがしました。

+ + +

「か、書けないよ」

恋文を書こう…と言つてから四日が経つた頃、白ちゃんは弱音といつしょに保健室に現れました。

「だ、だめですか……？ といろで、それは？」

白ちゃんは胸に、B5サイズの封筒を抱えていました。

「うん。下書きなんだけど」ドサッ。

やたら重厚な音を響かせて机上に置かれた封筒からは、ルーズリーフの束がはみ出ています。

見た感じ……五十枚くらいありそうですけど……。

「それ、全部ですか……？」

「うん。そうだよ」

書けてるじゃないですか。

というか、書きすぎです。

「うまく書けなくつて……」

「そ、それなら分かりますけど」

文字通り、想いが溢れちゃってます。すいこなあ。

「ねえ、お願ひがあるんだけど」

「何ですか？」

「これ、見て欲しいんだ……」

「えつ」

恋文を？

白ちゃんの？

「い、いいんですか？」

確かに興味はあります。ありますからあるんですけど、いいんでしようか。

「うん。どうしてもうまく書ける気がしないし、それに、みんなならいいかなって」

「そういうことなら、ぼくらに任せで！」

「うおわー！」涙未ちゃんがきゅうに後ろから声かけるから、思わず女のこちらじゃない悲鳴を上げてしまつたわたしです。

「ついせつかもまで、寝てたのに。わたしのベッドで」

「ぼくのね」涙未すけめ。いつかベッドの眞の所有者を巡つて決闘しなければ。

「イベントの香りには敏感なのさ。ぼくは」

「遊びじゃないんですよ？」

「分かつてるよ。ひやんと見るから」「いやいやせしながら言つても説

得力ないです。

「いいは、一咲ちゃんに向とか言つても『りわね』

「一咲ちゃん、何とか言つ」

……言えそうもないですね。彼女の視線はルーズリーフに釘付けです。ガン見です。可愛を余つて憎き百倍みたいな、いえ、この場合はむしろ逆……？

「しっかり見させてもらひつよ。由たんの、愛情をね  
愛情の部分だけ当然のように強調する涙未ちゃんを、由ちゃんは  
真っ赤になつてぽかぽか叩きます。まったく、遊びじゃないって言  
つてるのに。」  
さて、不真面目な涙未すけは放つて置いて、じつへり見させてもらこましょつ。

とつせんじるなお手紙を出して、驚かれるかもしれません。  
でも、どうでもお伝えしたいことがあって、書きました。

書を出しまふつつですね。

思い起じせば、四月十九日のお休み。私は気分を悪くして  
しまい、廊下に蹲つてこむと……

その次には、先輩との出会いのくだりが来ています。日付がきつ  
ちり書いてあるところが、印象の強さを物語っています。  
そこからは、そのときの先輩の格好良さ、そしてどれだけそれに  
感動したか、といったことが延々十枚以上に渡つて書き綴られてい  
ました。

私をおぶつて保健室まで運んでくれた先輩の背中はとても広  
く、暖かく、私はまるでふわふわとした羽毛にくるまれて運ばれて  
いるような、夢のような気持ちでした。せかいがまるで、天国のよ  
うな。

超ボーミー。さすがです。しかもこの辺りは、とくに入念に消し

「ゴムで修正した跡があります。その前のふつうに書いてるところは  
ぜんぜんそんなの、なかつたのに……。こだわつてます……。

その辺りから段々テンションが上がってきたのか、ポエミイと言  
うにも生ぬるい、少女趣味のメルヘンセンテンスが連なり始めます。  
といつか、すうい。夕足王子と白むちやん姫の一大ラブロマンス。そ  
のまんま少女漫画にしてもよさそうです。

ゆりの花畠に囮まれて、私の口もとに先輩の甘い蜜が触れよ  
うとしたときの私の気持ちといえば、大せいの動物たちが一斉にあ  
ばれ出したみたいで、

もはや何のことだかさっぱり分かりません。しかもちよつと、え  
ろちつくです……。

真夜中に書いていて、見直さなかつたに違ひありません。やつぱ  
りそのままお話にするのはむりかも。

「白、ここはもっと情熱的に」

一咲ちゃんの口から、彼女がいちばん言いそうもない言葉が出た  
のに驚いて振り返ると、一人で一枚のルーズリーフを見詰めながら  
うんうん頷いていました。

どんな感じかと思つて覗いてみれば、

先輩のことを考へると、ときどき死んでしまって胸が熱  
くなります。

いや、死ぬしかないですし。これ以上情熱的にするならば。  
ルーズリーフから顔を上げると、一人と目が合いました。

「……まじですか?」主に一咲ちゃんに問いかけますが、  
「何が?」どうやら彼女は大まじです。

「……」

「の句が継げないわたし。

すると、

「わ、白たん大胆！」

今度は、向うで最後半部分を読んでいた涙未ちゃんが奇声をあげました。

「ねえみて、ここすうじー。」

「何ですかいつたい、落ち着いて　」

甘いもの好きな先輩を食べてしまいたいくらいです。

「……」

「ね、すうじいでしょ？」

わたしは軽くこめかみを押さえました。たしかに……すうじいです。けどもね？

「……白ちゃん」

「は、はい」

「……」削除

「えーっ！」

むしろそんなにびっくりされたことにびっくりです。

涙未ちゃんからルーズリーフを引ったくつて見てみれば、最後のほうはまさにカオスの楽園です。日本語の新境地、文学への挑戦、「迷文以外の存在が許されていません。恋文を遙かに超えて、幻想文愕へと飛翔しています。

「これじゃ、ちょっと……。あたかも青空妖精が星の海で水浴びするときに飛び散るきらきら銀貨のように曖昧もことしていて……何といつか、せかいがあやふや……」

……感染りました。

「……ともかく。さすがに五十枚は多すぎます……先輩も、疲れちゃいますよ」

「や、そうだよね」

「せめて一枚くらいにまとめましょう。ええと、とつあえず最初は

いいとして 「

ひたすら茶化す涙未ちゃん、不思議な情熱理論で文章量を増やそうとする一咲ちゃんとやりあいながら、わたしはすこしづつ恋文を直していました。

「……今日はこのへんでしょうか」

何度か全部直していく下さいと言いかかけましたが、かねて感じどまり、分量を当初の十分の一くらいに圧縮することに成功しました。疲れた。もうすっかりお外は真っ暗です。

「……短い」だまらっしゃい。

「面白文章が消えちゃった」自分で書きなさい。

「あ、ありがとうございます……これで何とかなるかも」

白ちゃんが今日の成果、数枚の真っ黒なルーズリーフを握り締めて言いました。

確かに何とかなりそうな感じです。けれど。

何か、足りないような気がするんですね……。

「さくらちゃん?」

恋文に必要なもの。相手を恋い慕う心。

先輩のことが、好きですという気持ち。

現在バージョンの恋文には、それは溢れんばかりに書き込まれています。そこはもう、十分すぎるくらいに十分と言えるでしょう。でも、それだけで、果たしていいんでしょうか。もっと書くべき何かを、わたしたちは忘れているんじゃないでしょうか。

「どうしたの?」「

わたしは、選別の結果切り捨てられたルーズリーフの束、元恋文候補たちの墓場を暴きました。

きゅうに真顔で没恋文を漁り始めたわたしを、みんな怪訝な表情で見ています。

やがてわたしは、そのうちの一枚に書かれた文章に目を留めました。

皆がふつりできるようなことも、私にはできないことがあります

「……これです」

悟りました。

今の恋文に、足りなかつたもの。

わたしはみんなに向けて、ニヤリと笑つてやりました。

足りないものが分かつたからといって、即完成というわけでもなく。ゆえに今のわたしの頭の中は、田中さんの恋文でいっぱいなわけです。

だからなのか。

「……あれ」

次の日の放課後、わたしは気付くとひとけのないところまで歩いてしまいました。

「むう」

ちよつと、考えごとに集中しそぎたようです。

今日はこんなことばかりです。朝は教室を通り過ぎましたし、昼休みはトイレで延々過ごしました。とうぜん授業なんかさっぱり覚えてません。むしろ、わたしならこう書きますみたいな仮想恋文を一生懸命したためていました。我ながら笑っちゃいます。誰かに見られたらどうしよう。

とゆうか、いい、どうしよう。そう思って、わたしは周りを見回しました。

どうやら、学校の敷地の隅のほう、以前わたしたちがねこのシロと遊んだ場所のようです。

すいぶんへんなところまで、歩いてきました……。すぐ保健室に行かねば。

と、わたしは踵を返しかけたのですが、奥からふと人の声が聞こえた気がして、わたしは建物の影から顔を出しました。

月島さんと夕足先輩がいました。

びつたーんと音がする勢いで、わたしは顔を引っ込め背中を壁に張りつけます。びっくりしました。無駄に心臓がどきどきします。いや、べつに隠れる必要はないんですけど。どうもこの間の体育のとき以来、月島さんは顔を合わせづらいです。何か言われそう

で。

しかも、今は先輩と一緒にですし……。白ちやんをあんな田に呑ませたひとつ、まだ一緒にいるとは。煮え切らないひとです。

当然の流れとして、わたしは影から様子を伺います。

なんだか前にもこんなシチュエーションがありましたね。涙末ちゃんが、先輩が女子と一人つきりで話してゐるという情報を持つてきましたとき。校舎の屋上で。あのときは涙末ちゃんと一人で覗いてましたが、いまは一人。妙な心細さを感じます。

月島さんと先輩は、どうやらねこのシロと遊んでいるようです。なんと、わたしたちと同じことをしているとは。悔しい気分。

先輩め。いつか問い合わせてやろうとわたしは心に誓いました。さて、わたしがいる位置からはすこし遠いですが、月島さんがどんな表情がしているのかは、よく分かります。

向うは自分たちのことにしていて、つまり、いわゆる一人の世界といつやつで、わたしには全然気付きそうもありません。

そのことに助けられて、わたしはずいぶん長いこと、彼女たちのことを見ていました。

といつのも、月島さんの様子が、ずいぶん楽しそうだったからです。

いえ、楽しそうなのは当たり前かもしません。月島さんも夕足先輩のことがすき。先輩と一人きり、人気のないところで遊んでる。楽しくないといつたらうそな状況です。

そう、すこし遠くて表情がよく見えなくともわかるくらいに、彼女は楽しそうで、幸せなオーラを出しているのです。

似たオーラを、わたしは知っていました。

このところ毎日のように、最近はすこし間が空きましたが、保健室でそんなオーラを出していた女のことをわたしは知っています。

白ちやん。

いま、月島さんが周囲に振りまいている空氣は、白ちやんと同じでした。

桜色で花の香りがするようなしあわせ気分。いわゆる「恋する」女」の気配。

だから、わたしは、田が離せなかつたのです。

恋敵とは、どういうことか。

それを、わたしは今、ようやく理解した気がしました。月島さんも白ちゃんと同じで、先輩のことが、好きなのです。

あのとき体育館の外で白ちゃんを責めたひとつ、今先輩の前で幸せそうにしている女のこは、同じ人物なのです。

わたしたちが必死になつてゐるよつて、月島さんもまた、必死だつたのかも……しません。

しばらくすると、急に月島さんの様子が変わりました。幸せそうな感じが薄れて、別のものに。

怒つてそうな？ それとも、困つてそうな？

どうしたんだろう、と耳をそばだててみると、彼女はひとり大きな声を出しました。

「だつて、あれは、衣花が！」

白ちゃんの話。

それで分かりました。

前に月島さんが白ちゃんに言つたことについて、先輩は注意してくれているのでしよう。

夕足先輩、煮え切らなればっかりじやなくて、やることなはやつてくれますね。すこしだけ見直しましたよ。

月島さんは、顔を赤くして反論してゐる様子。彼女にとつてもよほど譲れないことなのか、ずいぶん剣幕です。

でも、やがて、その勢いは萎んでいきました。

先輩が根気よく諭してくれたおかげなのか、彼女はだんだんと言葉少なになり、今はついに黙ってしまいました。

その様子、表情は。

ぐつと両の口づしを握り締めて、唇を強くかみ、くやしそうな視線は地面に落ちて動きません。もしかしたら、震えてゐるのかもし

れません。眉根に深くしわをよせ、じつと、先輩の前に立ちはだけています。

その頬が、何かすこし違うかんじに赤くなつていき、だんだんと、田元が……。

それを最後まで見届けない内に、わたしはその場を、そつと後にしてしまった。

何だか複雑な気分でした。もしかしたら、見ないほうがよかつたかもしません。

+ + +

「でつ、できたよー」

「やりましたねー」

「白たん、おつかれさまー！」

「……短い」

保健室に、歓声がこだましました。

約一名未だに不満そうなひともいますが、今、よひやく、白ひやんの恋文が完成したのです。十回を越える改稿をぐぐり抜けてきた、歴戦の一筆です。

「あ、ありがとうございます、みんな、本当に」

いつそ泣きそぐらいで、白い頬を桃色に染めて、白ひやんは完成した想いの結晶を抱きしめます。

「いえいえ。といつも、まだお礼を言つのは早いですよ。先輩に手渡して、無事付き合つことが確定したときが眞の勝利！」

「つづ、付き合つ」

田をまんまるにして湯気をふき出す白ひやんです。

「ね、それ、けつきょくどうなつたの？」

涙末ちゃんがそんなことを言いました。彼女は途中から直しに参加しなくなつたので、最終形を知らないのです。

「興味あるなあ。見せて！」

でつ、デリカシーのないひとです。いへり最初、白ひやんのほうから直してと頼んだとはいえ、

「う、うん。いいよ」

いいんですか。おおらかですね。

「ありがとう！」

涙未ちゃんは嬉しそうに便箋を受け取ると、

「どんな面白文が書いてあるのかなあ」

などと失礼なことを呟きながら、恋文を読み始めました。

## 夕足先輩へ

とつぜんこんなお手紙を出して、驚かれるかもしれません。でも、どうしてもお伝えしたいことがあって、書きました。

初めて先輩と出会ったのは、私が具合を悪くして、廊下で動けなくなってしまったときのことでしたね。

あのときは、助けてくれて、本当にありがとうございました。うれしかったです。私、あんな風に助けられたこと、初めてでしたから。

それからも先輩は、ろくにお礼も言わなかつた私に、会うたびきちんと挨拶してくれたり、声をかけてくれました。名前も覚えてもらえて、申し訳ない気持ちになつてしまつたくらいです。

毎日、先輩のことを考えています。

今何してるんだろうとか、

休みの日は何してるんだろうとか、どんな女の子が好みなのかなどか。

先輩のことを考えると、夢の中にいるみたいに体がふわふわして、ぽんやり温かい気持ちが広がります。

私は、先輩のことが好きです。

「ふえー……」

そこまで読んだ涙未ちゃんは、微妙に顔を赤くして、へんなため息をつきました。

まあ、そうですよね。恥ずかしくもなりますよね。わたしだってそうですし。

まだ微妙にポエミィな部分が残っていますが、むしろ由ちやんの独自力ラーとして有効に機能している、といいんですねが……。

「まさに、ラブレターだね」

「というか、涙未ちゃん。もひ一枚あるので、読むならせつむも」

「あ、うん」

そして涙未ちゃんは一枚田を読み始めました。

先輩も知っていることだと思いますが、私は体が弱いです。先輩のことを考えるとき、どうしてもそのことを思い出してします。

最近、先輩は、よく保健室に来てくれていました。

だけど、本当は迷惑なんじゃないかなって思うことがあります。本当は、私のほうから会いにいきたいです。でも、それはできません。

ん。

こんな私に好きだと言われても、先輩は困るかもしません。でも、私にだって、ひとに負けないことがあります。

それは、楽しいことを、楽しいこととして受け止めることです。体が弱い私だから、みんながふつうにやつていける楽しいことを、私はあまり経験できませんでした。

だから、みんなにとつて平凡で、何でもないことでも、わたしに

は幸せだと感じられたりします。

みんなが知らないちいさな幸せを、私はたくさん知っている、つもりです。

私は夕足先輩と一緒に、そんな幸せを感じたいです。だから、いろんな私でもよかつたら、付き合ってください。

## 衣花 白

これが、白ちゃんの恋文です。

一枚目は最後を除いてあんまり恋文っぽくないかもしません。でも、必要な一枚だと思います。やつぱり一枚目だけでは、片手落ちというものですしょ。

これが、初めの恋文に足りなかつたもの。

一枚目には、白ちゃん血痕の、けして田を逸らしてはいけない大切なことが書いてあるのです。せりと、そのことを逆手に取つていふところをアピール。かんべきです。

「……」

涙未ちゃんは、言葉もなく便箋を見つめています。読み返してい るようです。とくに一枚目を。

その田は、ずいぶん真剣になつっていました。

「……うん。いいね、これ」

やがて田を離すと、一言だけ、感想を述べました。白ちゃんは安堵のため息をもらします。

「咲ちゃんは便箋を一瞥し、

「……短い」まだ言いますか。

「いいじゃないですか。長すぎるも内容ですよ」

「それは、そうだけど」

「これじゃダメですか？」一咲ちゃん的には

「そんなこと、ないけど」

すこしするい言い方かもしだせんけどね。だめなんて、口が裂けても言えないでしようし。でも、そつじやなくとも、だめ出しあしないはずです。

「よしひ」

みんなが見終わつたのを確認した由ちやんは、便箋の封入を始めました。

薄い桃色地に、ちいさな花がたくさん散つたかわいらしげの便箋。その上に整然と並んで先輩の目に触れるのを待つのは、由ちやんが想いを込めてひとつずつ綴つた、手書きの文字たちです。

いま、一枚の便箋が、対となる封筒に収められています。

それが終わると、花を象つたシールで、由ちやんはそつと封をしました。

すると出来上がるのは、正真正銘由ちやん謹製、伝統的な乙女結晶。

すなわち恋文です。

「あとは、渡すだけですね」

由ちやんは不安と緊張と期待と決意と……、とにかく色々なもののが混じり合つた表情で、大切な封筒を抱きしめて、額きました。はつきりと、力強く。

+ + +

次の日のこと。

「う、う、う、う……」

わたしの家の前には真っ白に塗られた木の扉。

「ううう」

その場に満ちるのはすこしきつめの、シリカスの香り。

「うーーー！」

足元には清潔感のあるタイルが敷き詰められています。

「……はあ」

おなかいたいです。

ゆうべの食事が原因です。白ちゃんの恋文完成記念で、調子に乗つてお肉を食べ過ぎました。ちょっとくらい大丈夫だらうと思つたんですけど、やっぱりだめ。この体質が恨めしい。

今日は白ちゃんが先輩に恋文を渡す、大切な日。なので無理して来ましたが、けっきょく朝からトイレに引きこもりつ放し。もうお昼休みです。保健室登校ならぬトイレ登校。何者ですか。

この学校のトイレはとても素敵なので、助かっています……。掃除のおばちゃんが潔癖らしく、常に極めて清潔なのです。流石に我が家の城には及ばないものの、十分に及第点と言えるでしょう。まあ、その辺りも含めて学校選びしたんですけども。

進学するときも絶対トイレはきれいなところにしよう、とわたし  
が決意を新たにしていると、数人の女子が話し声が聞こえてきました。

## 第十六話

「あーつもーサイアック、来週もテストってビリーハー」と。  
「ホントだよねー、まとめてやれっての。まあべつにビリーハー何もし  
ないからどうでもいいけど」

「はは、ま、そだね。テキトーにね、テキトー」

扉を開ける様子がないので、ビリーハーお化粧直しか何かしに来た  
ようです。

彼女たちはお喋りしながら、がんばりやつてます。

すると、

「ん、沙耶子、何それ？」

うわあ、月島さんがいるようです。何だかちょっと微妙な気分に  
なるわたしです。

「何が？」

「これだよ」

その場の空気が、月島さんの持つているらしさに何かに興味を示した  
ようです。

「手紙？ つてうわつ！ ラブレターみてーー！」  
なるほど、ラブレター。

……え？

「えつマジ？ 沙耶子、ラブレター！？」

「ちつ違つて！ あたしじゃなーってー！」

月島さん。ラブレター。

何か、嫌な予感が。

彼女も夕足先輩に、恋文を書いて渡そうとしてるんでしょうか。  
でも、今日？ 白ちゃんが渡そうとしてる日の日付？

そんな偶然、あるんでしようか。

「ま、そりや そうだよね。やらないよなあ 普通

「すつごいねこれ。乙女チックってゆうか……存在 자체が恥ずかし

くない?」

いえてるー、と盛り上がる女子たち。何だかいたまれない気分になつてきます。

「つてかこれ、何? どしたの?」

「とりあえず中身見よつぜー」

誰かがそんなことを言いました。

背筋を、寒気が駆け下りました。

まだ、田ちゃんのだと決まったわけじゃあつません。でも。

「よし、見よう見よう」

その場に誰も、それを止めようとするひとはいませんでした。

「えー、いいのおー、そんなことしけやつて?」

そう言つひともいましたが、声が笑つています。本氣では、ありませんでした。

ぴりぴりとシールが剥がされ、かさりと封筒が開かれ、紙が擦れる音が、やけにほつきりと聞こえできます。

「『タ足先輩へ』」

ああ。

「『とつぜんこんなお手紙をだして……』

読み上げられる、手紙の文面。内容は、よく知っているものでした。

間違いなく、それは、田ちゃんの書いた恋文でした。

朗読は、残酷に、続きます。終わるまで、わたしは固まつて動けませんでした。

どうして?

田ちゃんの恋文が、こんなところに?

いや、それよりも、田ちゃんは今頃恋文がなくなつて困つているのでは?

告白は?

「すっすっげー」

「ラブレターだ。マジラブレターだ」

「どうする？ どうするよこれ？」

「ほら、そんな騒ぎが続き、」

誰かの放った言葉が、わたしの心臓を一瞬、止めました。

「せりしちやうのとかど？」「

わらす？ 白ちやんの、恋文を？

何を言っているのか分かりません。いえ、分かりますが、分かり

たくありません。

この世でたつたひとり、先輩にだけ向けられてくる白ちやんの大  
切な気持ちを、みんなの前に曝け出す？ たつた今ここで読み上げ  
られただけでも最低のことなのに。

「うわっ、鬼！」

「それはビデイ！」

「ね、どうよ？ 沙耶子」

誰かの声が、円島さんに向いかけてます

「え？ あ、ああ、そうね」

そのとき、わたしの脳裏に、先輩の前で俯く円島さんの様子が浮  
かんできました。もしかして、円島さんなら止めてくれるんじゃない  
いか。こんなばかなこと、やめさせてくれるんじゃないかな。先輩に  
たしなめられて、改心した円島さんならば。

「じゃあちょっと、あたしにせりじしてよ」

は？

「ま、このひと、なんて言いました？

「うわー沙耶子つマジ？」「

「ほら恥ずかしいのせりしちやうなんて、ヒトテナシだ！」「

……ですか。

もうこうことですか。全然、反省なんかしてませんでしたか。た  
だの勘違い、わたしの早とちり。期待したわたしが、ばかでした。  
そうですよね、あれだけ、白ちやんにひどいこと言っておいて。反  
省するなんてありえないですよね。

……つきしますよ。

あなたと、いつもとは ！

( うつ一 )

勢いのままに席を立とつとしたわたしは、おなかを襲う激痛に着座を余儀なくされます。半端じゃない痛みでした。こんなときには一大事だというのに。意思とは関係なしに、顔が白くなるのが分かります。へんな汗が出てきて、きもち悪いです。ああもう、昨日お肉なんかむせるんじゃなかつた！

「じゃつ、じゃあ、これ預かつとくからや。もつに行いつよ」

円島さんがわざわざ、女子たちはトイレから出で行きました。まづい。

早く、追いかけないと。

白ちゃんの恋文、取り返さないと……。

だけど、まだおなかの痛みがおさまりません。「うつ、うつ」と静まりなさいつわたしの胃腸。いいこだから！

信じられません。円島さんめ。つきしまさんめ！ そんなに、そんなに嫌がらせしたいですか。そじまで白ちゃんが嫌いですか。邪魔したいですか。

ゆ、ゆるさないです。

絶対つかまえて、恋文返させた上に今までのこと洗いざらい謝つてもらわないと、もう、腹の虫が治まりません。ぜつたいて。ぜつたいです！

わたしはよつやべトイレから脱出しつて、左右に伸びる廊下を見渡しました。

円島さんの姿は、見えません。

当たり前です。もう一十分は経つてますから。わたしの胃腸は心底、だめなやつです。

とかく、実はいまだにおなかいたいです……。

( うつ一 )

こつまでもトイレにこもつてゐるわけにも行かないの、無理矢理中斷して出できました。

そんなことは、でも、どうでもよべ。早く円島さんを、探さねば。

「うわ、もみじ。顔色悪いよ」

ああ、そんなわたしに声をかけてくれるのは誰？と思つたら涙末ちゃんでした。

「涙末ちゃ……」

「だ、だいじょうぶ？ 保健室まで連れてこいつか？」

「いえ、それより。一大事、です」

「えつ、なに？」

わたしは痛むお腹を必死になだめつつ、かいづまんで事情を説明しました。

最初はいつものお気楽表情だった涙末ちゃんも、説明が終わる頃には、ときどき見せる真面目顔に変わっていました。

「……やばいじゃないか」

「やばいです。早く、月島さんたちを」

「う、うん。いま、昼休みだし……教室にいるかな？」

「そうですね……わたしは、ちょっと、動けそうにないので、お願ひです……」

「う、うん。あつそりだ、白さんに教えとかないと」

いつしゅん領きかけたわたしでしたが、

「待つてください。もし手紙なくなつたことに気が付いてなかつたら、無駄な心配をかけることになります……先に一咲ちゃんにかけましょ」

歩き回つて体調崩されたりしたら、コトです。気付く前に取り返して、問題じたいを消滅させてしまつのが一番です。

「わかった」

「田中ちゃんにはとつあえず何も云えないでおいて、保健室に避難してもらひことに」

頷き、涙末ちゃんは携帯を取り出して、電話をかけます。  
わたしがかけてもいいんですが、おなか痛すぎて正直携帯いじる  
のさえ億劫です。

「咲ちゃんは無事捕まつた様子。

「咲ちゃん来てくれるつて。白たんも一緒にいたみたい。ちゅう  
ど保健室にいたから、薬も持つてきてくれるつて」

「それは、ありがとうございます……」

飲んすぐ効くものでもないんですけど、ないよりあつたほうが遙  
かにマシです。

「あと、咲ちゃんも月島サンのこと見てないって」

「そうですか……」

「じゃ、じゃあ、ぼく行くよ。まずは三組に行つてみる」

「分かりました。お願ひします……」

そう言つて涙末ちゃんは、心配そうな顔をわたしに向けつつも、  
三組　丹島さんのクラスへと駆けて行きました。

わたしはわたしで、ようようと廊下を歩き始めます。とにかく動  
いてないと気が済まない状況です。……つい、本当は涙末ちゃんと一  
緒に三組に行きたいのですが、あそこはトイレからやたらと遠い位  
置にあります。今のわたしには、この校舎のおかしな構造を全力  
で呪う」としかできません。

「葉桜」

おばあさん以下の鈍足行軍を敢行するわたしの背後から、一咲ち  
ゃんが来てくれました。

「これ、そう言つて差し出してくれたのは、胃腸のお薬と、スポー  
ツドリンク。

一気にそれを飲み干して、わたしは一息つきます。

「大丈夫?」

「はい、すこし落着きました。ありがとうございます」

まだしくしく痛みますけど、だいぶマシになりました。たぶん正  
確には「なつた気がした」だけなんでしょうけど、薬飲むとその瞬

間から体が楽になります。これもプラセボ効果の一種なんでしょうね。

「白、いま保健室にいるよ。とりあえず保健室から出ないよ」と言つておいた。手紙なくなつたこと、まだ気付いてない

「ナイスです。じゃあ、わたしたちも探ししましょう。……涙未ちゃんから連絡がないってことは、たぶん三組にもいないんでしょうが

……」

その瞬間、一咲ちゃんの携帯に着信。

「やつぱり、三組にはいないって涙未ちゃんの報告だったようですね。

「葉桜は、保健室行つたほうが

一咲ちゃんはそんなことを言いますが、

「……いえ。この状況でそんなこと、言つてられません。手分けして

「でも」

聞き分けのない一咲ちゃんを、わたしはキッと睨みつけました。

「わたしの体のことなら、今無理して体壊しても、薬飲むなり、最悪病院行けば治ります。でも白ちゃんの恋は、ここで終わってしまつたら、元には戻せないです」

それでも一咲ちゃんは動きません。

「わたしの体と、白ちゃんの恋と、どっちが大切か。そんなの決まつてるじゃないですか」

一咲ちゃんの瞳が、一瞬 とても哀しそうに、ゆがみました。

「……」めん、葉桜。私行く

「はい。凶行、断固阻止です」

一咲ちゃんは振り返り、駆けて行きました。

その背を見送りながら、わたしは思います。動けないので、考えるしかないのです。

月島さんは、どこに行つたんでしょ？

教室にはいない。

でも、円島さんの目的は手紙を晒すこと、です。だつたらひどがたくさんいるところ、すなわち教室に行くのが筋ではないんでしょうか？

いえ、待つてください。今は昼休み、となれば、人がたくさん集まってるところは他にもあります。学食とか。校庭には、あんまりいないかもしませんが……。

ともかく、昼休みの間は、割と皆さん散らばっています。授業が近付くと戻ってきますが……。とすれば、その頃までは彼女も何もしないかもしません。

いや、時間的余裕があるのはいいですが、けっきょく月島さんを見つけられなかつたら無意味です。じゃあどうしているのか、というと、正直見当がつきません。

うつ、ループです。けっきょく、しらみ潰しに校舎内を探し回るしかないのかも。

連絡がないということは、涙未央ちゃんも一咲ちゃんも、まだ発見できていないんだと思います。焦ります。どうしよう。

と思つた瞬間、

わたしの携帯に着信がありました。

どきつとして、慌てて携帯を開きます。

かけてきたひとの名前を見て、わたしは更にびっくりしました。

液晶に表示された、そのひとの名は  
衣花、白いちやん。

## 第十七話

わたしは、ようやくの思いで保健室の前に辿り着きました。

なんと、保健室に円島さんが来たというのです。

それが田ちゃんからの電話の内容でした。とにかく早く来て、といふ声だけ残して電話は切れました。

田ちゃんの声、ちょっと震えてた気がします。

それはそうでしょう、相手は円島さん。体弱かつたら幸せになれないと、酷いことを散々言われた相手なんですから。トライウマにだつてなるつとこつものです。

緊張した面持ちで、わたしは扉を睨みます。この向うに、円島さんがいる。言い合いになるかもしれないし、場合によつてはもっと酷いことになるかもです。何を思つて保健室にやつてきたのか、知りませんが、

わたしには、心強い味方がいます。

それも一人。

「二人とも、準備はいいですか。心の」

「うん

「いいよ」

田ちゃんの連絡の後、心配してわたしのところに来ててくれた涙未ちゃんの一咲ちゃんです。どっちかだけでも先に行ってくれれば、とも思いましたが、でもわたし一人では心細かったのも事実。今はこの味方の存在に、素直に感謝すべきでしょう。

「……先輩にも、メール入れておきましたから」

わたしは移動中に、夕足先輩に短く状況を伝えておきました。あんまり頼りきりにはなりたくないのですが、状況が状況です。もしものときは、あのひとが対円島さん最終兵器になつてくれるはずです。

でも、わざわざ待つてる余裕はありません。

「……では、いざ」

低く呟き、二人も頷き、わたしは保健室の扉を、おおきく開け放ちました。

「……見つけました」

ひとつを除いて、いつもの保健室。白い床と天井。薬棚。書類の散らかった先生の机。ベッドのカーテンは開け放されていて、そこには白ちゃんが座っています。

そして部屋の隅には、白いイメージの保健室からは浮いた存在、「……月島さん」

微妙な茶髪に褐色肌の、月島沙耶子さんが立っていました。じつと見つめると、わたしたちの剣幕に気圧されたのか、月島さんは頭を逸らして俯きました。

まず口火を切ったのは涙未ちゃんです。

「月島サンさ、白たんの手紙、持つてるんでしょ？ 返しなよ。っていうか、嫌がらせにも程があると思うよ？」

「……え」

月島さんは顔をすこし上げて、ちいさな声を出しました。

「白に、何するつもり？」

次に一咲ちゃんが、聞いたこともないくらい低い声で糾弾します。「あれだけ酷いことを言つておいて。まだ気が済まないの？ これ以上、白に何かしたら、許さないから」

「……う」

月島さんは、一咲ちゃんの迫力に押されてか、一步あとずさりました。

「白ちゃんの手紙、返してください」

続いてわたしは、前に出て、手を差し出しました。

「だいじな手紙なんです。あれば、白ちゃんにとつてどれだけ大切なものが……。あれば、あなたの軽々しい気持ちで、他のひとたち

の田に触れていいものじゃないんです。

あなたは知らないでしょ。ううけど、田中ちゃんは、ずっと大変な田に会つて……。最近よひやく、先輩といつひとを見つけて幸せになれやうだつたんです。なのに、あなたのせいでも

後ずさぬ田島さんを追つよつて、わたしが一步、また一步、詰め寄ります。

「田中さんの気持ちも分からぬくせに！ あなたに、田中さんの幸せを壊す権利なんか、ないはずです！」

返してくださいー！ 田中さんの手紙、早く、返してください……

…」

田中さんのために。田中さんの幸せを願つて。

わたしは、力いっぱい手を伸ばして、田島さんに突きつけました。できる限りの意志を込めて、田島さんの両手を見据えます。

簡単には返してくれないかもしません。でも、手を伸ばして、キッと見つめれば、すこしだけでもこの気持ちが伝わるかも知れないと思つて。

わたしだつて、必死です。緊張します。じつはちょっと、泣きそうですね。

でも、ここは絶対、退けません。退いたら、田中さんが

「そうだ、返してよ」

涙未ちゃんも一咲ちゃんも、わたしに加勢してくれます。そのことに勇氣を得て、わたしはまた一步、田島さんに詰め寄りました。わたしたちが一步進むと、田島さんは一步後退します。何度も、それを繰り返していると。

「うー

田島さんの顔が、すこし赤くなりました。

「あ、あ、」

眉根に深く、皺が寄ります。

「あ、あ、あたしだつて」

へひびるが、わなわなと震え始めました。

そして。

「せつ、先輩のことが、すき、なんだよ……、う。うふえん

……、

「……」「……」「んえつ？」

……なつ。

泣いた!?

「ううう、あ、あたしだって、あたしだって……」  
わたしは、うろたえました。

だって、これは、反則です。反則ですよー??

月島さんは子どものようにその場に座り込んで、本氣モードで泣き始めました。心の汗がぽろぽろです。涙の粒とか見えてます。まじです。まじ泣きです。

「え、えつとね、みんな」

今まで黙っていた白ちゃんが、おずおずと顔をかけてきました。

「あの……、もひ、手紙、返してもらつたよ」

「えつ」

「手紙、落としちやつたみたいで。月島さんが拾ってくれて、ここに届けに来てくれたの」

え。

「だから、えつと。やくらひちゃんたち、なんで怒つてるの?..」

……。

わたしたち三人は、お互いに顔を見合わせました。  
なんで怒つてるの、って。

「……一咲ちゃん。白ちゃんに事情、説明してなかつたんですか」

「え、あ、うん。言つてないつて、もつ言つた」

「……言つなつて言つたの、もみじちゃん」

思わずそんな、意味のないやりとりだつてしまっています。  
理解不能ですみたいな顔の涙末ちゃん。

理解不能ですみたいな顔の涙末ちゃん。

白ちゃんは月島さんを何だか憐れみの目で見ていて、

円島さんは、子どもみたいにまじ泣きです。  
えつと……。これは、もしかして。

「あー、キミタチ」

傍観者だった浅川先生が、わたしたちに止めを刺そりと立ち上がりました。

やめてくださいもう分かりましたから、と言ひ聞もなく。  
「勘違い、ってやつね。……悪者だな、今回ばつかは」

うわー。

何だかいたたまれなくなつたわたしは、

( うつーー )

今更のよつにお腹痛かつたのを思い出しつ。

保健室備え付けのトイレに、逃げ込んでしまいました。

ようやくみんなが落ち着いた後で、わたしたちは色々と話しをしました。

「わたしはてつめい、本当そぞらす氣なんだとばかり」

円島さんは泣き腫らした目はそのままに、先生に淹れてもらつた珈琲を飲みながらぼつぼつと話します。来なれない場所だからか、居心地だいぶ悪そうです。わたしたちに囲まれてるからかもしれませんのが。

「ああでも言わないと、あいつら収まんないからね」

あいつら、といつのはトイレで一緒にお化粧直しをしていた彼女たちのことです。

「さらす気なんてなかつた。本当だよ」

赤い目でそんなこと言わると、責める氣が起きません。だから泣くのは反則なんですよ。

……いや、早とちつたわたしが一番悪いのかもしませんけど。

「みんな……わつきはちょっと怖かつたよ」

田ちゃんの言葉に、心を抉られるわたしたちです。

「うへ、すいませんです」「じめん」

わたしと涙未ちゃんは、一緒になつて田嶋さんに謝りました。

「咲ちゃんだけは、仏頂面で無言。まだ警戒してるんでしょうか。

「いや……元はといえど、あたしがへんなこと言つたのが悪かつたんだろ」「うん」

田島さんは、意外なくらい縮こまつた様子です。

「その、衣花。色々ひどいと言つて、じめん……」

田ちゃんの田が、驚きに軽く見開かれました。

わたしも驚きました。あれだけ物凄い勢いで田ちゃんのこと、責めてたのに。

「…………うん」

田ちゃんは、複雑な表情で頷きました。

「あの後で、先輩に怒られてさ……。あたしすいぶん酷い」と言つちやつたなつて、かなりへこんだよ。衣花もあたしとおんなじだって、自分で言つたのにね……」

「謝つてくれただけでも、十分だよ」

こつもの田ちゃんからすれば、だいぶ平板な声でした。怒つているみたいな。

「でも、もうあんなことは言わないで欲しいな。私だけじゃなくて、他の子にも」

わたしたちが田ちゃんを元気つけようとして、うそではあるけれども体調を崩そいつとしたとき。あのときも、田ちゃんは怒りましたね。

他人への共感が強い田ちゃんだからこそ、余計に許せないのかもしきません。

「うん……分かってる」

ちいさくなつて、泣きそうになつてる田島さん。

ふとわたしは、ねこのシロと遊んだときのことを思い出しました。いま目の前にいる田島さんは、校舎裏でわたしたちを見つけたときと、似た表情をしています。

哀しげで、すこし気弱そうなかお。

もしかして、じつちこそが、普段の彼女なのかもしません。体育館でのことは、必死になりすぎてしまったことが生んだ、ちよつとした過ちみたいなもの、だつたのかも。

月島さんも、我を失うくらい、先輩が好きなのですね。

「……前から思つてたんですけど」

だから、わたしは問います。

「何？」

「正直、月島さんと先輩つて、イメージ合わないんですけど……どこが好きなんですか？」

「なつ」

月島さんは仰け反つて、顔をぱつと赤らめました。恥ずかしいことをきくやつだな、と小さく呟きます。そりや、そうかもしれませんけどね。

「……イメージ合わないつてのは、自覚してるよ。けど、これ、実はちょっと作つてるから」

「作つてる？」

月島さんは、もう色々恥ずかしいとい見られてるからぶつちやけるけど、と前置きして続けます。

「付き合いのためには。ほんとはあたし、わつとおとなしいといつか……本とか物語とか、そういうの好きだし……つて何言わすの！」

いきなり逆ギレされました。おとなしいとか嘘です。

「中学のときとか、あたし白爛じやないけど友達いなくつても。だから高校になつたら茶髪にして、派手にすれば、友達できるかなあつて」

……、どこかで聞いたような話です。

「じつさい、できただけど。でも何か違う気がしたんだよね……」

わたしは、白ちゃん、涙末ちゃんを見ました。二人とも同じ気持ちだったのか、すぐに目が合います。すこし哀しそうな雰囲気の目付きでした。

「……で、先輩とは素で話せた、というわけですか」

もう何となく分かつてしまつたわたしは、先回り。

「まひ、まあね。話せやんと聞いてくれるし、簡単に否定しないし、

あと……」

「ノロケ出した」

涙未ちゃんの一言で黙る月島さん。白けやんのオーラもやや、剣呑な方向にシフトです。

すこし、緊張した空気が流れます。

「え、えっと」

それをほぐそうとしたのか、涙未ちゃんがわざとらしく陽気な声を出しました。

「ま、まあ、とりあえずよかつたよね。手紙も戻ってきたし、月島サンのことも分かったし」

その言葉に、白けやんの雰囲気が和らきます。

「うん……手紙、持つててくれて本当によかつたよ。ありがとうございます。

「い、いってば。こんなのは、全然」

柄にもなく、……と言つたら失礼ですが……照れた様子の月島さんです。

「白さんが落としただけなんて、気が抜けるオチだよねっ」

涙未ちゃんがそう言つた瞬間、月島さんの顔色が変わりました。

「う、うん……そうね」

目があつちいつか、泳いでます。

拳動不審。

「何か、あやしいですね」

「えつ」

「本当に、拾つただけなんですか？」

「ほ、本当だよ」

目が泳いでます。あつちいつか……一咲ちゃんのほうを見ないようにしてるのは、彼女が怖いからでしょうか。

「白状したほうが身のためですよ？ 今なら許してあげますから」

「わっ、分かったよー。まつよ、本当のじとまつかり  
初めからそうしておけばいいのです。

「手紙、ほんとうは」

そのとき、五時間田前の予鈴が鳴りました。  
わたしたちのお休み……憩いのときの終わりを告げる、騒々し  
い鐘の音。

妙に長く感じられる、その音が鳴り終わった後、いちばん最初に  
喋り出したのは、わたしどもなく、円島さんでもない

「……手紙、ほんとうは、私が円島さんに渡したの」

とてもつらそうな顔をした、一咲ちゃんでした。

「……えつ？」

驚き声は、白ちゃんのもの。だけど、わたしも、涙末ちゃんも、同じ気持ちでした。

「白の手紙、円島さんに渡したのは、私」

「何、言つてゐるの」

白ちゃんの顔は、半分笑つたままで固まつてこます。

「うわだよね？」

「うそじやない」

一咲ちゃんはまったく笑つていなくて、それどころかいつもよりずっと険しい顔をしていて、だからわたしたちはみんな、はつきりと理解してしまいました。

一咲ちゃんは、うそを言つてこない。

白ちゃんの手紙を盗み出して、円島さんに渡したのは、一咲ちゃんだと。

「なんで。どうして」

かすれた声で、白ちゃんは問いかけます。

ありえない。一咲ちゃんが白ちゃんの書にならぬよつたことをかるなんて、ありえません。そのはずでした。

なのに、何故？

「……私、白には、先輩と付き合つて欲しくなかつた」

「え」

「さつちやん的には、先輩じゃダメだつたりとつ。」

「ちがつ」

涙末ちゃんの言葉を、一咲ちゃんは、はつきりと否定します。

「先輩だから、ところひとつじやなくて。誰とも、付き合つて欲しくないの」

意味が分かりませんでした。誰とも付き合つた、といつてそん

な」ことを。

( まさか )

ふと、わたしは、ここ最近の一咲ちゃんの態度を思い出しました。先輩と白ちゃんの関わりに関する、ちこちな違和感の数々。その結果としての、根拠の薄い推測。

「応援してくれてるって、思つてたのに。どうして、そんなこと、言つの？」

「田さんを元気付けようとするときも、すこし必死だったし、手帳レター書くときだって、あんなにノリノリだったのに」涙未ちゃんの言つ通りです。一咲ちゃんは、確かに、白ちゃんのこと大切に思つているはずです。

でも、もしわたしの推測が正しいとするならば……、

白ちゃんを助けようとすることと、先輩と付き合つて欲しくないところ気持ちは、決して矛盾するものではありません。

「一咲ちゃん……ほんとうは、私のこと、きらいなの？」

「ちがうー。」「ちがうー。」  
聞いたこともないほど大きな声で、一咲ちゃんは、とつぜん叫びました。

「嫌いなんてことない。ぜつたい、そんなことない」「じゃあ、どうして」

「私は」

頬を桃色に染めて。きつと白ちゃんを見すぎて。つり田姫味のせいで睨みつけるようになつてしまつてしまつますが、そんな状態で、一咲ちゃんは自分の思いを吐露します。

「しつ、白のことが、好きなんだ」

それに対し、白ちゃんはただ、困惑を顔に浮かべただけ。

「えつ、よ、よく分からなによ、じゃあ、なんで……」

「友だちとして、つていう意味じゃなくて」

「えつ」

「その、……恋愛の、対象として」

「え」

……やつぱり。

田ひやんは……、田をこつぱに見開いて、口半開きの状態で、固まつてしまつてます。

五秒くらい、やつしていたでしょうか。

「え、ええーつー?」

「さつ、さつちゃんーーー?」

田ひやん涙末ちゃん、大慌て。

「えつ、一咲ちや、好き? わたし?」

あたふたと、自分を揺さして、それから一咲ちゃんをせします。頷く一咲ちゃん。

「ええーつ?」

白ちゃんまで頬を桃色に染めて、両手を当てて俯きます。「一咲ちゃんが……私? ええつ?」ぶつぶつと。「あつ、だから、私と先輩が……なるほど……じゃなくて。ええつと」状況に思考がついていってません。

「じや、じやあそ、畠せつちゃんが書いたラブレターって、もしかして白たんに?」

一咲ちゃんは、答えません。ただ、俯いて、耳まで赤くしています。

それが答えでした。

「う、うわあ……」

おののいているのか感心しているのか分からないような声をあげて、涙末ちゃんは後ずさります。

状況が混沌としてきたので、わたしは聞きたいことを聞きます。いつからなんですかとか、色々質問はあるけれど、

「一咲ちゃん。どうあるつもりですか。これか? けつせよく重要なのは、そこだと思います。

一咲ちゃんは、長いあいだ、黙っていました。

白ちゃんも、他のみんなも。一咲ちゃんが口を開くのを、じっと

待ちました。

やがて彼女は、口を開きます。意外と落ち着いた口調でした。

「白のことは、諦める」

「……ですか」

それは、予想範囲内の答えでした。

けれど、その次は。

「保健室にも、もう来ない」

「えつ」

「もう、ここには居られない。私は、自分の気持ちを優先して、白の気持ちを台無しにしようとしたんだから……白の側にいる資格なんか、ない」

「そんな。一咲ちゃん？」

慌てたのは白ちゃんです。でも、一咲ちゃんは、堰が切れたように言葉を重ねていきます。彼女じしんが、してしまったこと。罪を。「私は、白が失恋すればいいと思った。白のラブレターがなくなつて、月島さんと先輩が付き合えば、白は先輩のことを諦めざるを得なくなる。そうなつたとき、慰めてあげれば、もしかしたら つて思った」

一咲ちゃんは月島さんを見て、続けます。

「そのうえ、ラブレターを月島さんに渡せば、勝手に捨ててくれるだろつし盗んだのを彼女のせいにできる、と思つた」

「う、黒い」

わたしは眩いた涙末すけを睨みつけました。茶化す場面じゃないのです。

「そう、私は、腹黒くて……汚いんだ」

ほり見なさい、と言つて涙末すけをはたきたい気分になります。

「だから、もう……ここには、来ないよ」

ぎゅっと引き結んだくちびると、固く握り締めた両手のこぶしが、彼女の心中を表現しているようでした。じつと、耐える心。後悔と、後ろ向きの決意。

「「」ねん、白。本当に、「」ねん……でも、本当に、白の「」ねんが、なわけじゃないから」

田ちゃんは、答えませんでした。

「「」ねん……」

一咲ちゃんが一度田に謝つて、すこしだけ黙つたあとで。  
田ちゃんは、よつやく口を開きました。

「……私は、「」ねん」

「え……」

顔をあげた一咲ちゃんの田せ、すこしお、潤んでいました。

「私、やっぱり、先輩の「」じが好きだから。一咲ちゃんの氣持ちは、うれしい、けど……やつぱり、受け止められない、と想つ」

「うん」

一咲ちゃんの田か、今にも涙が溢れそうです。

「でも、……わがままかも、しれないけど」

すこしだけ、言ごづらそう。田ちゃんは続けます。

「一咲ちゃんが保健室に来なくなるのは、私、いやだな……、ひとりでここに来るのは、ちょっと不安だよ」

ぴたりと、涙が止まりました。数度の瞬きに押し出された、「」へ  
小さなしづくが頬を伝つて落ちただけ。

「でも、私

「それとも、一咲ちゃんはもう、私がいねどいねは来たくない……？」

「？」

田ちゃん、その聞き方は……すこしここかんじです。  
案の定、一咲ちゃんは慌て始めました。

「ちっ、ちがう。それは違う」

「だったら、いいんじゃない、そんなに気にしなくて。手紙は戻ってきたんだしさ」

畳み掛ける涙未ちゃん、「」へんそつだよ、と田ちゃんが相槌を打ちます。

「結果オーライってことだね。さあやんだって、もう「」さん」と

しないでしょ？」

「そう、だけど……でも」

それでも納得しない、一咲ちゃん。

段々わたしは、じれったくなつてきました。

誰も、一咲ちゃんに保健室から出て行けなんて言つてません。でも彼女的には何か引っかかる様子。どうすればいいんでしょうね。

「私は、こんなに、悪いことしたの?」「たゞ

その言葉で、わたしはピーンときました。

単純な話し。悪いことしたなら……

「償えばいいです」

「つぐない?」

一咲ちゃんは、本来まじめです。

だから、正論で攻めればオーケーなのです。

「罰を与えます」

「罰つけて、もみじ」「わ、やくらひちゃん?..」

驚いた一人が、わたしを制止しようとします、が。

「いい」

一咲ちゃんは、じつに真面目な様子で頷きました。立派な、覚悟の表情です。

「何でもする。それだけのことを、私はしたから」

「……では、いまから言つ」と、ちゃんとじつてくださいね

「やくらひちゃん、罰なんか」

「いいんですよ、白ちゃん。これは一咲ちゃんが望んでる」となんですか。まず、最初に「こいつがあるの?」白ちゃんの声を無視して、わたしは続けます。

「毎日、白ちゃんをしつかうと保健室まで送り届ける」と

「はい?」

「次に」「待つて、葉桜。それは」「涙末ちゃんともつと

仲良くする」と

「えつー」とこつのは一咲ちゃんの叫び声。

涙未ちゃんは微妙に傷ついた表情で、

「……いや、もつ仲良くしてゐつもつ、だつたんだけど。ひどいな  
れつねやん」

「い、いめえ」

「あとね」

「まだあるの……」

「いこいこてんとわせ、もつすこし隠つてくださこ。やみしこのど」  
「ひ、と詰める一咲ちゃん。今言つた罰三つの中ではこちばんき  
つかうな反応です。

「……ぜ、善処する。でも、私、無口だから」

「十分です」

わたしはわざとらしく、額をました。

「……とこいへりこなんですけど、田ちゃん涙未ちゃん。他に何か  
ありますか？」

「人に流し田を送つて皮肉げに笑い、煽るわたしです。  
「私からも、お願ひしたいな。もうちょっと喋つてほしー」

「お願いじやないですよ。罰です」

「え？ ジヤあ、えつと。喋りなわいー」命令になりました。

「わ、わかった……白がそう言つなら」

「じゃあぼくの罰は、田たんに向けて書いたラブレター公開！」  
わたしは無言で涙未すけの頭にチヨップを入れました。

「な、何するの」

「リアル罰は禁止です」

「うう、チャンスだと思ったのに……じゃあ、」

「今ので罰権利は終了です」

「うそつー？」

「まじです。発言権は一回のみです。言つてしませんでしたが

「ひどい」

そんな心底残念そうな顔しないでほしー。

「……と、こうわけで。以上の罰を受けるなら、わたしたちはあなたを許しましょう。ね？」

「うん、と頷く一人です。

「あ、ありがとウ。みんな。」めん

一咲ちゃんはどことなくほつとした様子で、彼女には珍しい表情つまり、微笑み、を浮かべます。もう保健室に来ないなんておかしなことは、言いませんでした。

それが、いちばんです。

「なんか、よく分かんないけど……よかつたね」

収まりかけた空氣に混じる、円島さんの、一言。

「……まだいたんですか。すいません、正直忘れかけてました」「ひどいー。あたし、罪がぶされそうになつたのに」だつて悪者ですし。「……まあ、手紙のことがあつたから、ここに来やすくなつたのは確かだけだぞ」

「そうですか。一咲さんに感謝しないとですね」

「それもどうなの……？」

「まあ、それはともかく」

白ちゃんの手紙が返つて来て、円島さんと一咲ちゃんが本心を打ち明けはしましたけれど。そもそも問題は、解決していないのです。「あなたはどうするんです？ 先輩のこと」

「あ、あたしは」

「やっぱり好きだつて？」

わたしと涙末ちゃんは、一人して円島さんに詰め寄ります。諦めないと呟つながらば白ちゃんの恋敵、イコールわたしたちの敵です。そのへん、はつきりさせねばなりません。

「うう、すきだけどさあ……」

「けど、何ですか。分かりませんし」

「ちょ、ちょっと、落ち着いて」

問い合わせモードのわたしたちを制止したのは、意外にも、白ちゃんでした。

「そんな風に言つたら、円島さんだって正直な気持ちで話せないよ」「でも」反論しようとしたわたしを、田嶋ちゃんはすこし強い調子で制しました。

「でもじやないですか

なぜか丁寧語で。

「それじゃ、無理やりみたいだよ。円島さんと、同じになつたやつ

よ

「うひ、それは。

「たしかに……」

「……いや、セイヒで納得されると、あたしとしてもグサツと来るんだけどれ」

「でも、事実だよね」ぱつぱつと田嶋ちゃん。ちよつと怖いです。……こんなキャラでしたつけ。

「う、まあ。」めん

「私はぜつたい、円島さんの邪魔はしないよ。せど、円島さんも、私の邪魔はしないでほし」

「うん……」

「円島さん。私、この手紙、先輩に渡すよ」

「……むつ」

「円島さんも先輩のこと好きだつてよく分かったけど、私だつて好きだから」

「あ、あたしだつて」

その言葉を聞くと、田嶋ちゃんは、なぜか妙に満足そうな表情で頷きました。

そして、真剣な瞳で円島さんを見つめて……

「私、」

はつきつと、言いました。

「負けないよ」

円島さんは、はつと田を見開きました。

宣戦布告。

わあ白たんなんかカツコイイ、と涙未ちゃん。

わたしも、同じ気持ちでした。

白ちゃん、なんだか、強くなりましたね……。

円島さんとのことは、この分だと、もう心配いらないですね。先輩への恋についてはまだ決着してませんけど。

(あれ?)

わたしは心に引っかかりを感じました。何か、忘れてるような。まさにその瞬間。

がらりと、保健室の扉が開く音がしました。すこし切羽詰つたような、テンポの速い開閉音。

唐突に、わたしは思い出しました。

何事、と振り返るわたしたちの前に現れた、そのひとは 夕足先輩。

そういえば、保健室に入る前、連絡入れてたんですね。

「い、衣花さん、だいじょうぶ?」

ずいぶん急いで来たらしい先輩は、一息つくなりそう言いました。白ちゃんといえば、そんな様子を怪訝そうに見ています。当然といえば、当然ですが。

「ええと、先輩。何をそんなに急いでるんですか?」

「ついせつとき、県内さんからのメールに気付いて」

……遅つ。

ああなんだ、みたいな空気が流れます。せつかく授業抜け出してまで助けてに来てくれたのに、いざ到着してみればとっくに事件は終了後。遅れてきた王子、姫はもう助けを必要としていません うわあ、先輩ちょっと、かわいそつ。

「いや、」

なにか慰めの言葉でも、と思つたわたしに、女のこふたりの声がかぶさります。

『先輩つ、来るの、遅いです!』

白ちゃんと円島さん、完全なハーモニクス。

「ええつ？」

驚いた先輩の顔はちょっと間が抜けっていて、  
だからなのか、白ちゃんと月島さんは、声をそろえて笑い出しました。

白ちゃんの恋文が消えて、また戻ってきた日の翌日。

「こんにちはー」

いつものようにわたしたちが保健室で憩っていると、女生徒がひとり、挨拶しながらやつてきました。

「いらっしゃい。どうかした?」

「はい、ちょっと」

浅川先生に曖昧な返事をするとこころからして、どうやら病人怪我人の類ではないと知れます。

はて、とわたしは思いました。それならば、彼女は一体何の用で来たのかと。

見覚えのないひとでした。黒髪。前髪はおでこの真ん中あたりで切り揃えた姫カット。すこし日焼けした肌と一緒になると、すこしアンバランスなかんじがしました。

彼女、すなわち小麦姫力ちゃんは、とてとてと迷い足取りで、わたしたちが座るベッドのほうに歩いてきます。

その視線の先にあるのは、白ちゃんのベッド。

白ちゃんと夕足先輩が話しをしている、一人の世界でした。

小麦姫力ちゃんは、先輩からすこし離れたところで足を止めます。

「こんにちは、先輩」

「ああ、こんにちは。月島さん」

ええつ！

「来ちゃつた」

うふふ、とか笑つてどこからともなく奪つてきた椅子に腰掛ける小麦姫力ちゃん。

確かに……よく見ると、そしてよく声を聞くと、それは確かに月島さんでした。

「なつ、何しに來たんですか」

わたしは思わずそんな声をかけます。

「何しに、つて」月島小麦姫力さんは、まるで当然ですみたいな顔で言い放ちます。

「先輩に会いに来たに決まってるじゃない」「大事です！？」

つらたえたわたしは白ちゃんを見ますが、彼女は妙に落ち着いたもの。どうやら、何かひみつの談合が彼女らの間でなされたものと思われました。

「よろしくね、衣花」

「よろしく、月島さん」

うふふ、と笑い合つて一人の笑顔。こわいです目が笑つてませんから。

昨日、放課後。白ちゃんは改めて、先輩に恋文を渡しにいきました。  
ところが、やつやからずりに、月島さんもつこて行つたよつなのです。

そのときどんな会話が交わされて、彼女たちの恋にどんな結論が出たのか。それは、まだ、分かりません。

でも、白ちゃんと先輩と、あと月島さんがふつうに一緒になつて話すみたいなこの状況。

これを見るに、ひょっとしたら、結論なんか何も出てないのかもしません。

保留、だとしたら。

先輩あなた、煮え切らなすぎです。

+ + +

一咲ちゃんについて、すこし。

あの場では一応丸く収まつたものの、実はわたし、本当にちやんと「罰」を受けてくれるかはちょっとだけ心配していました。だつて、保健室に来てくれだなんて、一咲ちゃんの気持ちといつよりわたくしたちのわがままです。

でも、幸い、彼女はちゃんと約束を守つてくれています。  
それどころか、以前よりだいぶよく話しをしてくれるようになりました。

どうも、これまであんまり話をしなかつたのは、白ちゃんが好きだという感情を抑えるためでもあつたみたいですね。  
吹つ切れた、ということなんでしょうか。

だつたらいいな、すつきりできたらいいなと、わたしはそう願います。

+ + +

ある日の放課後。わたしはいつものように、保健室に入ります。  
一つあるベッドのうち、手前側……すなわちわたしの場所には、  
今日も涙末ちゃんが寝ています。ベッドからすこし離れた場所、保健室の隅っこには、定位置に陣取る一咲ちゃんの姿。白ちゃんのベッドは、カーテンが引かれていて中の様子は分かりません。

そして。

「またたく、なんであなたが来てるんですか」

保健室の真ん中には、最近よく来るようになつた、月島さんの姿が。

「(月島)は保健室ですよ。病人怪我人あるいは保健委員以外は立ち入り禁止です!」

白ちゃん派のわたしとしては、月島さんが毎日のようにやつてきては先輩と白ちゃんの間に割つて入るのが面白くありません。

「いいじやん。っていうか、相坂だつて病人じゃないでしょ?」

「涙末ちゃんは」

今日もわたしのベッドでぐうすか寝ています。よだれ、……あとおなか出でますし。

「……病人なんですよ。たぶん」

「……なるほど」

神妙な顔で納得する円島さん。

「納得したなら、出てお行きなさい」

「えーっ、でもあたしだって病弱だったよ。貧血持ちだった、中学の頃」

「過去話は不許可です」

「えー」

わざわざとらしい声を出して頭を抱える円島さん。顔笑つてますし。前髪さらりに刈りますよ。

「だいたい何ですかその髪型は。雰囲気変わりすぎですし」

茶髪で今風のパーーマだったのに、今は若干お菊モード。

「だから前のは作つてたつて言つたじやん。元々こつち系が趣味なんだよねあたし」

「むうっ。褐色のお仲間たちの元に帰りなさい!」

「何よ褐色つて。てゆうか、あたし抜けたしあのグループ!」

そんなんかんじでやりあつていると、円島さんは切り札を出してきやがりました。

「つてゆうか、あたし、保健委員だし」

「見たことないですし!？」

わたし、素早く一咲ちゃんに田配せ。うなずく一咲ちゃん。なんてこつたいです。

「さつ、サボりの癖に、権利主張だけは一丁前ですか」

「これからはちゃんと仕事をするし。だから、問題なし」

小憎らしい。

「どうなんですか、一咲ちゃん。この態度」

「……仕事するなら、いいんじゃない」

一咲ちゃんは、用島さんに対しては妙に甘い気がします。逆に夕

足先輩に向ける視線は、若干厳しょくな……。やつぱり、完全に

白ちゃんが好きだという気持ちが消えるわけではないのでしょうか。

開き直つて、逆に露骨になつた感もありますが。

月島さんは勝ち誇つた顔でわたしを一瞥すると、白ちゃんのベッド領域に闖入しました。

「こんにちは、先輩」

「こんにちは、月島さん」

「こんにちは月島さん。今日も来たんだね」

「あ、衣花、こんにちは。いたんだね。体弱いんだから、家で寝てればいいのに」

「月島さんこそ、物語が好きならこんなところに来てないで、図書室で本読めばいいのに」

「あたしより自分の体の心配したほうがよくなない？ ほら、今も顔ちょっと赤いよ熱あるんじゃない？ 今すぐ帰つたほうがいいよ？」

「自分の体のことならよく分かるよ、心配しないでね。それにここ保健室だから、へんに帰ろうとするより安心だし。月島さんこそ顔ちょっと赤いよ。ベッドもう埋まつてるし、歩けなくもなさそうだから早く帰つたほうがいいと思うよ？」

「はは、ありがとう衣花、心配してくれて」

「月島さんこそ、気遣つてくれてありがと」

「まあまあ一人とも……」

『先輩は黙つててください』 またハーモニクス。

「一人とも顔だけは和やかです。」

白ちゃん、キャラ変わつてゐるし。

「衣花も詩とか好きなら図書室いつて本よんだら？」

「私はいいよ、先輩とお話してゐるから。月島さんだけでどうぞ」

「なんだよ、じゃあ後で一緒にいく？」

「はいはい、あとでね」 いくんですか。

何がどうなつたのか、この一人、あれから妙に仲がいいようです。いえ、本人たちに言つと全力で否定されるのですが。けんかするほ

ど仲がいいと言つてあげたらす「」い剣幕で怒られました。

正直、ちょっと妬けるかも。

ほり、今もけつきょく、白ちゃんが横たわるベッドの端に円島さんが横座り。先輩と三人で和やかに話し始めました。いつたいどんな落ち着き方ですか、まつたく。

と、いう感じで。

わたしが脳内設立した謎部活である保健室部に、一人新入部員が増えてしまつたようです。新入というか侵入ですが。先輩も交え、これまでよりもすこしだけ、にぎやかで楽しくなつた保健室。まあ、わたしとしてはけよつと引っかかるところもありますけれど、白ちゃんがとても楽しそうなので良しとします。わたしたちは、体が弱くて。

それで憂鬱になることも、あります。

みんながいる、この保健室さえあれば、そんな憂鬱すべてを受け容れられる気がします。

優しい憂鬱。

この場所には、そんな言葉が似合ひよつた気がしました。願わくは、この場がいつまでもありますように。

白ちゃん風にいえば

せかいが、きれいでありますよつこ。

わたしあじぶんのベッドに腰掛け、白ちゃんがいるほうに目を向けます。仕切りの白いカーテンは閉じられていて、その向うから話し声が聞こえてきます。

カーテンをめくると、すこし背中の曲がつた、ちいさく細い肩が見えます。

振り返る、白ちゃん。

その顔には、とても楽しそうな笑顔が浮かんでいました。

そうして、わたしは挨拶します。

「田中ちゃん、こんにちわ」

「こんにちわ、さくらちゃん。今日せせかいで明るいね」

「そうですね」

ほほえんで頷き、わたしはいつものように聞いかけます。

「今日の調子は、どうですか？」

田中ちゃんは、今日もすこし蒼白い顔に、とてもきれいな笑顔を浮かべます。

「うん」

そして、ほつきつとした声で、答えてくれました。

「いつもよつよつと、元気だよ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1333e/>

---

てんだーぶるー。～せかいがきれいでありますように。

2010年10月8日15時02分発行